

宗助は先刻から縁側へ坐蒲団を持ち出して、日当りの好きな所へ気楽に胡坐をかいて見たが、やがて手に持っている雑誌を放り出すと共に、ごろりと横になった。秋日和名のつくほどの上天気なので、往來を行く人の下駄の響が、静かな町だけに、朗らかに聞えて来る。肱枕をして軒から上を見上げると、奇麗な空が一面に蒼く澄んでいる。その空が自分の寝ている縁側の、窮屈な寸法に較べて見ると、非常に広大である。たまの日曜にこうして緩く空を見るだけでもだいぶ違うなと思ひながら、眉を寄せて、ぎらぎらする日をしばらく見つめていたが、眩しくなつたので、今度はぐるりと寝返りをして障子の方を向いた。障子の中では細君が裁縫をしている。

「おい、好い天気だな」と話しかけた。細君は、「ええ」と云つたなりであつた。宗助も別に話したい訳でもなかつたと見えて、それなり黙ってしまった。しばらくすると今度は細君の方から、

「ちつと散歩でもしていられしやい」と云つた。しかしその時は宗助がただうんと言ふ生返事を返しただけであつた。

二三分して、細君は障子の硝子の所へ顔を寄せて、縁側に寝ている夫の姿を覗いて見た。夫はどう云う了見か両膝を曲げて海老のように窮屈になつてゐる。そうして両手を組み

合はして、その中へ黒い頭を突つ込んでゐるから、肱に挟まれて顔がちつとも見えない。

「あなたそんな所へ寝ると風邪引いてよ」と細君が注意した。細君の言葉は東京のような、東京でないような、現代の女学生に共通な一種の調子を持つてゐる。

宗助は両肱の中で大きな眼をぱちぱちさせながら、「寝やせん、大丈夫だ」と小声で答えた。

それからまた静かになつた。外を通る護謄車のベルの音が二三度鳴つた後から、遠くで鶏の時音をつくる声が聞えた。

宗助は仕立おろしの紡績織の背中へ、自然と浸み込んで来る光線の暖味を、襯衣の下で食ばるほど味いながら、表の音を聴くともなく聴いていたが、急に思ひ出したように、障子越しの細君を呼んで、

「御米、近來の近の字はどう書いたつけね」と尋ねた。細君は別に呆れた様子もなく、若い女に特有なけたたましい笑声も立てず、

「近江のおうの字じゃなくって」と答えた。

「その近江のおうの字が分らないんだ」

細君は立て切つた障子を半分ばかり開けて、敷居の外へ長い物指を出して、その先で近の字を縁側へ書いて見せて、

「こうでしよう」と云つたぎり、物指の先を、字の留つた所へ置いたなり、澄み渡つた空を一しきり眺め入つた。宗助は細君の顔も見ずに、

「やつぱりそうか」と云つたが、冗談でもなかつたと見えて、別に笑もしなかつた。細君も近の字はまるで氣にならない様子で、

「本当に好い御天気だわね」と半ば独り言のように云いながら、障子を開けたまままた裁縫を始めた。すると宗助は脇で挟んだ頭を少し擡げて、

「どうも字と云うものは不思議だよ」と始めて細君の顔を見た。

「なぜ」

「なぜって、いくら容易い字でも、こりや変だと思つて疑ぐり出すと分らなくなる。この間も今日の今の字で大変迷つた。紙の上へちゃんと書いて見て、じつと眺めていると、何だか違つたような気がする。しまいには見れば見るほど今らしくなくなつて来る。——御前そんな事を経験した事はないかい」

「まさか」

「おれだけかな」と宗助は頭へ手を当てた。

「あなたどうかしていらつしやるのよ」

「やっぱり神経衰弱のせいかも知れない」

「そうよ」と細君は夫の顔を見た。夫はようやく立ち上つた。

針箱と糸屑の上を飛び越すように跨いで、茶の間の襖を開けると、すぐ座敷である。南が玄関で塞がれているので、突き当りの障子が、日向から急に這入つて来た眸には、うそ寒く映つた。そこを開けると、廂に逼るような勾配の崖が、縁鼻から聳えているので、朝の内は當って然るべきはずの日も容易に影を落さない。崖には草が生えている。下からして一側も石で畳んでないから、いつ壊れるか分らない虞があるのだけれども、不思議にまだ壊れた事がないそうで、そのためか家主も長い間昔のままにして放つてある。もっとも元は一面の竹藪だつたとかで、それを切り開く時に根だけは掘り返さ

ずに土堤の中に埋めて置いたから、地は存外緊つていますからねと、町内に二十年も住んでいる八百屋の爺が勝手口でわざわざ説明してくれた事がある。その時宗助はだつて根が残つていれば、また竹が生えて藪になりそうなものじゃないかと聞き返して見た。すると爺は、それがね、ああ切り開かれて見ると、そう甘く行くもんじゃありませんよ。しかし崖だけは大丈夫です。どんな事があつたつて壊えつこはねえんだからと、あたかも自分のものを弁護でもするように力んで歸つて行つた。

崖は秋に入つても別に色づく様子もない。ただ青い草の匂が褪めて、不揃にもじやもじやするばかりである。薄だの蔦だのと云う洒落たものに至つてはさらに見当らない。その代り昔の名残りの孟宗が中途に二本、上の方に三本ほどすつくりと立っている。それが多少黄に染まつて、幹に日の射すときなぞは、軒から首を出すと、土手の上に秋の暖味を眺められるような心持がする。宗助は朝出て四時過に歸る男だから、日の詰まるこの頃は、滅多に崖の上を覗く暇を有たなかつた。暗い便所から出て、手水鉢の水を手を受けながら、ふと廂の外を見上げた時、始めて竹の事を思い出した。幹の頂に濃かな葉が集まつて、まるで坊主頭のように見える。それが秋の日に酔つて重く下を向いて、寂そりと重なつた葉が一枚も動かない。

宗助は障子を閉て座敷へ歸つて、机の前へ坐つた。座敷とは云いながら客を通すからそう名づけるまでで、実は書齋とか居間とか云う方が穩当である。北側に床があるので、申訳のために変な軸を掛けて、その前に朱泥の色をした拙な花活

が飾ってある。欄間には額も何もない。ただ真鍮の折釘だけが二本光っている。その他には硝子戸の張った書棚が一つある。けれども中には別にこれと云って目立つほどの立派なものも這入っていない。

宗助は銀金具の付いた机の抽出を開けてしきりに中を検べ出したが、別に何も見つけ出さないうちに、はたりと締めてしまった。それから硯箱の蓋を取って、手紙を書き始めた。一本書いて封をして、ちよつと考えたが、

「おい、佐伯のうちは中六番町何番地だったかね」と襖越に細君に聞いた。

「二十五番地じゃなくって」と細君は答えたが、宗助が名宛を書き終る頃になって、

「手紙じゃ駄目よ、行ってよく話をして来なくっちゃ」と付け加えた。

「まあ、駄目までも手紙を一本出しておこう。それでいけなかったら出掛けるとするさ」と云い切ったが、細君が返事をしないので、

「ねえ、おい、それで好いだらう」と念を押した。

細君は悪いとも云い兼ねたと見えて、その上争いもしなかった。宗助は郵便を持ったまま、座敷から直ぐ玄関に出た。

細君は夫の足音を聞いて始めて、座を立ったが、これは茶の間の縁伝いに玄関に出た。

「ちよつと散歩に行つて来るよ」

「行つていらつしやい」と細君は微笑しながら答えた。

三十分ばかりして格子ががらりと開いたので、御米はまた裁縫の手をやめて、縁伝いに玄関へ出て見ると、帰ったと思

う宗助の代りに、高等学校の制帽を被った、弟の小六が這入って来た。袴の裾が五六寸しか出ないくらいの長い黒羅紗のマントの釦を外しながら、

「暑い」と云っている。

「だって余まりだわ。この御天氣にそんな厚いものを着て出るなんて」

「何、日が暮れたら寒いだろうと思って」と小六は云訳を半分しながら、嫂の後に跟いて、茶の間へ通ったが、縫い掛けてある着物へ眼を着けて、

「相変らず精が出ますね」と云ったなり、長火鉢の前へ胡坐をかけた。嫂は裁縫を隅の方へ押しやつておいて、小六の向へ来て、ちよつと鉄瓶をおろして炭を継ぎ始めた。

「御茶ならたくさんです」と小六が云った。

「厭？」と女学生流に念を押した御米は、

「じゃ御菓子は」と云つて笑いかけた。

「あるんですか」と小六が聞いた。

「いいえ、無いの」と正直に答えたが、思い出したように、「待ってちようだい、あるかも知れないわ」と云いながら立ち上がる拍子に、横にあつた炭取を取り退けて、袋戸棚を開けた。小六は御米の後姿の、羽織が帯で高くなった辺を眺めていた。何を探すのだかなかなか手間が取れそうなので、

「じゃ御菓子も廃しにしましょう。それよりか、今日は兄さんはどうしました」と聞いた。

「兄さんは今ちよいと」と後向のまま答えて、御米はやはり戸棚の中を探している。やがてぱたりと戸を締めて、

「駄目よ。いつの間にか兄さんがみんな食べてしまった」と

云いながら、また火鉢の向へ帰って来た。

「じゃ晩に何か御馳走なさい」

「ええしてよ」と柱時計を見ると、もう四時近くである。御米は「四時、五時、六時」と時間を勘定した。小六は黙って嫂の顔を見ていた。彼は實際嫂の御馳走には余り興味を持ち得なかったのである。

「姉さん、兄さんは佐伯へ行ってくれたんですかね」と聞いた。

「この間から行く行かつて云ってる事は云ってるのよ。だけど、兄さんも朝出て夕方に帰るんでしょう。帰ると草臥れちまって、御湯に行くのも大儀そうなんですもの。だから、そう責めるのも實際御氣の毒よ」

「そりや兄さんも忙がしいには違なからうけれども、僕もあれがきまらなないと氣がかりで落ちついて勉強もできないんだから」と云いながら、小六は真鍮の火箸を取って火鉢の灰の中へ何かしきりに書き出した。御米はその動く火箸の先を見ていた。

「だから先刻手紙を出しておいたのよ」と慰めるように云った。

「何て」

「そりや私もつい見なかったの。けれども、きつとあの相談よ。今に兄さんが帰って来たら聞いて御覧なさい。きつとそよう」

「もし手紙を出したのなら、その用には違ないでしょう」

「ええ、本当に出したのよ。今兄さんがその手紙を持って、出しに行ったところなの」

小六はこれ以上弁解のような慰藉のような嫂の言葉に耳を借したくなかった。散歩に出る閑があるなら、手紙の代りに自分で足を運んでくれたらよさそうなものだと思つと余り好い心持でもなかった。座敷へ来て、書棚の中から赤い表紙の洋書を出して、方々頁を剥つて見ていた。

二

そこに氣のつかなかった宗助は、町の角まで来て、切手と「敷島」を同じ店で買って、郵便だけはすぐ出したが、その足でまた同じ道を戻るのが何だか不足だったので、唧え煙草の煙を秋の日に揺つかせながら、ぶらぶら歩いてゐるうちに、どこか遠くへ行つて、東京と云う所はこんな所だと云う印象をはつきり頭の中へ刻みつけて、そうしてそれを今日の日曜の土産に家へ帰つて寝ようと云う氣になった。彼は年来東京の空氣を吸つて生きている男であるのみならず、毎日役所の行通には電車を利用して、賑やかな町を二度ずつはきつと往つたり来たりする習慣になつてゐるのではあるが、身体と頭に樂がないので、いつでも上の空で素通りをする事になつてゐるから、自分がその賑やかな町の中に生きてゐると云う自覺は近來とんと起つた事がない。もつとも平生は忙がしさに追われて、別段氣にも掛からないが、七日に一返の休日が来て、心がゆったりと落ちつける機会に出逢うと、不斷の生活が急にそわそわした上調子に見えて来る。必竟自分は東京の中に住みながら、ついまだ東京というものを見た事がないんだという結論に到着すると、彼はそこにいつも妙な物淋しさ

を感ずるのである。

そう云う時には彼は急に思い出したように町へ出る。その上、懷ふんこうに多少余裕よゆうでもあると、これで一つ豪遊ごうゆうでもしてみようかと考える事もある。けれども彼の淋しみは、彼を思い切った極端に駆り去るほどに、強烈の程度なものでないから、彼がそこまで猛進する前に、それも馬鹿馬鹿しくなつてやめてしまふ。のみならず、こんな人の常態として、紙入の底が大抵の場合には、輕拳けいけんを戒める程度内に膨らんでいるので、億劫おつうな工夫を凝らすよりも、懷ふんこう手てをして、ぶらりと家へ歸る方が、つい楽になる。だから宗助の淋しみは單なる散歩か勸工場縦覧かんこうばぐらいなところで、次の日曜まではどうかどうか慰藉いしやされるのである。

この日も宗助はともかくも思つて電車へ乗った。ところが日曜の好天気にもかかわらず、平常よりは乗客が少ないので例になく乗心地が好かった。その上乘客がみんな平和な顔をして、どれもこれも悠ゆうたりと落ちついて見えた。宗助は腰を掛けながら、毎朝例刻に先を争つて席を奪い合いながら、丸の内方面へ向う自分の運命を顧かえりみた。出勤刻限の電車の道伴みちづれほど殺風景なものはない。革かわにぶら下がるにしても、天鵞絨びろうどに腰を掛けるにしても、人間的な優しい心持の起った試ためしはいまだかつてない。自分もそれでたくさんだと考えて、器械きかいか何ぞと膝ひざを突き合せ肩を並べたかのごとくに、行きたい所まで同席して不意と下りてしまふだけであつた。前の御婆さんが八つぐらいになる孫娘の耳の所へ口を付けて何か云っているのを、傍そばに見ていた三十恰好がっこうの商家の御神おかみさんらしいのが、可愛らしがつて、年を聞いたり名を尋ねたりす

るところを眺ながめていると、今更いまさらながら別の世界に來たような心持がした。

頭の上には広告が一面に枠わくに嵌はめて掛けてあつた。宗助は平生これにさえ気がつかなかつた。何心なしに一番目のを読んで見ると、引越は容易にできますと云う移転会社の引札ひきふだであつた。その次には經濟を心得る人は、衛生に注意する人は、火の用心を好むものは、と三行に並べておいてその後あとに瓦斯竈ガスがまを使えと書いて、瓦斯竈から火の出ている画えまで添えてあつた。三番目には露国文豪トルストイ伯傑作「千古の雪」と云うのと、パンカラ喜劇小辰大一座と云うのが、赤地に白で染め抜いてあつた。

宗助は約十分もかかつて、すべての広告を丁寧ていねいに三返ほど読み直した。別に行つて見ようと思ふものも、買つて見たいと思ふものも無かつたが、ただこれらの広告が判然はつきりと自分の頭に映つて、そうしてそれを一々読み終おほせた時間のあつた事と、それをことごとく理解し得たと云う心の余裕が、宗助には少なからぬ満足を与えた。彼の生活はこれほどの余裕にすら誇りを感じずるほどに、日曜以外の出入りではいには、落ちついていられないものであつた。

宗助は駿河台下で電車を降りた。降りるとすぐ右側の窓硝子の中に美しく並べてある洋書に眼がついた。宗助はしばらくその前に立つて、赤や青や縞しまや模様の上に、鮮あざやかに叩たたき込んである金文字を眺めた。表題の意味は無論解るが、手に取つて、中を檢しらべて見ようという好奇心はちつとも起らなかった。本屋の前を通ると、きつと中へ這入はいつて見たくなつたり、中へ這入ると必ず何か欲しくなつたりするのは、宗助から云う

と、すでに一昔し前の生活である。ただ History of Gambling (博奕史) と云うのが、ことさらに美装して、一番真中に飾られてあったので、それが幾分か彼の頭に突飛な新し味を加えただけであつた。

宗助は微笑しながら、急忙しい通りを向側へ渡つて、今度は時計屋の店を覗き込んだ。金時計だの金鎖が幾つも並べてあるが、これもただ美しい色や恰好として、彼の眸に映るだけで、買いたいた簡を誘致するには至らなかった。その癖彼は一々絹糸で釣るした価格札を読んで、品物と見較べて見た。そうして實際金時計の安価なのに驚ろいた。

蝙蝠傘屋の前にもちよつと立ちどまつた。西洋小間物を売る店先では、礼帽の傍にかけてあつた襟飾りに眼がついた。自分の毎日かけているのよりも大変柄が好かつたので、価を聞いてみようかと思つて、半分店の中へ這入りかけたが、明日から襟飾りなどをかけ替えたところが下らない事だと思ひ直すと、急に墓口の口を開けるのが厭になつて行き過ぎた。呉服店でもたいぶ立見をした。鶉御召だの、高貴織だの、清凌織だの、自分の今日まで知らずに過ぎた名をたくさん覚えた。京都の襟新と云う家の出店の前で、窓硝子へ帽子の鏢を突きつけるように近く寄せて、精巧に刺繍をした女の半襟を、いつまでも眺めていた。その中にちよつと細君に似合いそうな上品なのが あつた。買つて行つてやろうかという気がちよつと起るや否や、そりや五六年前の事だと云う考が後から出て来て、せつかく心持の好い思ひつきをすぐ揉み消してしまつた。宗助は苦笑しながら窓硝子を離れてまた歩き出したが、それから半町ほどの間は何だかつまらないような気分がして、

往来にも店先にも格段の注意を払わなかつた。

ふと気がついて見ると角に大きな雑誌屋があつて、その軒先には新刊の書物が大きな字で広告してある。梯子のような細長い枠へ紙を張つたり、ペンキ塗の一枚板へ模様画みたような色彩を施こしたりしてある。宗助はそれを一々読んだ。著者の名前も作物の名前も、一度は新聞の広告で見たようでもあり、また全く新奇のようでもあつた。

この店の曲り角の影になつた所で、黒い山高帽を被つた三十ぐらいの男が地面の上へ気楽そうに胡坐をかい、ええ御子供衆の御慰みと云いながら、大きな護謨風船を膨らましてゐる。それが膨れると自然と達磨の恰好になつて、好加減な所に眼口まで墨で書いてあるのに宗助は感心した。その上一度息を入ると、いつまでも膨れている。かつ指の先へでも、手の平の上へでも自由に尻が据る。それが尻の穴へ楊枝のような細いものを突つ込むとしゅうつと一度に収縮してしまふ。

忙がしい往来の人は何人でも通るが、誰も立ちどまつて見るほどのものはない。山高帽の男は賑やかな町の隅に、冷やかに胡坐をかい、身の周囲に何事が起りつつあるかを感じざるもののごとくに、ええ御子供衆の御慰みと云つては、達磨を膨らましてゐる。宗助は一錢五厘出して、その風船を一つ買つて、しゅつと縮ましてもらつて、それを袂へ入れた。奇麗な床屋へ行つて、髪を刈りたくなつたが、どこにそんな奇麗なのがあるか、ちよつと見つからないうちに、日が限つて来たので、また電車へ乗つて、宅の方へ向つた。

宗助が電車の終点まで来て、運転手に切符を渡した時には、もう空の色が光を失いかけて、湿つた往来に、暗い影が射し募

る頃であつた。降りようとして、鉄の柱を握ったら、急に寒い心持がした。いっしょに降りた人は、皆な離れ離れになつて、事あり気に忙がしく歩いて行く。町のはずれを見ると、左右の家の軒から家根へかけて、仄白い煙りが大気の中に動いているように見える。宗助も樹の多い方角に向いて早足に歩を移した。今日の日曜も、暢びりした御天気も、もうすでおしまいだと思うと、少しはかないようなまた淋しいような一種の気分が起つて来た。そうして明日からまた例によつて例のごとく、せつせと働らかなくてはならない身体だと考へると、今日半日の生活が急に惜しくなつて、残る六日半の非精神的な行動が、いかにもつまらなく感ぜられた。歩いてゐるうちにも、日当の悪い、窓の乏しい、大きな部屋の模様や、隣りに坐つてゐる同僚の顔や、野中さんちよつと云う上官の様子ばかりが眼に浮かんた。

魚勝と云う肴屋の前を通り越して、その五六軒先の露次とも横丁ともつかない所を曲ると、行き当りが高い崖で、その左右に四五軒同じ構の貸家が並んでいる。ついこの間までは疎らな杉垣の奥に、御家人でも住み古したと思われる、物寂た家も一つ地所のうちに混つていたが、崖の上の坂井という人がここを買つてから、たちまち萱葺を壊して、杉垣を引き抜いて、今のような新しい普請に建て易えてしまった。宗助の家は横丁を突き当って、一番奥の左側で、すぐの崖下だから、多少陰気ではあるが、その代り通りからはもつとも隔つてゐるだけに、まあ幾分か閑静だろうと云うので、細君と相談の上、とくにそこを択んだのである。

宗助は七日に一返の日曜ももう暮れかかったので、早く湯

にでも入つて、暇があつたら髪でも刈つて、そうして緩くり晩食を食おうと思つて、急いで格子を開けた。台所の方で皿小鉢の音がする。上がろうとする拍子に、小六の脱ぎ棄てた下駄の上へ、気がつかずに足を乗せた。曲んで位置を調べているところへ小六が出て来た。台所の方で御米が、

「誰？ 兄さん？」と聞いた。宗助は、

「やあ、来ていたのか」と云いながら座敷へ上つた。先刻郵便を出してから、神田を散歩して、電車を降りて家へ帰るまで、宗助の頭には小六の小の字も閃めかなかった。宗助は小六の顔を見た時、何となく悪い事でもしたようにきまりが好くなかつた。

「御米、御米」と細君を台所から呼んで、

「小六が来たから、何か御馳走でもするが好い」と云いつけた。細君は、忙がしように、台所の障子を開け放したまま出て来て、座敷の入口に立つていたが、この分り切つた注意を聞くや否や、

「ええ今直」と云つたなり、引き返そうとしたが、また戻つて来て、

「その代り小六さん、憚り様。座敷の戸を閉てて、洋灯を点けてちょうだい。今私も清も手が放せないところだから」と依頼んだ。小六は簡単に、

「はあ」と云つて立ち上がった。

勝手では清が物を刻む音がする。湯か水をざあと流しへ空ける音がする。「奥様これはどちらへ移します」と云う声がする。「姉さん、ランプの心を剪る鋏はどこにあるんですか」と云う小六の声がする。しゅうと湯が沸つて七輪の火へかか

った様子である。

宗助は暗い座敷の中で黙然と手焙へ手を翳していた。灰の上に出た火の塊まりだけが色づいて赤く見えた。その時裏の崖の上の家主の家の御嬢さんがピアノを鳴らし出した。宗助は思い出したように立ち上がって、座敷の雨戸を引き縁側へ出た。孟宗竹が薄黒く空の色を乱す上に、一つ二つの星が燦めいた。ピアノの音は孟宗竹の後から響いた。

三

宗助と小六が手拭を下げて、風呂から帰って来た時は、座敷の真中に真四角な食卓を据えて、御米の手料理が手際よくその上に並べてあった。手焙の火も出がけよりは濃い色に燃えていた。洋灯も明るかった。

宗助が机の前の座蒲団を引き寄せて、その上に楽々と胡坐を掻いた時、手拭と石鹸を受取った御米は、

「好い御湯だった事？」と聞いた。宗助はただ一言、

「うん」と答えただけであつたが、その様子は素気ないと云うよりも、むしろ湯上りで、精神が弛緩した気味に見えた。

「なかなか好い湯でした」と小六が御米の方を見て調子を合せた。

「しかしああ込んだじゃ溜らないよ」と宗助が机の端へ肱を持たせながら、倦怠るそうに云った。宗助が風呂に行くのは、いつでも役所が退けて、家へ帰ってからの事だから、ちょうど人の立て込む夕食前の黄昏である。彼はこの二三カ月間ついぞ、日の光に透かして湯の色を眺めた事がない。それなら

まだしもだが、ややともすると三日も四日もまるで銭湯の敷居を跨がずに過してしまふ。日曜になったら、朝早く起きて何よりも第一に奇麗な湯に首だけ浸ってみようと、常は考えているが、さてその日曜が来て見ると、たまに悠くり寝られるのは、今日ばかりじゃないかと云う氣になつて、つい床のうちでぐずぐずしているうちに、時間が遠慮なく過ぎて、ええ面倒だ、今日はやめにして、その代り今度の日曜に行こうと思ひ直すのが、ほとんど惰性のようになってゐる。

「どうかして、朝湯にだけは行きたいね」と宗助が云った。

「その癖朝湯に行ける日は、きつと寝坊なさるのね」と細君は調戲うような口調であつた。小六は腹の中でこれが兄の性来の弱点であると思ひ込んでいた。彼は自分で学校生活をしているにもかかわらず、兄の日曜が、いかに兄にとって貴といかを会得できなかった。六日間の暗い精神作用を、ただこの一日で暖かに回復すべく、兄は多くの希望を二十四時間のうちに投げ込んでゐる。だからやりたい事があり過ぎて、十の二三も実行できない。否、その二三にしろ進んで実行にかかると、かえつてそのために費やす時間の方が惜しくなつて来て、ついまた手を引込めて、じつとしてゐるうちに日曜はいつか暮れてしまふのである。自分の氣晴しや保養や、娯楽もしくは好尚についてですら、かように節儉しなければならぬ境遇にある宗助が、小六のために尽さないのは、尽さないのではない、頭に尽す余裕のないのだとは、小六から見ると、どうしても受取れなかつた。兄はただ手前勝手な男で、暇があればぶらぶらして細君と遊んではかりいて、いっこう頼りにも力にもなつてくれない、真底は情合に薄い人だぐら

いに考えていた。

けれども、小六がそう感じ出したのは、つい近頃の事で、実を云うと、佐伯との交渉が始まって以来の話である。年の若いだけ、すべてに性急な小六は、兄に頼めば今日明日にも方がつくものと、思い込んでいたのに、何日までも埒が明かないのみか、まだ先方へ出かけてもくれないので、だいぶ不平になったのである。

ところが今日帰りを待ち受けて逢つて見ると、そこが兄弟で、別に御世辞も使わないうちに、どこか暖味のある仕打も見えるので、つい云いたい事も後廻しにして、いっしょに湯になんぞ這入つて、穏やかに打ち解けて話せるようになって来た。

兄弟は寛ろいで膳についた。御米も遠慮なく食卓の一隅を領した。宗助も小六も猪口を二三杯ずつ干した。飯にかかる前に、宗助は笑いながら、

「うん、面白いものが有ったつけ」と云いながら、袂から買って来た護謨風船の達磨を出して、大きく膨らませて見せた。そうして、それを椀の蓋の上へ載せて、その特色を説明して聞かせた。御米も小六も面白がって、ふわふわした玉を見ていた。しまいに小六が、ふうっと吹いたら達磨は膳の上から畳の上へ落ちた。それでも、まだ覆らなかつた。

「それ御覧」と宗助が云った。

御米は女だけに声を出して笑ったが、御櫃の蓋を開けて、夫の飯を盛いながら、「兄さんも随分呑気ね」と小六の方を向いて、半ば夫を弁護するように云った。宗助は細君から茶碗を受取つて、一言の

弁解もなく食事を始めた。小六も正式に箸を取り上げた。

達磨はそれぎり話題に上らなかつたが、これが緒になつて、三人は飯の済むまで無邪気に長閑な話をつづけた。しまいに小六が氣を換えて、

「時に伊藤さんもとんだ事になりましたね」と云い出した。

宗助は五六日前伊藤公暗殺の号外を見たとき、御米の働いている台所へ出て来て、「おい大変だ、伊藤さんが殺された」と云つて、手に持った号外を御米のエプロンの上に乗せたなり書斎へ這入つたが、その語気からいうと、むしろ落ちついたものであつた。

「あなた大変だつて云う癖に、ちつとも大変らしい声じゃなくつてよ」と御米が後から冗談半分にわざわざ注意したくない事はないが、宗助はそれに目を通してゐるんだか、いな

いんだか分らないほど、暗殺事件については平氣に見えた。夜歸つて来て、御米が飯の御給仕をするときなどに、「今日も伊藤さんの事が何か出ていて」と聞く事があるが、その時には「うんだいぶ出ている」と答えるぐらいだから、夫の隠袋の中に畳んである今朝の読殻を、後から出して読んで見ないと、その日の記事は分らなかつた。御米もつまりは夫が帰宅後の会話の材料として、伊藤公を引合に出すぐらいのところだから、宗助が進まない方向へは、たつて話を引張りたくはなかつた。それでこの二人の間には、号外発行の当日以後、今夜小六がそれを云い出したまでは、公けには天下を動かしつつある問題も、格別の興味をもって迎えられていなかったのである。

「どうして、まあ殺されたんでしよう」と御米は号外を見たとき、宗助に聞いたと同じ事をまた小六に向って聞いた。

「短銃をポンポン連発したのが命中したんです」と小六は正直に答えた。

「だけどさ。どうして、まあ殺されたんでしよう」

小六は要領を得ないような顔をしている。宗助は落ちついた調子で、

「やっぱり運命だなあ」と云って、茶碗の茶を旨そうに飲んだ。御米はこれでも納得ができなかったと見えて、

「どうしてまた満洲などへ行ったんでしよう」と聞いた。

「本当にな」と宗助は腹が張って充分物足りた様子であった。

「何でも露西亞に秘密な用があったんだそうです」と小六が真面目な顔をして云った。御米は、

「そう。でも厭ねえ。殺されちゃ」と云った。

「おれみたような腰弁は、殺されちゃ厭だが、伊藤さんみたような人は、哈爾濱へ行つて殺される方がいいんだよ」と宗助が始めて調子づいた口を利いた。

「あら、なぜ」

「なぜって伊藤さんは殺されたから、歴史的に偉い人になれるのさ。ただ死んで御覧、こうはいかないよ」

「なるほどそんなものかも知れないな」と小六は少し感服したようだったが、やがて、

「とにかく満洲だの、哈爾濱だのって物騒な所ですね。僕は何だか危険なような心持がしてならない」と云った。

「そりゃ、色んな人が落ち合ってるからね」

この時御米は妙な顔をして、こう答えた夫の顔を見た。宗

助もそれに気がついたらしく、

「さあ、もう御膳を下げたら好かろう」と細君を促がして、先刻の達磨をまた畳の上から取って、人指指の先へ載せながら、「どうも妙だよ。よくこう調子好くできるものだと思ってね」と云っていた。

台所から清が出て来て、食い散らした皿小鉢を食卓ごと引いて行った後で、御米も茶を入れ替えるために、次の間へ立ったから、兄弟は差向いになった。

「ああ奇麗になった。どうも食った後は汚ないものでね」と宗助は全く食卓に未練のない顔をした。勝手の方で清がしきりに笑っている。

「何がそんなにおかしいの、清」と御米が障子越しに話しかける声が聞えた。清はへえと云ってなお笑い出した。兄弟は何にも云わず、半ば下女の笑い声に耳を傾けていた。

しばらくして、御米が菓子皿と茶盆を両手に持つて、また出て来た。藤蔓の着いた大きな急須から、胃にも頭にも応えない番茶を、湯呑ほどな大きな茶碗に注いで、兩人の前へ置いた。

「何だって、あんなに笑うんだい」と夫が聞いた。けれども御米の顔は見ずにかえつて菓子皿の中を覗いていた。

「あなたがあんな玩具を買って来て、面白そうに指の先へ乗せていらっしやるからよ。子供もない癖に」

宗助は意にも留めないように、軽く「そうか」と云ったが、後から緩くり、

「これでも元は子供があったんだがね」と、さも自分で自分の言葉を味わっている風につけ足して、生温い眼を挙げて細

君を見た。御米はぴたりと黙ってしまった。

「あなた御菓子食べなくって」と、しばらくしてから小六の方へ向いて話し掛けたが、

「ええ食べます」と云う小六の返事を聞き流して、ついと茶の間へ立って行つた。兄弟はまた差向いになった。

電車の終点から歩くと二十分近くもかかる山の手の奥だけあって、まだ宵の口だけれども、四隣は存外静かである。時々表を通る薄歯の下駄の響が冴えて、夜寒がしだいに増して来る。宗助は懷手をして、

「昼間は暖たかいが、夜になると急に寒くなるね。寄宿じゃもう蒸気を通してあるかい」と聞いた。

「いえ、まだです。学校じゃよっぽど寒くならなくっちゃ、蒸気なんか焚きやしません」

「そうかい。それじゃ寒いだろう」

「ええ。しかし寒いくらいどうでも構わないつもりですが」と云つたまま、小六はすこし云い淀んでいたが、しまいにとうとう思い切つて、

「兄さん、佐伯の方はいったいどうなるんでしょう。先刻姉さんから聞いたたら、今日手紙を出して下すつたそうですが」

「ああ出した。二三日中に何とか云つて来るだろう。その上でまたおれが行くともどうともしようよ」

小六は兄の平気な態度を、心の中では飽足らず眺めた。しかし宗助の様子にどこと云つて、他を激させるような鋭いところも、自らを庇護うような卑しい点もないので、喰つてかかる勇氣はさらになかった。ただ

「じゃ今日まであのままにしてあつたんですか」と單に事実

を確めた。

「うん、実は済まないがあのままだ。手紙も今日やつの事で書いたくらいだ。どうも仕方がないよ。近頃神経衰弱でね」と真面目に云う。小六は苦笑した。

「もし駄目なら、僕は学校をやめて、いつそ今のうち、満洲か朝鮮へでも行こうかと思つてゐるんです」

「満洲か朝鮮？ ひどくまた思い切つたもんだね。だって、御前先刻満洲は物騒で厭だつて云つたじゃないか」

用談はこんなところに往つたり来たりして、ついに要領を得なかつた。しまいに宗助が、

「まあ、好いや、そう心配しないでも、どうかなるよ。何しろ返事の来しだい、おれがすぐ知らせてやる。その上でまた相談するでしょう」と云つたので、談話に区切がついた。

小六が帰りがけに茶の間を覗いたら、御米は何にもしらずに、長火鉢に倚りかかつていた。

「姉さん、さようなら」と声を掛けたら、「おや御帰り」と云いながらようやく立つて来た。

四

小六の苦にしていた佐伯からは、予期の通り二三日して返事があつたが、それは極めて簡単なもので、端書でも用の足りるところを、鄭重に封筒へ入れて三銭の切手を貼った、叔母の自筆に過ぎなかつた。

役所から歸つて、筒袖の仕事着を、窮屈そうに脱ぎ易えて、火鉢の前へ坐るや否や、抽出から一寸ほどわざと余して差し

込んであった状袋に眼が着いたので、御米の汲んで出す番茶を一口呑んだまま、宗助はすぐ封を切った。

「へえ、安さんは神戸へ行っただってね」と手紙を読みながら云った。

「いつ?」と御米は湯呑を夫の前に出した時の姿勢のままで聞いた。

「いつとも書いてないがね。何しろ遠からぬうちには帰京仕るべく候間と書いてあるから、もうじき帰って来るんだろう」「遠からぬうちなんて、やっぱり叔母さんね」

宗助は御米の批評に、同意も不同意も表しなかった。読んだ手紙を巻き納めて、投げるようにそこへ放り出して、四五日目になる、ざらざらした腮を、気味わるそうに撫で廻した。

御米はすぐその手紙を拾ったが、別に読もうとしなかった。それを膝の上へ乗せたまま、夫の顔を見て、

「遠からぬうちには帰京仕るべく候間、どうだって云うの」と聞いた。

「いずれ帰ったら、安之助と相談して何とか御挨拶を致しますと云うのさ」

「遠からぬうちじゃ曖昧ね。いつ帰るとも書いてなくって」「いいや」

御米は念のため、膝の上の手紙を始めて開いて見た。そうしてそれを元のように畳んで、

「ちよつとその状袋を」と手を夫の方へ出した。宗助は自分と火鉢の間に挟まっている青い封筒を取って細君に渡した。御米はそれをふっと吹いて、中を膨らまして手紙を収めた。そうして台所へ立った。

宗助はそれぎり手紙の事には気を留めなかった。今日役所で同僚が、この間英吉利から来遊したキチナー元帥に、新橋の傍で逢ったと云う話を思い出して、ああ云う人間になると、世界中どこへ行っても、世間を騒がせるようにできているようだ、実際そういう風に生れついて来たものかも知れない。自分の過去から引き摺ってきた運命や、またその続きとして、これから自分の眼前に展開されべき将来を取って、キチナーと云う人のそれに比べて見ると、とうてい同じ人間とは思えないぐらい懸け隔たっている。

こう考えて宗助はしきりに煙草を吹かした。表は夕方から風が吹き出して、わざと遠くの方から襲って来るような音がある。それが時々やむと、やんだ間は寂として、吹き荒れる時よりはなお淋しい。宗助は腕組をしながら、もうそろそろ火事の半鐘が鳴り出す時節だと思った。

台所へ出て見ると、細君は七輪の火を赤くして、肴の切身を焼いていた。清は流し元に曲んで漬物を洗っていた。二人とも口を利かずにせつせと自分のやる事をやっている。宗助は障子を開けたなり、しばらく肴から垂る汁か膏の音を聞いていたが、無言のまままた障子を閉てて元の座へ戻った。細君は眼さえ肴から離さなかった。

食事を済まして、夫婦が火鉢を間に向い合った時、御米はまた

「佐伯の方は困るのね」と云い出した。

「まあ仕方がない。安さんが神戸から帰るまで待つよりほかに道はあるまい」

「その前にちよつと叔母さんに逢って話をしておいた方が好

かなくって」

「そうさ。まあそのうち何とか云って来るだろう。それまで打遣うちやっておこうよ」

「小六さんが怒ってよ。よくって」と御米はわざと念を押しておいて微笑した。宗助は下眼を使って、手に持った小楊枝こようじを着物の襟えりへ差した。

中なかいちんち一日置いて、宗助はようやく佐伯からの返事を小六に知らせてやった。その時も手紙の尻しりに、まあそのうちどうかなるだろうと云う意味を、例のごとく付け加えた。そうして当分はこの事件について肩が抜けたように感じた。自然の経過なりゆきがまた窮屈に眼の前に押し寄せて来るまでは、忘れている方が面倒がなくて好いぐらいな顔をして、毎日役所へ出てはまた役所から帰って来た。帰りも遅いが、帰ってから出かけるなどという億劫おつうな事は滅多めったになかった。客はほとんど来ない。用のない時は清を十時前に寝ねかす事さえあった。夫婦は毎夜同じ火鉢の両側に向き合って、食後一時間ぐらい話をした。話の題目は彼らの生活状態に相応した程度のものであった。けれども米屋の払を、この三十日みそかにはどうしたものだろうという、苦しい世帯話は、いまだかつて一度も彼らの口には上らなかつた。と云って、小説や文学の批評はもちろんの事、男と女の間を陽炎かげろうのように飛び廻る、花やかな言葉のやりとりはほとんど聞かれなかつた。彼らはそれほどの年輩でもないのに、もうそこを通り抜けて、日ごとに地味になって行く人のようにも見えた。または最初から、色彩の薄い極きまめて通俗の人間が、習慣的に夫婦の関係を結ぶために寄り合ったようにも見えた。

上部うわべから見ると、夫婦ともそう物に屈托くつたくする気色けしきはなかつた。それは彼らが小六の事に関して取った態度について見てもほぼ想像がつく。さすが女だけに御米は二度、

「安さんは、まだ帰らないんでしょうかね。あなた今度こんだの日曜ぐらいいに番町まで行って御覧なさらくって」と注意した事があるが、宗助は、

「うん、行っても好い」ぐらいな返事をするだけで、その行っても好い日曜が来ると、まるで忘れたように済ましている。御米もそれを見て、責める様子もない。天気が好いと、「ちと散歩でもしていらいっしやい」と云う。雨が降ったり、風が吹いたりすると、

「今日は日曜で仕合せね」と云う。

幸にして小六はその後一度もやって来ない。この青年は、至って凝りこり性の神経質で、こうと思うとどこまでも進んで来るところが、書生時代の宗助によく似ている代りに、ふと気が変ると、昨日きのうの事はまるで忘れたように引っ繰り返って、けろりとした顔をしている。そこも兄弟だけあって、昔の宗助にそのままである。それから、頭脳が比較的明瞭めいりょうで、理路に感情を注ぎ込むのか、または感情に理窟りくつの枠わくを張るのか、どっちか分らないが、とにかく物に筋道を付けないと承知しないし、また一返筋道いっぺんが付くと、その筋道を生かさなくってはおかないように熱中したがる。その上体質の割合に精力がつづくから、若い血気に任せて大抵の事はする。

宗助は弟を見るたびに、昔の自分が再び蘇生そせいして、自分の眼の前に活動しているような気がしてならなかつた。時には、はらはらする事もあった。また苦々にくにくしく思う折もあった。そ

う言う場合には、心のうちに、当時の自分が一図に振舞った
苦い記憶を、できるだけしばしば呼び起させるために、とく
に天が小六を自分の眼の前に据え付けるのではなからうかと
思った。そうして非常に恐ろしくなった。こいつもあるいは
おれと同一の運命に陥るために生れて来たものではなからうか
と考えると、今度は大いに心がかりになった。時によると心
がかりよりは不愉快であった。

けれども、今日まで宗助は、小六に対して意見がましい事
を云った事もなく、将来について注意を与えた事もなく
あった。彼の弟に対する待遇方はただ普通凡庸のものであった。
彼の今の生活が、彼のような過去を有っている人とは思えな
いほどに、沈んでいるごとく、彼の弟を取り扱う様子にも、
過去と名のつくほどの経験を有った年長者の素振は容易に出
なかった。

宗助と小六の間には、まだ二人ほど男の子が挟まっていた
が、いずれも早世してしまったので、兄弟とは云いながら、
年は十ばかり違っている。その上宗助はある事情のために、
一年の時京都へ転学したから、朝夕いっしょに生活していた
のは、小六の十二三の時までである。宗助は剛情な聴かぬ気
の腕白小僧としての小六をいまだに記憶している。その時分
は父も生きていたし、家の都合も悪くはなかったもので、抱車夫
を邸内の長屋に住まわして、楽に暮らしていた。この車夫に小
六よりは三つほど年下の子供があつて、始終小六の御相手を
して遊んでいた。ある夏の日盛りに、二人して、長い竿のさ
きへ菓子袋を括り付けて、大きな柿の木の下で蟬の捕りくら
をしているのを、宗助が見て、兼坊そんなに頭を日に照らし

つけるると霍乱になるよ、さあこれを被れと云って、小六の古
い夏帽を出してやった。すると、小六は自分の所有物を兄が
無断で他にくれてやったのが、癪に障ったので、突然兼坊の
受取った帽子を引たくって、それを地面の上へ抛げつける
や否や、馳け上がるようにその上へ乗って、くしゃりと麦藁帽
を踏み潰してしまった。宗助は縁から跣足で飛んで下りて、
小六の頭を擲りつけた。その時から、宗助の眼には、小六が小悪
らしい小僧として映った。

二年の時宗助は大学を去らなければならぬ事になった。
東京の家へも帰れない事になった。京都からすぐ広島へ行
って、そこに半年ばかり暮らしているうちに父が死んだ。母
は父よりも六年ほど前に死んでいた。だから後には二十五六
になる妾と、十六になる小六が残っただけであった。

佐伯から電報を受け取って、久しぶりに出京した宗助は、
葬式を済ました上、家の始末をつけようと思つてだんだん調
べて見ると、あると思つた財産は案外に少なくて、かえつ
て無いつもりの借金がいぶあつたに驚ろかされた。叔父の
佐伯に相談すると、仕方がないから邸を売るが好かろうと云
う話であつた。妾は相当の金をやってすぐ暇を出す事にきめ
た。小六は当分叔父の家に引き取って世話をして貰う事にし
た。しかし肝心の家屋敷はすぐ右から左へと売れる訳には行
かなかった。仕方がないから、叔父に一時の工面を頼んで、
当座の片をつけて貰った。叔父は事業家でいろいろな事に手
を出しては失敗する、云わば山気の多い男であつた。宗助が
東京にいる時分も、よく宗助の父を説きつけては、旨い事を
云って金を引き出したものである。宗助の父にも慾があつた

かも知れないが、この伝で叔父の事業に注ぎ込んだ金高はけっして少ないものではなかった。

父の亡くなったこの際にも、叔父の都合は元と余り変っていない様子であったが、生前の義理もあるし、またこう云う男の常として、いざと云う場合には比較的融通のつくものと見えて、叔父は快よく整理を引き受けてくれた。その代り宗助は自分の家屋敷の売却方についていっさいの事を叔父に一任してしまった。早く云うと、急場の金策に対する報酬として土地家屋を提供したようなものである。叔父は、

「何しろ、こう云うものは買手を見て売らないと損だからね」と云った。

道具類も積ばかり取って、金目にならないものは、ことごとく売り払ったが、五六幅の掛物と十二三点の骨董品だけは、やはり氣長に欲しがる人を探さないと損だと云う叔父の意見に同意して、叔父に保管を頼む事にした。すべてを差し引いて手元に残った有金は、約二千円ほどのものであったが、宗助はそのうちの幾分を、小六の学資として、使わなければならぬと氣がついた。しかし月々自分の方から送るとすると、今日の位置が堅固でない当時、はなはだ実行しにくい結果に陥りそうなので、苦しくはあったが、思い切って、半分だけを叔父に渡して、何分宜しくと頼んだ。自分が途中で失敗したから、せめて弟だけは物にしてやりたい氣もあるので、この千円が尽きたあとは、またどうにか心配もできようしまたしてくるだろうぐらいの不慥な希望を残して、また広島へ帰って行った。

それから半年ばかりして、叔父の自筆で、家はとうとう売

れたから安心しろと云う手紙が来たが、いくらに売れたとも何とも書いてないので、折り返して聞き合せると、二週間ほど経つての返事に、優に例の立替を償うに足る金額だから心配しなくても好いとあった。宗助はこの返事に対して少なからず不満を感じたには感じたが、同じ書信の中に、委細はいずれ御面会の節云々とあったので、すぐにも東京へ行きたいような氣がして、実はこうこうだがと、相談半分細君に話して見ると、御米は氣の毒そんな顔をして、

「でも、行けないんだから、仕方がないわね」と云って、例のごとく微笑した。その時宗助は始めて細君から宣告を受けて、人のように、しばらく腕組をして考えたが、どう工夫したって、抜ける事のできないような位地と事情の下に束縛されていたので、ついそれなりになってしまった。

仕方がないから、なお三四回書面で往復を重ねて見たが、結果はいつも同じ事で、版行で押したようにいづれ御面会の節を繰り返して来るだけであった。

「これじゃしょうがないよ」と宗助は腹が立ったような顔をして御米を見た。三カ月ばかりして、ようやく都合がついたので、久し振りに御米を連れて、出京しようと思う矢先に、つい風邪を引いて寝たのが元で、腸窒扶斯に変化したため、六十日余りを床の上に暮らした上に、あとの三十日ほどは充分仕事もできないくらい衰えてしまった。

病氣が本復してから間もなく、宗助はまた広島を去って福岡の方へ移らなければならぬ身となった。移る前に、好い機会だからちょっと東京まで出たいものだと考えているうちに、今度もいろいろの事情に制せられて、ついそれも遂行せ

ずに、やはり下り列車の走る方に自己の運命を托した。その頃は東京の家を畳むとき、懐^{ふところ}にして出た金は、ほとんど使ひ果たしていた。彼の福岡生活は前後二年を通じて、なかなかの苦闘であった。彼は書生として京都にいる時分、種々の口実の下に、父から臨時随意に多額の学資を請求して、勝手しだいに消費した昔をよく思い出して、今の身分と比較しつつ、しきりに因果の束縛を恐れた。ある時はひそかに過ぎた春を回顧して、あれが己の栄華の頂点だったんだと、始めて醒めた眼に遠い霞を眺める事もあった。いよいよ苦しくなった時、

「御米、久しく放っておいたが、また東京へ掛合^{かけあ}つてみようかな」と云い出した。御米は無論逆い^{さか}はしなかった。ただ下を向いて、

「駄目よ。だって、叔父さんに全く信用がないんですもの」と心細そうに答えた。

「向うじゃこちに信用がないかも知れないが、こっちじゃまた向うに信用がないんだ」と宗助は威張^{おご}つて云い出したが、御米の俯^{ふしめ}目になっていいる様子を見ると、急に勇気が挫^{くじ}ける風に見えた。こんな問答を最初は月に一二返ぐらい繰り返していたが、後^{のち}には二月に一返になり、三月に一返になり、とうとう、

「好^いいや、小六さえどうかしてくれれば。あとの事はいずれ東京へ出たら、逢^あつた上で話をつけらあ。ねえ御米、そうすると、しようじゃないか」と云い出した。

「それで、好^よござんすとも」と御米は答えた。

宗助は佐伯の事をそれなり放つてしまった。単なる無心は、

自分の過去に対しても、叔父に向つて云い出せるものでないと、宗助は考えていた。したがってその方の談判は、始めからいまだかつて筆にした事がなかった。小六からは時々手紙が来たが、極めて短かい形式的のものが多かった。宗助は父の死んだ時、東京で逢^あつた小六を覚えていただけだから、いまだに小六を他愛^{たわい}ない小供ぐらいに想像するので、自分の代理に叔父と交渉させようと云う気は無論起らなかった。夫婦は世の中の日の目を見ないものが、寒さに堪^たえかねて、抱き合つて暖^{だん}を取るような具合に、御互同志を頼りとして暮らしていた。苦しい時には、御米がいつでも、宗助に、

「でも仕方がないわ」と云つた。宗助は御米に、
「まあ我慢するさ」と云つた。

二人の間には諦^{あきら}めとか、忍耐とか云うものが断えず動いていたが、未来とか希望と云うものの影はほとんど射さないように見えた。彼らは余り多く過去を語らなかつた。時としては申し合わせたように、それを回避する風さえあつた。御米が時として、

「そのうちにはまたきつと好い事があつてよ。そうそう悪い事ばかり続くものじゃないから」と夫^{おつと}を慰さめるように云う事があつた。すると、宗助にはそれが、真心ある妻の口を藉^かりて、自分を翻弄^{ほんろう}する運命の毒舌のごとくに感ぜられた。宗助はそう云う場合には何にも答えずにただ苦笑するだけであつた。御米がそれでも気がつかずに、なにか云い続けると、「我々は、そんな好い事を予期する権利のない人間じゃないか」と思い切つて投げ出してしまふ。細君はようやく気がついて口を噤^{つぶ}んでしまふ。そうして二人が黙つて向き合つてい

ると、いつの間にか、自分達は自分達の拵えた、過去という暗い大きな窖の中に落ちてゐる。

彼らは自業自得で、彼らの未来を塗抹した。だから歩いてゐる先の方には、花やかな色彩を認める事ができないものと諦らめて、ただ二人手を携へて行く氣になった。叔父の売り払ったと云う地面家作についても、固より多くの期待は持っていなかった。時々考え出したように、

「だって、近頃の相場なら、捨売にしたって、あの時叔父の拵らえてくれた金の倍にはなるんだもの。あんまり馬鹿馬鹿しいからね」と宗助が云い出すと、御米は淋しそうに笑って、「また地面？　いつまでもあの事ばかり考えていらつしやるのね。だって、あなたが万事宜しく願いますと、叔父さんにおつしやつたんでしょ」と云う。

「そりや仕方がないさ。あの場合あでもしなければ方がつかないんだもの」と宗助が云う。

「だからさ。叔父さんの方では、御金の代りに家と地面を貰つたつもりでいらつしやるかも知れなくてよ」と御米が云う。

そう云われると、宗助も叔父の処置に一理あるようにも思われて、口では、

「そのつもりが好くないじゃないか」と答弁するようなもの、この問題はその都度しだいしだいに背景の奥に遠ざかつて行くのであった。

夫婦がこんな風に淋しく睦まじく暮らして来た二年目の末に、宗助はもとの同級生で、学生時代には大変懇意であった杉原と云う男に偶然出逢った。杉原は卒業後高等文官試験に

合格して、その時すでに或省に奉職していたのだが、公務上福岡と佐賀へ出張することになって、東京からわざわざやって来たのである。宗助は所の新聞で、杉原のいつ着いて、どこに泊っているかをよく知ってはいたが、失敗者としての自分に顧みて、成効者の前に頭を下げる対照を恥ずかしく思つた上に、自分は学当時の旧友に逢うのを、特に避けたい理由を持っていたので、彼の旅館を訪ねる氣は毛頭なかった。

ところが杉原の方では、妙な引掛りから、宗助のここに燻ぶっている事を聞き出して、強いて面会を希望するので、宗助もやむを得ず我を折った。宗助が福岡から東京へ移れるようになったのは、全くこの杉原の御蔭である。杉原から手紙が来て、いよいよ事がきまつたとき、宗助は箸を置いて、「御米、とうとう東京へ行けるよ」と云った。

「まあ結構ね」と御米が夫の顔を見た。

東京に着いてから二三週間は、眼の回るように日が経った。新らしく世帯を有つて、新らしい仕事を始める人に、あり勝ちな急忙しなさと、自分達を包む大都の空氣の、日夜劇しく震盪する刺戟とに駆られて、何事をもじつと考える閑もなく、また落ちついて手を下す分別も出なかった。

夜汽車で新橋へ着いた時は、久しぶりに叔父夫婦の顔を見たが、夫婦とも灯のせいかな晴れやかな色には宗助の眼に映らなかつた。途中に事故があつて、着の時間が珍らしく三十分ほど後れたのを、宗助の過失でもあるかのように、待草臥れた氣色であつた。

宗助がこの時叔母から聞いた言葉は、「おや宗さん、しばらく御目に掛からないうちに、大変御老

けなすった事」という一句であった。御米はその折始めて叔父夫婦に紹介された。

「これがあの……」と叔母は逡巡^{ためら}って宗助の方を見た。御米は何と挨拶^{あいさつ}のしようもないので、無言のままただ頭を下げた。

小六も無論叔父夫婦と共に二人を迎いに來ていた。宗助は一眼その姿を見たとき、いつの間にか自分を凌^{しの}ぐように大きくなつた、弟の發育に驚ろかされた。小六はその時中学を出て、これから高等学校へ這入^{はい}ろうという間際^{まぎわ}であつた。宗助を見て、「兄さん」とも「御歸りなさい」とも云わないで、ただ不器用に挨拶をした。

宗助と御米は一週ばかり宿屋住居^{すまい}をして、それから今の所に引き移つた。その時は叔父夫婦がいろいろ世話を焼いてくれた。細々^{しじま}しい台所道具のようなものは買うまでもあるまい、古いのでよければと云うので、小人数に必要なだけ一通り取り揃^{そろ}えて送つて來た。その上、

「御前も新世帯だから、さぞ物要^{ものいり}が多かろう」と云つて金を六十円くれた。

家^{うち}を持つてかれこれ取り紛^{まぎ}れているうちに、早半月余も経つたが、地方にいる時分あんなに氣にしていた家邸^{いえやしき}の事は、ついまだ叔父に言い出さずにいた。ある時御米が、

「あなたあの事を叔父さんにおっしゃつて」と聞いた。宗助はそれで急に思い出したように、

「うん、まだ云わないよ」と答えた。

「妙ね、あれほど氣にしていらしつたのに」と御米がうす笑をした。

「だって、落ちついて、そんな事を云い出す暇^{ひま}がないんだも

の」と宗助が弁解した。

また十日ほど経^たつた。すると今度は宗助の方から、

「御米、あの事はまだ云わないよ。どうも云うのが面倒で厭^{いや}になつた」と云い出した。

「厭^{いや}なのを無理におっしゃらなくつてもいいわ」と御米が答えた。

「好いかい」と宗助が聞き返した。

「好いかいつて、もともとあなたの事じゃなくつて。私は先^{せん}からどうでも好いんだわ」と御米が答えた。

その時宗助は、

「じゃ、鹿爪^{しかづめ}らしく云い出すのも何だか妙だから、そのうち機會^{おき}があつたら、聞くとしよう。なにそのうち聞いて見る機會^{おき}がきつと出て来るよ」と云つて延ばしてしまつた。

小六は何不足なく叔父の家に寢起^{ねおき}していた。試験を受けて高等学校へ這入^{はい}れば、寄宿へ入舎しなければならぬと云うので、その相談まですでに叔父と打合せがしてあるようであつた。新らしく出京した兄からは別段學資の世話を受けなせいか、自分の身の上については叔父ほどに親しい相談も持ち込んで來なかつた。従兄弟^{いとこ}の安之助とは今までの關係上大変仲が好かつた。かえつてこの方が兄弟らしかつた。

宗助は自然叔父の家^{うち}に足が遠くなるようになった。たまに行つても、義理一遍の訪問に終る事が多いので、歸り路にはいつもつまらない氣がしてならなかつた。しまいには時候の挨拶^{あいさつ}を済ますと、すぐ歸りたくなる事もあつた。こう云う時には三十分と坐^{すわ}つて、世間話に時間を繋^{つな}ぐのにさえ骨が折れた。向うでも何だか氣が置けて窮屈だと云う風が見えた。

「まあいいじゃありませんか」と叔母が留めてくれるのが例であるが、そうすると、なおさらにくい心持がした。それでも、たまには行かないと、心のうちで気が咎めるような不安を感じるので、また行くようになった。折々は、

「どうも小六が御厄介になりました」とこつちから頭を下げて礼を云う事もあった。けれども、それ以上は、弟の将来の学資についても、また自分が叔父に頼んで、留守中に売り払って貰った地所家作についても、口を切るのがつい面倒になった。しかし宗助が興味を有たない叔父の所へ、不精無精にせよ、時たま出掛けて行くのは、単に叔父甥の血属関係を、世間並に持ち堪えるための義務心からではなくって、いつか機会があったら、片をつけたい或物を胸の奥に控えていた結果に過ぎないのは明かであつた。

「宗さんはどうもすっかり変つちまいましたね」と叔母が叔父に話す事があつた。すると叔父は、

「そうよなあ。やっぱり、ああ云う事があると、永くまで後へ響くものだからな」と答えて、因果は恐ろしいと云う風をする。叔母は重ねて、

「本当に、怖いもんですね。元はあんな寝入った子じゃなかったが——どうもはしやぎ過ぎるくらい活潑でしたからね。それが二三年見ないうちに、まるで別の人みたように老けちまって。今じゃあなたより御爺さん御爺さんしていますよ」と云う。

「真逆」と叔父がまた答える。

「いえ、頭や顔は別として、様子がさ」と叔母がまた弁解する。

こんな会話が老夫婦の間に取り換わされたのは、宗助が東京して以来一度や二度ではなかった。実際彼は叔父の所へ来ると、老人の眼に映る通りの人間に見えた。

御米はどう云うものか、新橋へ着いた時、老人夫婦に紹介されたぎり、かつて叔父の家の敷居を跨いだ事がない。むこうから見れば叔父さん叔母さんと丁寧接待するが、帰りがけに、

「どうです、ちと御出かけなすっちゃ」などと云われると、ただ、

「ありがとう」と頭を下げるだけで、ついぞ出掛けた試はなかった。さすがの宗助さえ一度は、

「叔父さんの所へ一度行って見ちゃ、どうだい」と勧めた事があるが、

「でも」と変な顔をするので、宗助はそれぎりけっしてその事を云い出さなかった。

両家族はこの状態で約一年ばかりを送った。すると宗助よりも気分は若いと許された叔父が突然死んだ。病症は脊髄脳膜炎とかいう劇症で、二三日風邪の気味で寝ていたが、便所へ行った歸りに、手を洗おうとして、柄杓を持ったまま卒倒したなり、一日経つか経たないうちに冷たくなってしまったのである。

「御米、叔父はどうとう話をしずに死んでしまったよ」と宗助が云った。

「あなたまだ、あの事を聞くつもりだったの、あなたも随分執念深いね」と御米が云った。

それからまた一年ばかり経ったら、叔父の子の安之助が大

學を卒業して、小六が高等学校の二年生になった。叔母は安之助といっしょに中六番町に引き移った。

三年目の夏休みに小六は房州の海水浴へ行った。そこに一月余りも滞在しているうちに九月になり掛けたので、保田から向うへ突切^{つぎ}って、上総^{かずさ}の海岸を九十九里伝いに、銚子^{ちうし}まで来たが、そこから思い出したように東京へ帰った。宗助の所へ見えたのは、帰ってから、まだ二三日しか立たない、残暑の強い午後である。真黒に焦^こげた顔の中に、眼だけ光らして、見違えるように蜜^{ばんしよく}色を帯びた彼は、比較的日の遠い座敷へ這^{はい}入ったなり横になって、兄の帰りを待ち受けていたが、宗助の顔を見るや否や、むっくり起き上がった、

「兄さん、少し御話があつて来たんですが」と開き直られたので、宗助は少し驚ろいた気味で、暑苦しい洋服さえ脱^かぎ更えずに、小六の話を聞いた。

小六の云うところによると、二三日前彼が上総から帰った晩、彼の学資はこの暮限り、気の毒ながら出してやれないと叔母から申し渡されたのだそうである。小六は父が死んで、すぐと叔父に引き取られて以来、学校へも行けるし、着物も自然^{ひたより}にできるし、小遣^{こづかい}も適宜^{てきぎ}に貰えるので、父の存^{ぞん}生^{しょう}中^{ちゆう}と同じように、何不足なく暮らせて来た情性から、その日その晩までも、ついぞ学資と云う問題を頭に思い浮べた事がなかったため、叔母の宣告を受けた時は、茫然^{ぼんやり}してとかくの挨拶^{あいさつ}さえできなかったのだと云う。

叔母は気の毒そうに、なぜ小六の世話がでなくなつたかを、女だけに、一時間も掛かつて委^{くわ}しく説明してくれたそうである。それには叔父の亡^なくなつた事やら、繼^ついで起る経済

上の变化やら、また安之助の卒業やら、卒業後に控えている結婚問題やらが這入^{はいり}っていたのだと云う。

「できるならば、せめて高等学校を卒業するまでと思つて、今日^{きょう}までいろいろ骨を折^をつたんだけれども」

叔母はこう云つたと小六は繰り返した。小六はその時ふと兄が、先年父の葬式の時に出京して、万事を片づけた後、広島へ帰るとき、小六に、御前の学資は叔父さんに預けてあるからと云つた事があるのを思い出して、叔母に始めて聞いて見ると、叔母は案外な顔をして、

「そりや、あの時、宗^{そう}さんが若^わ干^{かん}か置いて行きなすつた事は、行きなすつたが、それはもうありやしないよ。叔父さんのまだ生きて御^{おい}出^での時分から、御前の学資は融通して来たんだから」と答えた。

小六は兄から自分の学資がどれほどあつて、何年分の勘^{かん}定^{じやう}で、叔父に預けられたかを、聞いておかなかつたから、叔母からこう云われて見ると、一言^{ひとこと}も返し方がなかつた。

「御前^{おまえ}も一人じゃなし、兄さんもある事だからよく相談をして見たら好いだろう。その代り私^{わたし}も宗さんに逢^あつて、とつくり話を話しましょうから。どうも、宗さんも余^{あん}まり近頃^{おいで}は御出^{おいで}でないし、私も御無沙汰^{ごぶさた}ばかりしているのでね、つい御前の事は御話をする訳にも行かなかつたんだよ」と叔母は最後につけ加えたそうである。

小六から一部始終^{いちぶしじゆう}を聞いた時、宗助はただ弟の顔を眺^{なが}めて、一口、

「困^{かつ}つたな」と云つた。昔のように赫^{かつ}と激して、すぐ叔母の所へ談判に押し掛ける気色もなければ、今まで自分に対して、

世話にならないでも済む人のように、よそよそしく仕向けて来た弟の態度が、急に方向を転じたのを、悪いと思う様子も見えなかった。

自分の勝手に作り上げた美しい未来が、半分壊れかけたのを、さも傍の人のせいでもあるかのごとく心を乱している小六の帰る姿を見送った宗助は、暗い玄関の敷居の上に立って、格子の外に射す夕日をしばらく眺めていた。

その晩宗助は裏から大きな芭蕉の葉を二枚剪って来て、それを座敷の縁に敷いて、その上に御米と並んで涼みながら、小六の事を話した。

「叔母さんは、こっちで、小六さんの世話をしろって云う気なんじゃなくって」と御米が聞いた。

「まあ、逢って聞いて見ないうちは、どう云う料簡が分らないがね」と宗助が云うと、御米は、

「きつとそうよ」と答えながら、暗がりで団扇をはたはた動かした。宗助は何も云わずに、頸を延ばして、庇と崖の間に細く映る空の色を眺めた。二人はそのまましばらく黙っていたが、良あつて、

「だってそれじゃ無理ね」と御米がまた云った。

「人間一人大学を卒業させるなんて、おれの手際じゃ到底駄目だ」と宗助は自分の能力だけを明らかにした。

会話はそこで別の題目に移って、再び小六の上にも叔母の上にも帰って来なかった。それから二三日するとちようど土曜が来たので、宗助は役所の帰りに、番町の叔母の所へ寄って見た。叔母は、

「おやおや、まあ御珍らしい事」と云って、いつもよりは愛想

よく宗助を款待してくれた。その時宗助は厭なのを我慢して、この四五年来溜めて置いた質問を始めて叔母に掛けた。叔母は固よりできるだけは弁解しない訳に行かなかった。

叔母の云うところによると、宗助の邸宅を売払った時、叔父の手に這入った金は、たしかには覚えていないが、何でも、宗助のために、急場の間に合せた借財を返した上、なお四五百円とか四千三百円とか余ったそうである。ところが叔父の意見によると、あの屋敷は宗助が自分に提供して行つたのだから、たといいくら余ろうと、余った分は自分の所得と見做して差支ない。しかし宗助の邸宅を売って儲けたと云われては心持が悪いから、これは小六の名義で保管して置いて、小六の財産にしてやる。宗助はあんな事をして廃嫡にまでされかけた奴だから、一文だつて取る権利はない。

「宗さん怒っちゃいけませんよ。ただ叔父さんの云った通りを話すんだから」と叔母が断った。宗助は黙ってあとを聞いていた。

小六の名義で保管されべき財産は、不幸にして、叔父の手腕で、すぐ神田の賑やかな表通りの家屋に変形した。そうして、まだ保険をつけないうちに、火事で焼けてしまった。小六には始めから話してない事だから、そのままにして、わざと知らせずにおいた。

「そう云う訳でね、まことに宗さんにも、御気の毒だけれども、何しろ取って返しの方がない事だから仕方がない。運だと思って諦めて下さい。もっとも叔父さんさえ生きていれば、またどうともなるんでしょうさ。小六一人ぐらいそりゃ訳はありますまいよ。よしんば、叔父さんがいなさらない、

今にしたって、こっちの都合さえ好ければ、焼けた家と同じだけのものを、小六に返すか、それでなくっても、当人の卒業するまでぐらいは、どうかして世話もできるんですけれども」と云って叔母はまたほかの内幕話をして聞かせた。それは安之助の職業についてであつた。

安之助は叔父の一人息子で、この夏大学を出たばかりの青年である。家庭で暖かに育った上に、同級の学生ぐらいよりほかに交際のない男だから、世の中の事にはむしろ迂闊と云つてもいいが、その迂闊なところにとどこか鷹揚な趣を具えて実社会へ顔を出したのである。専門は工科の器械学だから、企業熱の下火になった今日といえども、日本中にたくさんある会社に、相應の口の一つや二つあるのは、もちろんであるが、親譲りの山氣がどこかに潜んでいるものと見えて、自分で自分の仕事をして見たくてならない矢先へ、同じ科の出身で、小規模ながら専有の工場を月島辺に建てて、独立の経営をやっている先輩に出逢ったのが縁となつて、その先輩と相談の上、自分も幾分かの資本を注ぎ込んで、いっしょに仕事をしてみようという考になった。叔母の内幕話と云つたのはそこである。

「でね、少しあつた株をみんなその方へ廻す事にしたもんだから、今じゃ本当に一文なし同然な仕儀でいるんですよ。それは世間から見ると、人数は少なし、家邸は持っているし、楽に見えるのも無理のないところでしょうさ。この間も原の御母さんが来て、まああなたほど気楽な方はない、いつ来て見ても万年青の葉ばかり丹念に洗っているってね。真逆そうでも無いんですけれども」と叔母が云つた。

宗助が叔母の説明を聞いた時は、ぼんやりしてとかくの返事が容易に出なかった。心のなかで、これは神経衰弱の結果、昔のように機敏で明快な判断を、すぐ作り上げる頭が失くなつた証拠だろうと自覚した。叔母は自分の云う通りが、宗助に本当と受けられないのを気にするように、安之助から持ち出した資本の高まで話した。それは五千元ほどであつた。安之助は自分の間、わずかな月給と、この五千元に対する利益配当とで暮らさなければならぬのだそうである。

「その配当だって、まだどうなるか分りやしないんでさあね。旨く行つたところで、一割が一割五分ぐらいなものでしょうし、また一つ間違えばまるで煙にならないとも限らないんですから」と叔母がつけ加えた。

宗助は叔母の仕打に、これと云う目立つた阿漕なところも見えないので、心の中では少なからず困つたが、小六の将来について一口の掛合もせずには帰るのはいかにも馬鹿馬鹿しい気がした。そこで今までの問題はそこに据えつきりに置いて、自分が当時小六の学資として叔父に預けて行つた千円の所置を聞き糺して見ると、叔母は、

「宗さん、あれこそ本当に小六が使つちまつたんですよ。小六が高等学校へ這入つてからでも、もうかれこれ七百元は掛かっているんですよ」と答えた。

宗助はついでだから、それと同時に、叔父に保管を頼んだ書画や骨董品の成行を確かめて見た。すると、叔母は、

「ありあつたんだ馬鹿な目に逢つて」と云いかけたが、宗助の様子を見て、

「宗さん、何ですか、あの事はまだ御話をしなかつたんでし

「たかね」と聞いた。宗助がいいえと答えると、「おやおや、それじゃ叔父さんが忘れちまったんですよ」と云いながら、その顛末を語って聞かした。

宗助が広島へ帰ると間もなく、叔父はその売捌方を真田とかいう懇意の男に依頼した。この男は書画骨董の道に明るいとかいので、平生そんなものの売買の周旋をして諸方へ出入するそうであつたが、すぐさま叔父の依頼を引き受けて、誰^{だれ}某^{それがし}が何を欲しいと云うから、ちよつと拝見とか、何々氏がこつ云う物を希望だから、見せましようとか号して、品物を持って行ったがり、返して来ない。催促すると、まだ先方から戻って参りませんからとか何とか言訳をするだけでかつて埒^{らち}の明いた試^{ためし}がなかつたが、とうとう持ち切れなくなつたと見えて、どこかへ姿を隠してしまつた。

「でもね、まだ屏風^{びやうぶ}が一つ残っていますよ。この間引越の時に、気がついて、こりや宗さんのだから、今度^{こんだ}ついですがあつたら届けて上げたらいいだろうって、安がそう云っていました」

叔母は宗助の預けて行つた品物にはまるで重きを置いていないような、ものの云い方をした。宗助も今日^{きょう}まで放つておくくらいだから、あまりその方面には興味を有^もち得なかつたので、少しも良心に悩まされている気色^{けしき}のない叔母の様子を見て、別に腹は立たなかつた。それでも、叔母が、

「宗さん、どうせ家^{うち}じゃ使っていないんだから、なんなら持つておいでなすっちゃどうです。この頃はああいふものが、大変^ね価^ねが出たと云う話じゃありませんか」と云つたときは、実際それを持つて帰る氣になつた。

納戸^{なんど}から取り出して貰つて、明るい所で眺^{なが}めると、たしかに見^み覚のある二枚折であつた。下に萩^{はぎ}、桔梗^{ききやう}、芒^{すすき}、葛^{くず}、女郎花^{おみなえし}を隙間なく描^かいた上に、真丸な月を銀で出して、その横の空いた所へ、野路^{のじ}や空月の中なる女郎花、其一^{きいち}と題してある。宗助は膝^{ひざ}を突いて銀の色の黒く焦^こげた辺^{あた}から、葛の葉の風に裏を返している色の乾いた様から、大福^{だいふく}ほどな大きな丸い朱の輪廓^{りんがく}の中に、抱^{ほう}一^{いつ}と行書で書いた落款^{らくかん}をつくづくと見て、父の生きている当時^{おと}を憶^{おも}い起さずにはいられなかつた。

父は正月になると、きつとこの屏風^{びやうぶ}を薄暗い蔵^{くら}の中から出して、玄関の仕切りに立てて、その前へ紫檀^{したん}の角^{かく}な名刺入を置いて、年賀を受けたものである。その時はめでたいからと云うので、客間の床^{とこ}には必ず虎の双幅^{そうふく}を懸^かけた。これは岸駒^{がんこ}じゃない岸岱^{がんだい}だと父が宗助に云つて聞かせた事があるのを、宗助はいまだに記憶していた。この虎の画^えには墨が着いていた。虎が舌を出して谷の水を呑^のんでいる鼻柱^{びしち}が少し汚^{けが}されたのを、父は苛^{ひど}く氣にして、宗助を見るたびに、御前^{ごぜん}ここへ墨を塗^ぬつた事を覚えているか、これは御前の小さい時分の悪戯^{いたづら}だぞと云つて、おかしいような恨めしいような一種の表情をした。

宗助は屏風^{びやうぶ}の前に畏^{かしこ}まって、自分が東京にいた昔の事を考^{かんが}えながら、

「叔母さん、じゃこの屏風はちようだいして行きましょう」と云つた。

「ああああ、御持ちなさいとも。何なら使に持たせて上げましょう」と叔母は好意から申し添えた。

宗助は然^{しか}るべく叔母に頼んで、その日はそれで切り上げて

帰った。晩食の後御米といっしょにまた縁側へ出て、暗い所で白地の浴衣を並べて、涼みながら、画の話をした。

「安さんには、御逢いなさらなかったの」と御米が聞いた。

「ああ、安さんは土曜でも何でも夕方まで、工場にいるんだそうだ」

「随分骨が折れるでしょうね」

御米はそう云ったなり、叔父や叔母の処置については、一言の批評も加えなかった。

「小六の事はどうしたものだろ」と宗助が聞くと、

「そうね」と云うだけであつた。

「理窟を云えば、こっちにも云い分はあるが、云い出せば、とどのつまりは裁判沙汰になるばかりだから、証拠も何もなければ勝てる訳のものじゃなし」と宗助が極端を予想すると、

「裁判なんかに勝たなくたってでもいいわ」と御米がすぐ云つたので、宗助は苦笑してやめた。

「つまりおれがあの時東京へ出られなかったからの事さ」

「そうして東京へ出られた時は、もうそんな事はいつでもよかったんですもの」

夫婦はこんな話をしながら、また細い空を庇の下から覗いて見て、明日の天気を語り合つて蚊帳に這入った。

次の日曜に宗助は小六を呼んで、叔母の云つた通りを残らず話して聞かせて、

「叔母さんが御前に詳しい説明をしなかったのは、短兵急な御前の性質を知ってるせい、それともまだ小供だと思つてわざと略してしまつたのか、そこはおれにも分らないが、何しろ事実は今云つた通りなんだよ」と教えた。

小六にはいかに詳しい説明も腹の足しにはならなかった。ただ、

「そうですか」と云つてむずかしい不満な顔をして宗助を見た。

「仕方がないよ。叔母さんだって、安さんだって、そう悪い料簡はないんだから」

「そりや、分つています」と弟は峻しい物の云い方をした。

「じゃおれが悪いって云うんだろ。おれは無論悪いよ。昔から今日まで悪いところだらけな男だもの」

宗助は横になつて煙草を吹かしながら、これより以上は何とも語らなかつた。小六も黙つて、座敷の隅に立ててあつた二枚折の抱一の屏風を眺めていた。

「御前あの屏風を覚えているかい」とやがて兄が聞いた。

「ええ」と小六が答えた。

「一昨日佐伯から届けてくれた。御父さんの持つてたもので、おれの手に残つたのは、今じゃこれだけだ。これが御前の学資になるなら、今すぐにでもやるが、剥げた屏風一枚で大学を卒業する訳にも行かずな」と宗助が云つた。そうして苦笑しながら、

「この暑いのに、こんなものを立てて置くのは、氣狂じみているが、入れておく所がないから、仕方がない」と云う述懐をした。

小六はこの氣楽なような、ぐずのような、自分とは余りに懸け隔たっている兄を、いつも物足りなくは思うものの、いざという場合に、けつして喧嘩はし得なかつた。この時も急に癩癧の角を折られた気味で、

「屏風はどうでも好いが、これから先僕はどうしたもんでしよう」と聞き出した。

「それは問題だ。何しろことしいっぱいにきまれば好い事だから、まあよく考えるさ。おれも考えて置こう」と宗助が云った。

弟は彼の性質として、そんな中ぶらりんの姿は嫌である、学校へ出て落ちついて稽古もできず、下調も手につかないような境遇は、とうてい自分には堪えられないと云う訴を切にやり出したが、宗助の態度は依然として変らなかった。小六があまり癪の高い不平を並べると、

「そのくらしいな事でそれほど不平が並べられれば、どこへ行ったって大丈夫だ。学校をやめたって、いっこう差支ない。

御前の方がおれよりよっぽどえらいよ」と兄が云ったので、話はそれぎり頓挫して、小六はどうとう本郷へ帰って行った。

宗助はそれから湯を浴びて、晩食を済まして、夜は近所の縁日へ御米といっしょに出掛けた。そうして手頃な花物を二鉢買って、夫婦して一つずつ持って帰って来た。夜露にあてた方がよからうと云うので、崖下の雨戸を明けて、庭先にそれを二つ並べて置いた。

蚊帳の中へ這入った時、御米は、

「小六さんの事はどうなつて」と夫に聞くと、

「まだどうもならないさ」と宗助は答えたが、十分ばかりの後夫婦ともすやすや寝入った。

翌日眼が覚めて役所の生活が始まると、宗助はもう小六の事を考える暇を有たなかった。家へ帰って、のっそりしている時ですら、この問題を確的眼の前に描いて明らかにそれを眺

める事を憚かった。髪の毛の中に包んである彼の脳は、その煩わしさに堪えなかった。昔は数学が好きで、随分込み入った幾何の問題を、頭の中で明瞭な図にして見るだけの根気があった事を憶い出すと、時日の割には非常に烈しく来たこの変化が自分にも恐ろしく映った。

それでも日に一度ぐらひは小六の姿がぼんやり頭の奥に浮いて来る事があって、その時だけは、あいつの将来も何とか考えておかなくっちゃならないと云う気も起った。しかしすぐあとから、まあ急ぐにも及ぶまいぐらひに、自分と打ち消してしまうのが常であつた。そうして、胸の筋が一本鉤に引っ掛つたような心を抱いて、日を暮らしていた。

そのうち九月も末になつて、毎晩天の河が濃く見えるある宵の事、空から降つたように安之助がやって来た。宗助にも御米にも思い掛けないほど稀な客なので、二人とも何か用があつての訪問だろうと推したが、はたして小六に関する件であつた。

この間月島の工場へひょつくり小六がやって来て云うには、自分の学資についての詳しい話は兄から聞いたが、自分も今まで学問をやつて来て、とうとう大学へ這入れずじまいになるのはいかにも残念だから、借金でも何でもして、行けるところまで行きたいが、何か好い工夫はあるまいかと相談をかけるので、安之助はよく宗さんにも話して見ようと答えると、小六はたちまちそれを遮ぎつて、兄はどうてい相談になつてくれる人じゃない。自分が大学を卒業しないから、他も中途でやめるのは当然だぐらひに考えている。元来今度の事も元を糺せば兄が責任者であるのに、あの通りいっこう平気なも

ので、他が何を云っても取り合ってくれない。だから、ただ頼りにするのは君だけだ。叔母さんに正式に断わられながら、また君に依頼するのはおかしいようだが、君の方が叔母さんより話が分るだろうと思って来たと云って、なかなか動きそうもなかったそうである。

安之助は、そんな事はない、宗さんも君の事ではだいぶ心配して、近いうちまた家へ相談に来るはずになっているんだからと慰めて、小六を帰したんだと云う。帰るときに、小六は袂から半紙を何枚も出して、欠席届が入用だからこれに判を押してくれと請求して、僕は退学か在学か片がつくまでは勉強ができないから、毎日学校へ出る必要はないんだと云ったそうである。

安之助は忙がしいとかで、一時間足らず話して帰って行ったが、小六の所置については、兩人の間に具体的案は別に出なかった。いずれ緩くりみんなて寄つてきめよう、都合がよければ小六も列席するが好かろうというのが別れる時の言葉であつた。二人になつたとき、御米は宗助に、

「何を考えていらつしやるの」と聞いた。宗助は両手を兵児帯の間に挟んで、心持肩を高くしたなり、

「おれももう一返小六みたようになって見たい」と云つた。「こちじや、向がおれのような運命に陥るだろうと思つて心配しているのに、向じゃ兄貴なんざあ眼中にないから偉いや」御米は茶器を引いて台所へ出た。夫婦はそれぎり話を切り上げて、また床を延べて寝た。夢の上に高い銀河が涼しく懸つた。

次の週間には、小六も来ず、佐伯からの音信もなく、宗助

の家庭はまた平日の無事に帰つた。夫婦は毎朝露に光る頃起きて、美しい日を廂の上に見た。夜は煤竹の台を着けた洋灯の両側に、長い影を描いて坐っていた。話が途切れた時はひそりとして、柱時計の振子の音だけが聞える事も稀ではなかつた。

それでも夫婦はこの間に小六の事を相談した。小六がもしどうしても学問を続ける気なら無論の事、そうでなくても、今の下宿を一時引き上げなければなくなるのは知れているが、そうすればまた佐伯へ帰るか、あるいは宗助の所へ置くよりほかに途はない。佐伯ではいったんああ云い出したよなものの、頼んで見たら、当分宅へ置くぐらいの事は、好意上してくれまいものでもない。が、その上修業をさせるとなると、月謝小遣その他は宗助の方で担任しなければ義理が悪い。ところがそれは家計上宗助の堪えるところではなかつた。月々の収支を事細かに計算して見た兩人は、

「どうてい駄目だね」

「どうしたつて無理ですわ」と云つた。

夫婦の坐っている茶の間の次が台所で、台所の右に下女部屋、左に六畳が一間ある。下女を入れて三人の小人数だから、この六畳には余り必要を感じない御米は、東向の窓側にいつも自分の鏡台を置いた。宗助も朝起きて顔を洗つて、飯を済ますと、ここへ来て着物を脱ぎ更えた。

「それよりか、あの六畳を空けて、あすこへ来ちゃいけなかつて」と御米が云い出した。御米の考えでは、こうして自分の方で部屋と食物だけを分担して、あとのところを月々いくら佐伯から助て貰つたら、小六の望み通り大学卒業までや

って行かれようと云うのである。

「着物は安さんの古いのや、あなたのを直して上げたら、どうかなるでしょう」と御米が云い添えた。実は宗助にもこんな考が、多少頭に浮かんでいた。ただ御米に遠慮がある上に、それほど気が進まなかったもので、つい口へ出さなかったまでだから、細君からこう反対に相談を掛けられて見ると、固よりそれを拒むだけの勇氣はなかった。

小六にその通りを通知して、御前さえそれで差支なければ、おれがもう一遍佐伯へ行って掛合つて見るかと、手紙で問い合せると、小六は郵便の着いた晩、すぐ雨の降る中を、傘に音を立ててやって来て、もう学資ができでもしたように嬉しがった。

「何、叔母さんの方じゃ、こつちでいつまでもあなたの事を放り出したまんま、構わずにおくもんだから、それであおつしやるのよ。なに兄さんだって、もう少し都合が好ければ、疾うにもどうかしたんですけれども、御存じの通りだから實際やむを得なかったんですわ。しかしこつちからこう云つて行けば、叔母さんだって、安さんだって、それでも否だとは云われないわ。きつとできるから安心していらつしやい。私受合うわ」

御米にこう受合つて貰った小六は、また雨の音を頭の上に受けて本郷へ帰って行った。しかし中一日置いて、兄さんはまだ行かないんですかと聞きに来た。また三日ばかり過ぎてから、今度は叔母さんの所へ行って聞いたら、兄さんはまだ来ないそうだから、なるべく早く行くように勧めてくれと催促して行つた。

宗助が行く行くと云つて、日を暮らしているうちに世の中はようやく秋になった。その朗らかな或日曜の午後、宗助はあまり佐伯へ行くのが後れるので、この要件を手紙に認めて番町へ相談したのである。すると、叔母から安之助は神戸へ行って留守だと云う返事が来たのである。

五

佐伯の叔母の尋ねて来たのは、土曜の午後の二時過であった。その日は例になく朝から雲が出て、突然と風が北に変わったように寒かった。叔母は竹で編んだ丸い火桶の上へ手を翳して、

「何ですネ、御米さん。この御部屋は夏は涼しそうで結構だが、これからとはちと寒うござんすね」と云つた。叔母は癖のある髪を、奇麗に髻に結つて、古風な丸打の羽織の紐を、胸の所で結んでいた。酒の好きな質で、今でも少しづつは晩酌をやるせい、色沢もよく、でっぷり肥っているから、年よりはよほど若く見える。御米は叔母が来るたんびに、叔母さんは若いのねと、後でよく宗助に話した。すると宗助がいつでも、若いはずだ、あの年になるまで、子供をたった一人しか生まないんだからと説明した。御米は實際そうかも知れないと思つた。そうしてこう云われた後では、折々そつと六畳へ這入つて、自分の顔を鏡に映して見た。その時は何だか自分の頬が見るたびに瘡けて行くような気がした。御米には自分と子供とを連想して考えるほど辛い事はなかったのである。裏の家主の宅に、小さい子供が大勢いて、それが崖の上の庭

へ出て、ブランコへ乗ったり、鬼ごっこをやったりして騒ぐ声が、よく聞えると、御米はいつでも、はかないような恨めしいような心持になった。今自分の前に坐っている叔母は、たった一人の男の子を生んで、その男の子が順当に育って、立派な学士になったればこそ、叔父が死んだ今日でも、何不足のない顔をして、腮などは二重に見えるくらいに豊かなのである。御母さんは肥っているから剣呑だ、気をつけないと卒中でやられるかも知れないと、安之助が始終心配するそうだけれども、御米から云わせると、心配する安之助も、心配される叔母も、共に幸福を享け合っているものとしか思われなかった。

「安さんは」と御米が聞いた。

「ええようやくね、あなた。一昨日の晩帰りましてね。それでついつい御返事も後れちまって、まことに済みませんような訳で」と云ったが、返事の方はそれなりにして、話はまた安之助へ戻って来た。

「あれもね、御蔭さまでようやく学校だけは卒業しましたが、これからが大事のところ、心配でございます。——それでもこの九月から、月島の工場の方へ出る事になりまして、まあさいわいとこの分で勉強さえして行ってくれば、この末ともに、そう悪い事も無かうかと思ってるんですけれども、まあ若いものの事ですから、これから先どう変化するかわかりやしませんよ」

御米はただ結構でございますとか、おめでとうございますとか云う言葉を、間々に挟んでいた。

「神戸へ参ったのも、全くその方の用向なので。石油発動機

とか何とか云うものを鰹船へ据え付けるんだとかってねあなた」

御米にはまるで意味が分らなかった。分らないながらもただへええと受けていると、叔母はすぐ後を話した。

「私にも何のこったか、ちっとも分らなかったんですが、安之助の講釈を聞いて始めて、おやそうかいと云うような訳でしてね。——もっとも石油発動機は今もって分らないんですけれども」と云いながら、大きな声を出して笑った。「何でも石油を焚いて、それで船を自由にする器械なんだそうですが、聞いて見るとよほど重宝なものらしいんですよ。それさえ付ければ、舟を漕ぐ手間がまるで省けるとかね。五里も十里も沖へ出るのに、大変楽なんですとさ。ところがあなた、この日本全国で鰹船の数ったら、それこそ大したものでしょう。その鰹船が一つずつこの器械を具え付けるようになったら、莫大な利益だって云うんで、この頃は夢中になってその方ばかりに掛っているようです。莫大な利益はありがたいが、そう凝って身体でも悪くしちゃつまらないじゃないかって、この間も笑ったくらいで」

叔母はしきりに鰹船と安之助の話をした。そうして大変得意のように見えたが、小六の事はなかなか云い出さなかった。もう疾に帰るはずの宗助もどうしたか帰って来なかった。

彼はその日役所の帰りがけに駿河台下まで来て、電車を下りて、酸いものを頬張ったような口を穿めて一二町歩いた後、ある歯医者さんの門を潜ったのである。三四日前彼は御米と差向いで、夕飯の膳に着いて、話しながら箸を取っている際に、どうした拍子か、前歯を逆にぎりりと噛んでから、それが急

に痛み出した。指で揺かすと、根がぐらぐらする。食事の時には湯茶が染みる。口を開けて息をすると風も染みた。宗助はこの朝歯を磨くために、わざと痛い所を避けて楊枝を使いながら、口の中を鏡に照らして見たら、広島で銀を埋めた二枚の奥歯と、研いだように磨り減らした不揃の前歯とが、にわかには寒く光った。洋服に着換える時、

「御米、おれは歯の性がよっぽど悪いと見えるね。こうやると大抵動くぜ」と下歯を指で動かして見せた。御米は笑いながら、

「もう御年のせいよ」と云って白い襟を後へ廻って襯衣へ着けた。

宗助はその日の午後とうとう思い切つて、歯医者へ寄つたのである。応接間へ通ると、大きな洋卓の周囲に天鵝絨で張つた腰掛が并んでいて、待ち合している三四人が、うずくまるように腮を襟に埋めていた。それが皆女であつた。奇麗な茶色の瓦斯暖炉には火がまだ焚いてなかつた。宗助は大きな姿見に映る白壁の色を斜めに見て、番の来るのを待つていたが、あまり退屈になつたので、洋卓の上に重ねてあつた雑誌に眼を着けた。一二冊手に取つて見ると、いずれも婦人用のものであつた。宗助はその口絵に出ている女の写真を、何枚も繰り返して眺めた。それから「成功」と云う雑誌を取り上げた。その初めに、成効の秘訣というようなのが箇条書にしてあつたうちに、何でも猛進しなくてはいけないと云う一力条と、ただ猛進してもいけない、立派な根底の上に立つて、猛進しなくてはならないと云う一力条を読んで、それなり雑誌を伏せた。「成功」と宗助は非常に縁の遠いものであ

つた。宗助はこういう名の雑誌があると云う事さえ、今日まで知らなかつた。それでまた珍らしくなつて、いったん伏せたのをまた開けて見ると、ふと仮名の交らない四角な字が二行ほど並んでいた。それには風碧落を吹いて浮雲尽き、月東山に上つて玉一団とあつた。宗助は詩とか歌とかいうものには、元から余り興味を持たない男であつたが、どう云う訳かこの二句を読んだ時に大変感心した。対句が旨くできたとか何とか云う意味ではなくつて、こんな景色と同じような心持になれたら、人間もさぞ嬉しかろうと、ひよつと心が動いたのである。宗助は好奇心からこの句の前に付いている論文を読んだ。しかしそれはまるで無関係のように思われた。ただこの二句が雑誌を置いた後でも、しきりに彼の頭の中を徘徊した。彼の生活は實際この四五年来こういう景色に出逢つた事がなかつたのである。

その時向うの戸が開いて、紙片を持った書生が野中さんと宗助を手術室へ呼び入れた。

中へ這入ると、そこは応接間よりは倍も広かつた。光線がなるべく余計取れるように明るく拵らえた部屋の二側に、手術用の椅子を四台ほど据えて、白い胸掛をかけた受持の男が、一人ずつ別々に療治をしていた。宗助は一番奥の方にある一脚に案内されて、これへと云われるので、踏段のようなものの上へ乗つて、椅子へ腰をおろした。書生が厚い緞入の前掛で丁寧に膝から下を包んでくれた。

こう穏やかに寝かされた時、宗助は例の歯がさほど苦になるほど痛んでいないと云う事を発見した。そればかりか、肩も背も、腰の周りも、心安く落ちついて、いかにも楽に調子

が取れている事に気がついた。彼はただ仰（あ）むいて天井（てんじやう）から下っている瓦斯（ガス）管（かん）を眺（なが）めた。そうしてこの構（かまえ）と設備（きぶ）では、帰（か）りがけに思ったより高い療（りやう）治（ち）代（だい）を取（と）られるかも知れないと氣（き）遣（つか）った。

ところへ顔（か）の割（わり）に頭（かぶ）の薄（うす）くなり過ぎた肥（ふ）った男（おとこ）が出て来て、大麥（ていまい）丁寧（ていねい）に挨拶（あいさつ）をしたので、宗助（そうすけ）は少し椅子（いす）の上（うへ）で狼（あ）狽（だ）たように首（くび）を動（うご）かした。肥（ふ）った男（おとこ）は一応（いおう）容（よう）体（たい）を聞（き）いて、口（くち）中（ちゆう）を檢（けん）査（さ）して、宗助（そうすけ）の痛（いた）いと云（い）う齒（は）をちよつと揺（ゆ）つて見（み）たが、

「どうもこう弛（ゆる）みますと、とても元（もと）のように緊（し）まる訳（わけ）には参（ま）りますまいと思（おも）いますが。何（なん）しろ中（ちゆう）がエソになつておりますから」と云（い）つた。

宗助（そうすけ）はこの宣告（せんこ）を淋（さび）しい秋（あき）の光（ひかり）のように感（かん）じた。もうそんな年（とし）なんでしょうかと聞（き）いて見（み）たくなつたが、少（せう）しきまりが悪（わる）いので、ただ、

「じゃ癒（な）らないんですか」と念（ねん）を押（お）した。

肥（ふ）った男（おとこ）は笑（わら）いながらこ（こ）う云（い）つた。――

「まあ癒（な）らないと申（まを）し上げるよりほかに仕（し）方（ほう）がござんせんな。

やむを得（え）なければ、思（おも）い切（き）つて抜（ぬ）いてしま（し）うんですが、今のところでは、まだそれほどもございますまいから、ただ御（ご）痛（いた）みだけを留（とど）めておきましよう。何（なん）しろエソ――エソと申（まを）しても御（ご）分（わ）りにならないかも知（し）れませんが、中（ちゆう）がまるで腐（くさ）つております」

宗助（そうすけ）は、そうですかと云（い）つて、ただ肥（ふ）った男（おとこ）のなすがままにしておいた。すると彼は器（き）械（かい）をぐるぐる廻（まわ）して、宗助（そうすけ）の齒（は）の根（ね）へ穴（あな）を開（ひら）け始（はじ）めた。そうしてその中（ちゆう）へ細（こ）い針（はり）のようなものを刺（さ）し通（とお）しては、その先（さき）を嗅（か）いでいたが、しまいに糸（いと）ほ

どな筋（すぢ）を引き出して、神（しん）經（けい）がこれだけ取（と）れましたと云（い）いながら、それを宗助（そうすけ）に見（み）せてくれた。それから藥（くすり）でその穴（あな）を埋（う）めて、明日（あした）またいらつしやいと注意（ちゆうい）を与（たま）えた。

椅子（いす）を下（くだ）りるとき、身（み）体（たい）が真（ま）直（ちやう）ぐになつたので、視（し）線（せん）の位置（いち）が天井（てんじやう）からふと庭（にわ）先（さき）に移（うつ）つたら、そこにあつた高（たか）さ五（ご）尺（しゃく）もあろうと云（い）う大（おほ）きな鉢（はち）栽（さい）の松（まつ）が宗助（そうすけ）の眼（め）に這（はい）入（い）つた。その根（ね）方の所（ところ）を、草（くさ）鞋（じや）がけの植（う）木（き）屋（や）が丁寧（ていねい）に薦（こ）で包（くる）んでいた。だんだん露（こ）が凝（こ）つて霜（しも）になる時（とき）節（せつ）なので、余（よ）裕（ゆう）のあるものは、もう今（いま）時（とき）分（ぶん）から手（て）廻（まわ）しをするのだと氣（き）がついた。

帰（か）りがけに玄（げん）關（かん）脇（わき）の藥（くすり）局（きよく）で、粉（こな）藥（やく）のまま含（がん）嗽（そう）劑（ざい）を受（う）取（と）つて、それを百（ひゃく）倍（ばい）の微（び）温（おん）湯（たう）に溶（と）解（かい）して、一日（いちにち）十（じゅう）數（すう）回（かい）使（し）用（よう）すべ（べき）注（ちゆう）意（い）を受（う）けた時（とき）、宗助（そうすけ）は會（かい）計（けい）の請（きん）求（きゅう）した療（りやう）治（ち）代（だい）の案（あん）外（がい）廉（れん）なのを喜（よろこ）んだ。これならば向（むか）うで云（い）う通（とお）り四（よ）五（ご）回（かい）通（とお）つたところ（ところ）が、さして困（こ）難（なん）でもな（な）いと思（おも）つて、靴（くつ）を穿（は）こうとすると、今（いま）度（ど）は靴（くつ）の底（ぞこ）がいつの間（ま）にか破（やぶ）れてい（い）る事（こと）に氣（き）がついた。

宅（うち）へ着（き）いた時（とき）は一（ひと）足（あし）違（ちが）ひで叔（しよ）母（ぼ）がもう帰（か）つたあと（あと）であつた。

宗助（そうすけ）は、

「おお、そうだつたか」と云（い）いながら、はなはだ面（めん）倒（たう）そうに洋服（やうふく）を脱（か）ぎ更（か）えて、いつもの通（とお）り火（ひ）鉢（ばち）の前（まえ）に坐（ま）つた。御（ご）米（まい）は襯（しん）衣（い）や洋（やう）袴（ばく）や靴（くつ）足（あし）袋（ふくろ）を一（ひと）抱（かか）え、六（む）畳（じやう）へ這（はい）入（い）つた。宗助（そうすけ）はぼんやりして、煙（たばこ）草（さ）を吹（ふ）かし始（はじ）めたが、向（むか）うの部（ぶ）屋（や）で、刷（は）毛（もう）を掛（か）ける音（おと）がし出（で）した時（とき）、

「御（ご）米（まい）、佐（さ）伯（はく）の叔（しよ）母（ぼ）さんは何（なん）とか云（い）つて来（き）たのかい」と聞（き）いた。

齒（しつ）痛（う）が自（おの）ずから治（おさ）まつたので、秋（あき）に襲（おそ）われるような寒（さ）い氣（き）分（ぶん）は、少（せう）し軽（か）くなつたけれども、やがて御（ご）米（まい）が隱（おん）袋（ふくろ）から取（と）り出（で）

して来た粉薬を、温ま湯に溶いて貰って、しきりに含嗽を始めた。その時彼は縁側へ立ったまま、

「どうも日が短かくなつたなあ」と云った。

やがて日が暮れた。昼間からあまり車の音を聞かない町内は、宵の口から寂としていた。夫婦は例の通り洋灯の下に寄った。広い世の中で、自分達の坐っている所だけが明るく思われた。そうしてこの明るい灯影に、宗助は御米だけを、御米は宗助だけを意識して、洋灯の力の届かない暗い社会は忘れていた。彼らは毎晩こう暮らして行く裡に、自分達の生命を見出していたのである。

この静かな夫婦は、安之助の神戸から土産に買つて来たと言ふ養老昆布の缶をがらがら振つて、中から山椒入りの小さく結んだ奴を撰り出しながら、緩くり佐伯からの返事を語り合つた。

「しかし月謝と小遣ぐらいは都合してやってくれても好きそうなもんじゃないか」

「それができないんだって。どう見積つても両方寄せると、十円にはなる。十円と云う纏った御金を、今のところ月々出すのは骨が折れるって云うのよ」

「それじゃことしの暮まで二十何円ずつか出してやるのも無理じゃないか」

「だから、無理をしても、もう一二カ月のところだけは間に合せるから、そのうちにどうかして下さいと、安さんがそう云うんだって」

「實際できないのかな」

「そりや私には分らないわ。何しろ叔母さんが、そう云うの

よ」

「鯉舟で儲けたら、そのくらい訳なさうなもんじゃないか」
「本当ね」

御米は低い声で笑つた。宗助もちょっと口の端を動かしたが、話はそれで途切れてしまつた。しばらくしてから、
「何しろ小六は家へ来るときめるよりほかに道はあるまいよ。後はその上の事だ。今じゃ学校へは出ているんだね」と宗助が云つた。

「そうでしょう」と御米が答えるのを聞き流して、彼は珍らしく書斎に這入つた。一時間ほどして、御米がそつと襖を開けて覗いて見ると、机に向つて、何か読んでいた。

「勉強？ もう御休みなさなくなつて」と誘われた時、彼は振り返つて、

「うん、もう寝よう」と答えながら立ち上つた。

寝る時、着物を脱いで、寝巻の上に、絞りの兵児帯をぐるぐる巻きつけながら、

「今夜は久し振に論語を読んだ」と云つた。

「論語に何かあつて」と御米が聞き返したら、宗助は、

「いや何にもない」と答えた。それから、「おい、おれの歯はやっぱり年のせいだとき。ぐらぐらするのはとても癒らないそうだ」と云いつつ、黒い頭を枕の上に着けた。

六

小六はともかくも都合しだい下宿を引き払つて兄の家へ移る事に相談が調つた。御米は六畳に置きつけた桑の鏡台を眺

めて、ちょっと残り惜しい顔をしたが、

「こうなると少し遣場に困るのね」と訴えるように宗助に告げた。実際ここを取り上げられては、御米の御化粧をする場所が無くなってしまふのである。宗助は何の工夫もつかずに、立ちながら、向うの窓側に据えてある鏡の裏を斜に眺めた。すると角度の具合で、そこに御米の襟元から片頬が映っていた。それがいかにも血色のわるい横顔なのに驚ろかされて、「御前、どうかしたのかい。大変色が悪いよ」と云いながら、鏡から眼を放して、実際の御米の姿を見た。鬢が乱れて、襟の後の辺が垢で少し汚れていた。御米はただ、

「寒いせいなんでしょう」と答えて、すぐ西側に付いている。一間の戸棚を明けた。下には古い創だらけの筆筥があつて、上には支那鞆と柳行李が二つ三つ載つていた。

「こんなもの、どうしたつて片づけようがないわね」

「だからそのままにしておくさ」

小六のここへ引移つて来るのは、こう云う点から見、夫婦のいずれにも、多少迷惑であつた。だから来ると云つて約束しておきながら、今だに來ない小六に対しては、別段の催促もしなかつた。一日延びれば延びただけ窮屈が逃げたような気がどこかでした。小六にもちやうどそれと同じ憚があつたので、いられる限は下宿にいる方が便利だと胸をきめたものか、つい一日一日と引越を前へ送つていた。その癖彼の性質として、兄夫婦のごとく、荏苒の境に落ちついてはいられなかつたのである。

そのうち薄い霜が降りて、裏の芭蕉を見事に推いた。朝は崖上の家主の庭の方で、鵜が鋭どい声を立てた。夕方には

表を急ぐ豆腐屋の喇叭に交つて、円明寺の木魚の音が聞えた。日はますます短かくなつた。そうして御米の顔色は、宗助が鏡の中に認めた時よりも、爽かにはならなかつた。夫が役所から歸つて来て見ると、六畳で寝ている事が一二度あつた。どうかしたかと尋ねると、ただ少し心持が悪いと答えるだけであつた。医者に見て貰えと勧めると、それには及ばないと云つて取り合はなかつた。

宗助は心配した。役所へ出ていてもよく御米の事が氣にかかつて、用の邪魔になるのを意識する時もあった。ところがある日歸りがけに突然電車の中で膝を拍つた。その日は例になく元氣よく格子を明けて、すぐと勢よく今日はどうだいと御米に聞いた。御米がいつもの通り服や靴足袋を一纏めにして、六畳へ這入る後から追いて来て、

「御米、御前子供ができたんじゃないか」と笑いながら云つた。御米は返事もせず俯向いてしきりに夫の背広の埃を払つた。刷毛の音がやんでもなかなか六畳から出て來ないので、また行つて見ると、薄暗い部屋の中で、御米はたった一人寒そうに、鏡台の前に坐つていた。はいと云つて立ったが、その声が泣いた後の声のようであつた。

その晩夫婦は火鉢に掛けた鉄瓶を、双方から手で掩うようにして差し向つた。

「どうですな世の中は」と宗助が例にない浮いた調子を出した。御米の頭の中には、夫婦にならない前の、宗助と自分の姿が奇麗に浮んだ。

「ちっと、面白くしようじゃないか。この頃はいかにも不景氣だよ」と宗助がまた云つた。二人はそれから今度の日曜に

はいっしょにどこへ行こうか、ここへ行こうかと、しばらくそればかり話し合っていた。それから二人の春着の事が題目になった。宗助の同僚の高木とか云う男が、細君に小袖とかを強請られた時、おれは細君の虚栄心を満足させるために稼いでるんじゃないと云って跳ねつけたら、細君がそりや非道い、実際寒くなくても着て出るものがないんだと弁解するの、寒ければやむを得ない、夜具を着るとか、毛布を被るとかして、当分我慢しろと云った話を、宗助はおかしく繰り返して御米を笑わした。御米は夫のこの様子を見て、昔がまた眼の前に戻ったような気がした。

「高木の細君は夜具でも構わないが、おれは一つ新らしい外套を拵えたいな。この間齒医者へ行ったら、植木屋が薦で盆栽の松の根を包んでいたの、つくづくそう思った」

「外套が欲しいって」

「ああ」

御米は夫の顔を見て、さも気の毒だと云う風に、

「御拵らえなさいな。月賦で」と云った。宗助は、

「まあ止そうよ」と急に侘しく答えた。そうして「時に小六はいっつか来る気なんだろう」と聞いた。

「来るのは厭なんでしょう」と御米が答えた。御米には、自分が始めから小六に嫌われていると云う自覚があった。それでも夫の弟だと思うので、なるべくは反を合せて、少しでも近づけるように近づけるようにと、今日まで仕向けて来た。

そのためか、今では以前と違って、まあ普通の小舅ぐらいの親しみはあると信じているようなものの、こんな場合になると、つい実際以上に気を回して、自分だけが小六の来ない

唯一の原因のように考えられるのであった。

「そりや下宿からこんな所へ移るのは好かないだろうよ。ちようどこっちが迷惑を感じる通り、向うでも窮屈を感じる訳だから。おれだって、小六が来ないとすれば、今のうち思い切つて外套を作るだけの勇氣があるんだけれども」

宗助は男だけに思い切つてこう云つてしまった。けれどもこれだけでは御米の心を尽していなかった。御米は返事もせずに、しばらく黙っていたが、細い腮を襟の中へ埋めたまま、上眼を使つて、

「小六さんは、まだ私の事を悪んでいらつしやるでしょうかと聞き出した。宗助が東京へ来た当座は、時々これに類似の質問を御米から受けて、その都度慰めるのにだい骨の折れた事もあったが、近來は全く忘れたように何も云わなくなったので、宗助もつい氣に留めなかったのである。

「またヒステリーが始まったね。好いじゃないか小六なんぞが、どう思つたつて。おれさえついてれば」

「論語にそう書いてあつて」

御米はこんな時に、こういう冗談を云う女であつた。宗助は

「うん、書いてある」と答えた。それで二人の会話がしまひになった。

翌日宗助が眼を覚ますと、亜鉛張の庇の上で寒い音がした。御米が襷掛のまま枕元へ来て、

「さあ、もう時間よ」と注意したとき、彼はこの点滴の音を聞きながら、もう少し暖かい蒲団の中に温もっていたかった。けれども血色のよくない御米の、かいがいしい姿を見るや否

や、

「おい」と云って直起き上った。

外は濃い雨に鎖されていた。崖の上の孟宗竹が時々、蠶を振うように、雨を吹いて動いた。この侘びしい空の下へ濡れに出る宗助に取って、力になるものは、暖かい味噌汁と暖かい飯よりほかになかった。

「また靴の中が濡れる。どうしても二足持っていないと困る」と云って、底に小さい穴のあるのを仕方なしに穿いて、洋袴の裾を一寸ばかりまくり上げた。

午過ぎに帰って来て見ると、御米は金盥の中に雑巾を浸けて、六畳の鏡台の傍に置いていた。その上の所だけ天井の色が變つて、時々霰が落ちて来た。

「靴ばかりじゃない。家の中まで濡れるんだね」と云って宗助は苦笑した。御米はその晩夫のために置炬燵へ火を入れて、スコッチの靴下と縞羅紗の洋袴を乾かした。

明る日もまた同じように雨が降った。夫婦もまた同じように同じ事を繰り返した。その明る日もまだ晴れなかった。三日目の朝になって、宗助は眉を縮めて舌打をした。

「いつまで降る気なんだ。靴がじめじめして我慢にも穿けやしない」

「六畳だつて困るわ、ああ漏っちゃ」

夫婦は相談して、雨が晴れしだい、家根を繕って貰うように家主へ掛け合う事にした。けれども靴の方は何ともしようがなかった。宗助はきしんで這入らないのを無理に穿いて出て行った。

幸にその日は十一時頃からからりと晴れて、垣に雀の鳴

く小春日和になった。宗助が帰った時、御米は例より冴え冴えしい顔色をして、

「あなた、あの屏風を売っちゃいけないくって」と突然聞いた。抱一の屏風はせんだって佐伯から受取ったまま、元の通り書斎の隅に立ててあったのである。二枚折だけれども、座敷の位置と広さから云つても、実はむしろ邪魔な装飾であった。南へ廻すと、玄関からの入口を半分塞いでしまふし、東へ出すと暗くなる、と云って、残る一方へ立てれば床の間を隠すので、宗助は、

「せっかく親爺の記念だと思つて、取つて来たようなものの、しようがないねこれじゃ、場塞げで」と零した事も一二度あった。その都度御米は真丸な縁の焼けた銀の月と、絹地からほとんど区別できないような穂芒の色を眺めて、こんなものを珍重する人の気が知れないと云うような見えをした。けれども、夫を憚つて、明白さまには何とも云い出さなかった。ただ一返

「これでもいい絵なんでしょうかね」と聞いた事があつた。その時宗助は始めて抱一の名を御米に説明して聞かした。しかしそれは自分が昔し父から聞いた覚のある、臆氣な記憶を好加減に繰り返すに過ぎなかった。実際の画の価値や、また抱一についての詳しい歴史などに至ると宗助にもその実はなはだ覚束なかつたのである。

ところがそれが偶然御米のために妙な行為の動機を構成する原因となつた。過去一週間夫と自分の間に起つた会話に、ふとこの知識を結びつけて考え得た彼女はちよつと微笑んだ。この日雨が上つて、日脚がさつと茶の間の障子に射した時、

御米は不断着の上へ、妙な色の肩掛とも、襟巻ともつかない織物を纏って外へ出た。通りを二丁目ほど来て、それを電車の方角へ曲って真直に來ると、乾物屋と麵麴屋の間に、古道具を売っているかなり大きな店があった。御米はかつてそこで足の畳み込める食卓を買った記憶がある。今火鉢に掛けてある鉄瓶も、宗助がここから提げて歸つたものである。

御米は手を袖にして道具屋の前に立ち留まった。見ると相変らず新しい鉄瓶がたくさん並べてあった。そのほかには時節柄とでも云うのか火鉢が一番多く眼に着いた。しかし骨董と名のつくほどのものは、一つもないようであった。ひとり何とも知れぬ大きな亀の甲が、真向に釣るしてあって、その下から長い黄ばんだ払子が尻尾のように出ていた。それから紫檀の茶棚が一つ二つ飾ってあったが、いずれも狂の出そうな生なものばかりであった。しかし御米にはそんな区別はいっこう映らなかった。ただ掛物も屏風も一つも見当らない事だけ確かめて、中へ這入った。

御米は無論夫が佐伯から受取った屏風を、いくらかに売り払うつもりでわざわざここまで足を運んだのであるが、広島以来こう云う事にだいぶ経験を積んだ御蔭で、普通の細君のような努力も苦痛も感ぜずに、思い切って亭主と口を利く事ができた。亭主は五十恰好の色の黒い頬の瘡けた男で、鼈甲の縁を取った馬鹿に大きな眼鏡を掛けて、新聞を読みながら、疣だらけの唐金の火鉢に手を翳していた。

「そうですね、拝見に出てもようがす」と軽く受合つたが、別に気の乗った様子もないので、御米は腹の中で少し失望した。しかし自分からがすでに大した望を抱いて出て來た訳で

もないので、こう簡易に受けられると、こっちから頼むようにしても、見て貰わなければならなかった。「ようがす。じゃのちほど伺いましょう。今小僧がちよっと出ておりませんからな」

御米はこの存在な言葉を聞いてそのまま宅へ歸つたが、心の中では、はたして道具屋が来るか来ないかはなほだ疑わしく思った。一人でいつものように簡単な食事を済まして、清に膳を下げさしていると、いきなり御免下さいと云って、大きな声を出して道具屋が玄關からやつて來た。座敷へ上げて、例の屏風を見せると、なるほどと云って裏だの縁だのを撫でていたが、

「御払になるなら」と少し考えて、「六円に頂いておきましよう」と否々そうに価を付けた。御米には道具屋の付けた相場が至当のように思われた。けれども一応宗助に話してからでなくっては、余り専断過ぎると心づいた上、品物の歴史が歴史だけに、なおさら遠慮して、いずれ歸つたらよく相談して見た上でと答えたまま、道具屋を歸そうとした。道具屋は出掛に、

「じゃ、奥さんせつかくだから、もう一円奮発しましょう。それで御払い下さい」と云った。御米はその時思い切って、「でも、道具屋さん、ありや抱一ですよ」と答えて、腹の中ではひやりとした。道具屋は、平気で、

「抱一は近來流行りませんからな」と受け流したが、じろじろ御米の姿を眺めた上、

「じゃなおよく御相談なすつて」と云い捨てて歸って行つた。御米はその時の模様を詳しく話した後で、

「売っちゃいけなくなつて」とまた無邪氣に聞いた。

宗助の頭の中には、この間から物質上の欲求が、絶えず動いていた。ただ地味な生活をしなければ結果として、足らぬ家計を足ると諦める癖がついているので、毎月きまって這入るもののほかには、臨時に不意の工面をしてまで、少しでも常以上に寛ろいで見ようと云う働は出なかった。話を聞いたとき彼はむしろ御米の機敏な才覚に驚ろかされた。同時にはたしてそれだけの必要があるかを疑った。御米の思わくを聞いて見ると、ここで十円足らずの金が入れば、宗助の穿く新しい靴を誂らえた上、銘仙の一反ぐらいは買えると云うのである。宗助はそれもそうだと思つた。けれども親から伝わつた抱一の屏風を一方に置いて、片方に新らしい靴及び新らしい銘仙を並べて考えて見ると、この二つを交換する事がいかにも突飛でかつ滑稽であつた。

「売るなら売っていいがね。どうせ家に在つたつて邪魔になるばかりだから。けれどもおれはまだ靴は買わないでも済むよ。この間中みたように、降り続けに降られると困るが、もう天気も好くなつたから」

「だつてまた降ると困るわ」

宗助は御米に対して永久に天気を保証する訳にも行かなかった。御米も降らない前には是非屏風を売れとも云いかねた。

二人は顔を見合して笑つていた。やがて、

「安過ぎるでしょうか」と御米が聞いた。

「そうさな」と宗助が答えた。

彼は安いと云われれば、安いような気がした。もし買手があれば、買手の出すだけの金はいくらでも取りたかつた。彼

は新聞で、近來古書画の入札が非常に高価になつた事を見たような心持がした。せめてそんなものが一幅でもあつたらと思つた。けれどもそれは自分の呼吸する空氣の届くうちには、落ちていないものと諦めていた。

「買手にも因るだろうが、売手にも因るんだよ。いくら名画だつて、おれが持つていた分にはとうていそう高く売れっこはないさ。しかし七円や八円でえな、余り安いようだね」

宗助は抱一の屏風を弁護すると共に、道具屋をも弁護するような語氣を洩らした。そうしてただ自分だけが弁護に値しないもののように感じた。御米も少し氣を腐らした氣味で、屏風の話はそれなりにした。

翌日宗助は役所へ出て、同僚の誰彼にこの話をした。すると皆申し合せたように、それは価じやないと云つた。けれども誰も自分が周旋して、相当の価に売払つてやろうと云うものはなかった。またどう云う筋を通れば、馬鹿な目に逢わないで済むという手續を教えてくれるものもなかった。宗助はやっぱり横町の道具屋に屏風を売るよりほかに仕方がなかった。それでなければ元の通り、邪魔でも何でも座敷へ立てておくよりほかに仕方がなかった。彼は元の通りそれを座敷へ立てておいた。すると道具屋が来て、あの屏風を十五円に売ってくれと云い出した。夫婦は顔を見合して微笑んだ。もう少し売らずに置いてみようじやないかと云つて、売らずにおいた。すると道具屋がまた来た。また売らなかつた。御米は断るのが面白くなつて来た。四度目には知らない男を一人連れて来たが、その男とこそそ相談して、とうとう三十五円に価を付けた。その時夫婦も立ちながら相談した。そうして

ついに思い切って屏風を売り払った。

七

円明寺の杉が焦げたように赭黒^{あかくろ}くなった。天氣の好い日には、風に洗われた空の端^はずれに、白い筋の嶮^けしく見える山が出た。年は宗助^{そうすけ}夫婦を駆^かつて日ごとに寒い方へ吹き寄せた。朝になると欠かさず通る納豆^{なとうり}売の音が、瓦^{かわら}を鎖^{とぎ}す霜^{しも}の色を連想せしめた。宗助は床の中でその声を聞きながら、また冬が来たと思ひ出した。御米^{およね}は台所で、今年も去年のように水道の栓^{せん}が氷つてくれなければ助かるがと、暮から春へ掛けての取越苦勞をした。夜になると夫婦とも炬燵^{こたつ}にばかり親しんだ。そうして広島や福岡の暖かい冬を羨^{うら}やんだ。

「まるで前の本多さんみたようね」と御米が笑った。前の本多さんと云うのは、やはり同じ構^{かま}内に住んで、同じ坂井の貸家を借りている隠居夫婦であった。小女^{こおんな}を一人使つて、朝から晩までことりと音もしないように静かな生計^{しごと}を立てていた。御米が茶の間で、たった一人裁縫^{しご}をしていると、時々御爺^{おじい}さんと云う声がした。それはこの本多の御婆さんが夫を呼ぶ声であった。門口^{かどぐち}などで行き逢うと、丁寧^{ていねい}に時候の挨拶^{あいさつ}をして、ちと御話にいらっしやいと云うが、ついぞ行つた事もなければ、向うからも来た試^{ため}がない。したがって夫婦の本多さんに関する知識^{ちしき}は極めて乏しかった。ただ息子が一人あつて、それが朝鮮^{ちようかん}の統監^{とうかん}府^ふとかで、立派な役人になっているから、月々その方の仕送^{しおく}で、氣樂に暮らして行かれるのだと云う事だけを、出入^{でいり}の商人のあるものから耳にした。

「御爺さんはやっぱり植木を弄^{いじ}っているかい」
「だんだん寒くなつたから、もうやめたんでしよう。縁の下に植木鉢^{けち}がたくさん並んでるわ」

話はそれから前の家^{うち}を離れて、家主^{やぬし}の方へ移つた。これは、本多とはまるで反対で、夫婦から見ると、この上もない賑^{にぎ}やかそうな家庭に思われた。この頃は庭が荒れているので、大勢の小供^{こども}が崖^{がけ}の上へ出て騒ぐ事はなくなつたが、ピアノの音は毎晩のようにする。折々は下女^{げによう}か何ぞの、台所の方で高笑をする声さえ、宗助の茶の間まで響いて来た。

「ありやいったい何をする男なんだい」と宗助が聞いた。この間は今までも幾度か御米に向つて繰り返されたものであつた。

「何にもしないで遊^{あそ}んでるんでしよう。地面や家作^{けさく}を持つて」と御米が答えた。この答も今までにもう何遍か宗助に向つて繰り返されたものであつた。

宗助はこれより以上立ち入つて、坂井の事を聞いた事がなかった。学校をやめた当座は、順境にいて得意な振舞をするものに逢うと、今に見ろと云う氣も起つた。それがしばらくすると、單^{たん}なる憎悪^{そうお}の念に變化した。ところが一二年このかたは全く自他の差違^{さち}に無頓着^{むとんちゃく}になつて、自分は自分のように生れついたものの、先は先のような運を持つて世の中へ出て来たもの、両方共始から別種類^{べつしゆるい}の人間だから、ただ人間として生息する以外に、何の交渉も利害もないのだと考えるようになってきた。たまに世間話のついでとして、ありやといったい何をしている人だぐらいは聞きもするが、それより先は、教えて貰^{もら}う努力さえ出すのが面倒だった。御米にもこれと同じ

傾きがあつた。けれどもその夜は珍らしく、坂井の主人は四十恰好の髯のない人であると云う事やら、ピアノを弾くのは惣領の娘で十三になると云う事やら、またほかの家の小供が遊びに来て、ブランコへ乗せてやらないと云う事やらを話した。

「なぜほかの家の子供はブランコへ乗せないんだい」

「つまり吝なんでしょう。早く悪くなるから」

宗助は笑い出した。彼はそのくらい吝嗇な家主が、屋根が漏ると云えば、すぐ瓦師を寄こしてくれる、垣が腐つたと訴えればすぐ植木屋に手を入れさしてくれるのは矛盾だと思つたのである。

その晩宗助の夢には本多の植木鉢も坂井のブランコもなかつた。彼は十時半頃床に入つて、万象に疲れた人のように鼾をかいた。この間から頭の具合がよくないため、寝付の悪いのを苦にしていた御米は、時々眼を開けて薄暗い部屋を眺めた。細い灯が床の間の上に乗せてあつた。夫婦は夜中灯火を点けておく習慣がついているので、寝る時はいつでも心を細目にして洋灯をここへ上げた。

御米は氣にするように枕の位置を動かした。そうしてそのたびに、下に行っている方の肩の骨を、蒲団の上で滑らした。しまいには腹這になつたまま、両脇を突いて、しばらく夫の方を眺めていた。それから起き上つて、夜具の裾に掛けてあつた不斷着を、寝巻の上へ羽織つたなり、床の間の洋灯を取り上げた。

「あなたあなた」と宗助の枕元へ来て曲みながら呼んだ。その時夫はもう鼾をかいていなかった。けれども、元の通り深

い眠から来る呼吸が続けていた。御米はまた立ち上つて、洋灯を手にしたまま、間の襖を開けて茶の間へ出た。暗い部屋が茫漠手元の灯に照らされた時、御米は鈍く光る箆笥の環を認めた。それを通り過ぎると黒く燦ぶった台所に、腰障子の紙だけが白く見えた。御米は火の氣のない真中に、しばらく佇ずんでいたが、やがて右手に当る下女部屋の戸を、音のしないようにそつと引いて、中へ洋灯の灯を翳した。下女は縞も色も判然映らない夜具の中に、土竜のごとく塊まって寝ていた。今度は左側の六畳を覗いた。がらんとして淋しい中に、例の鏡台が置いてあつて、鏡の表が夜中だけに凄く眼にこたえた。

御米は家中を一回回つた後、すべてに異状のない事を確かめた上、また床の中へ戻つた。そうしてようやく眼を眠つた。今度は好い具合に、眼蓋のあたりに氣を遣わないで済むように覚えて、しばらくするうちに、うとうととした。

するとまたふと眼が開いた。何だかずしんと枕元で響いたような心持がする。耳を枕から離して考えると、それはある大きな重いものが、裏の崖から自分達の寝ている座敷の縁の外へ転がり落ちたと思われなかつた。しかし今眼が覚めるすぐ前に起つた出来事で、けつして夢の続じゃないと考えた時、御米は急に氣味を悪くした。そうして傍に寝ている夫の夜具の袖を引いて、今度は真面目に宗助を起し始めた。

宗助はそれまで全くよく寝ていたが、急に眼が覚めると、御米が、

「あなたちよつと起きて下さい」と揺つていたので、半分は夢中に、

「おい、好し」とすぐ蒲団の上へ起き直った。御米は小声で先刻からの様子を話した。

「音は一遍した限なのかい」

「だって今したばかりなのよ」

二人はそれで黙った。ただじつと外の様子を伺っていた。けれども世間は森と静であった。いつまで耳を峙てていても、再び物の落ちて来る気色はなかった。宗助は寒いと云いながら、単衣の寝巻の上へ羽織を被って、縁側へ出て、雨戸を一枚繰った。外を覗くと何にも見えない。ただ暗い中から寒い空気がにわかに肌に逼って来た。宗助はすぐ戸を閉てた。

鏝をおろして座敷へ戻るや否や、また蒲団の中へ潜り込んだが、

「何にも変った事はありません。多分御前の夢だろう」と云って、宗助は横になった。御米はけっして夢でないと主張した。たしかに頭の上で大きな音がしたのだと固執した。宗助は夜具から半分出した顔を、御米の方へ振り向けて、

「御米、お前は神経が過敏になって、近頃どうかしているよ。もう少し頭を休めてよく寝る工夫でもしなくっちゃいけない」と云った。

その時次の間の柱時計が二時を打った。その音で二人ともちよつと言葉を途切らして、黙って見ると、夜はさらに静まり返ったように思われた。二人は眼が冴えて、すぐ寝つかれそうにもなかった。御米が、

「でもあなたは気楽ね。横になると十分経たないうちに、もう寝ていらつしやるんだから」と云った。

「寝る事は寝るが、気が楽で寝られるんじゃない。つまり疲

れるからよく寝るんだろう」と宗助が答えた。

こんな話をしていっているうちに、宗助はまた寝入ってしまった。御米は依然として、のっそつ床の中で動いていた。すると表をがらりと烈しい音を立てて車が一台通った。近頃御米は時々夜明前の車の音を聞いて驚ろかされる事があった。そうしてそれを思い合わせると、いつも似寄った刻限なので、必竟は毎朝同じ車が同じ所を通るのだらうと推測した。多分牛乳を配達するためかなどで、ああ急ぐに達しないときめていたから、この音を聞くと等しく、もう夜が明けて、隣人の活動が始ったごとくに、心丈夫になった。そうこうしていると、どこかで鶏の声が聞えた。またしばらくすると、下駄の音を高く立てて往来を通るものがあつた。そのうち清が下女部屋の戸を開けて厠へ起きた模様だったが、やがて茶の間へ来て時計を見ているらしかった。この時床の間に置いた洋灯の油が減って、短かい心に届かなくなつたので、御米の寝ている所は真暗になっていた。そこへ清の手にした灯火の影が、襖の間から射し込んだ。

「清かい」と御米が声を掛けた。

清はそれからすぐ起きた。三十分ほど経って御米も起きた。また三十分ほど経って宗助もついに起きた。平常は好い時分に御米がやって来て、

「もう起きてもよくつてよ」と云うのが例であつた。日曜とたまの旗日には、それが、

「さあもう起きてちょうだい」に変わるだけであつた。しかし今日は昨夕の事が何となく気にかかるので、御米の迎に來ないうち宗助は床を離れた。そうして直崖下の雨戸を繰った。

下から覗くと、寒い竹が朝の空氣に鎖されてじつとしてい
る後から、霜を破る日の色が射して、幾分か頂を染めてい
た。その二尺ほど下の勾配の一番急な所に生えている枯草が、
妙に摺り剥けて、赤土の肌を生々しく露出した様子に、宗助
はちよつと驚ろかされた。それから一直線に降りて、ちよう
ど自分の立っている縁鼻の土が、霜柱を推いたように荒れて
いた。宗助は大きな犬でも上から転がり落ちたのじやなかろ
うかと思つた。しかし犬にしてはいくら大きいにしても、余
り勢が烈し過ぎると思つた。

宗助は玄関から下駄を提げて来て、すぐ庭へ下りた。縁の
先へ便所が折れ曲つて突き出しているので、いとど狭い崖下
が、裏へ抜ける半間ほどの所はなおさら狭苦しくなつていた。
御米は掃除屋が来るたびに、この曲り角を氣にしては、

「あすこがもう少し広いといひけれども」と危険がるので、
よく宗助から笑われた事があつた。

そこを通り抜けると、真直に台所まで細い路が付いている。
元は枯枝の交つた杉垣があつて、隣の庭の仕切りになつてい
たが、この間家主が手を入れた時、穴だらけの杉葉を奇麗に
取り払つて、今では節の多い板塀が片側を勝手口まで塞いで
しまつた。日当りの悪い上に、樋から雨滴ばかり落ちるので、
夏になると秋海棠がいっぱい生える。その盛りな頃は青い葉
が重なり合つて、ほとんど通り路がなくなるくらい茂つて来
る。始めて越した年は、宗助も御米もこの景色を見て驚ろか
されたくらいである。この秋海棠は杉垣のまだ引き抜かれな
い前から、何年となく地下に蔓つていたもので、古家の取り毀
たれた今でも、時節が来ると昔の通り芽を吹くものと解つた

時、御米は、

「でも可愛いわね」と喜んだ。

宗助が霜を踏んで、この記念の多い横手へ出た時、彼の眼
は細長い路次の一点に落ちた。そうして彼は日の通わない寒
さの中にはたと留まつた。

彼の足元には黒塗の蒔絵の手文庫が放り出してあつた。中
味はわざわざそこへ持つて来て置いて行つたように、霜の上
にちゃんと据つているが、蓋は二三尺離れて、塀の根に打ち
つけられたごとくに引つ繰り返つて、中を張つた千代紙の模
様が判然見えた。文庫の中から洩れた、手紙や書付類が、そ
こいらに遠慮なく散らばつていゝ中に、比較的長い一通がわ
ざわざ二尺ばかり広げられて、その先が紙屑のごとく丸めて
あつた。宗助は近づいて、この揉苦茶になつた紙の下を覗い
て覺えず苦笑した。下には大便が垂れてあつた。

土の上に散らばつていゝ書類を一纏にして、文庫の中へ入
れて、霜と泥に汚れたまま宗助は勝手口まで持つて来た。
腰障子を開けて、清に

「おいこれをちよつとそこへ置いてくれ」と渡すと、清は妙
な顔をして、不思議そうにそれを受取つた。御米は奥で座敷
へ払塵を掛けていた。宗助はそれから懷手をして、玄関だの
門の辺をよく見廻つたが、どこにも平常と異なる点は認めら
れなかつた。

宗助はようやく家へ入つた。茶の間へ来て例の通り火鉢の
前へ坐つたが、すぐ大きな声を出して御米を呼んだ。御米は、
「起き抜けにどこへ行つていらしたの」と云いながら奥か
ら出て来た。

「おい昨夜枕元で大きな音がしたのは、やっぱり夢じゃなかったんだ。泥棒だよ。泥棒が坂井さんの崖の上から宅の庭へ飛び下りた音だ。今裏へ回って見たら、この文庫が落ちていて、中にはいつていた手紙なんぞが、むちゃくちゃに放り出してあった。おまけに御馳走まで置いて行つた」

宗助は文庫の中から、二三通の手紙を出して御米に見せた。それには皆坂井の名宛が書いてあった。御米は吃驚して立膝のまま、

「坂井さんじゃほかに何か取られたでしょうか」と聞いた。宗助は腕組をして、

「ことに因ると、まだ何かやられたね」と答えた。

夫婦はともかくもと云うので、文庫をそこへ置いたなり朝飯の膳に着いた。しかし箸を動かす間も泥棒の話は忘れなかった。御米は自分の耳と頭のたしかな事を夫に誇った。宗助は耳と頭のたしかでない事を幸福とした。

「そうおっしゃるけれど、これが坂井さんでなくって、宅で御覧なさい。あなたみたように、ぐうぐう寝ていらしたら困るじゃないの」と御米が宗助をやり込めた。

「なに、宅なんぞへ這入る気遣はないから大丈夫だ」と宗助も口の減らない返事をした。

そこへ清が突然台所から顔を出して、

「この間拵えた旦那様の外套でも取られようものなら、それこそ騒ぎでございましたね。御宅でなくって坂井さんだったから、本当に結構でございます」と真面目に悦の言葉を述べたので、宗助も御米も少し挨拶に窮した。

食事を済まして、出勤の時刻にはまだだいぶ間があった。

坂井では定めて騒いでるだろうと云うので、文庫は宗助が自分で持つて行つてやる事にした。蒔絵ではあるが、ただ黒地に亀甲形を金で置いただけの事で、別に大して金目の物とも思えなかった。御米は唐棧の風呂敷を出してそれを包んだ。風呂敷が少し小さいので、四隅を対う同志繫いで、真中にこま結びを二つ拵えた。宗助がそれを提げたところは、まるで進物の菓子折のようであった。

座敷で見ればすぐ崖の上だが、表から廻ると、通りを半町ばかり来て、坂を上つて、また半町ほど逆に戻らなければ、坂井の門前へは出られなかった。宗助は石の上へ芝を盛って扇骨木を奇麗に植えつけた垣に沿うて門内に入った。

家の内はむしろ静か過ぎるくらいしんとしていた。摺硝子の戸が閉てある玄関へ来て、ベルを二三度押して見たが、ベルが利かないと見えて誰も出て来なかった。宗助は仕方なしに勝手口へ廻った。そこにも摺硝子の嵌まった腰障子が二枚閉てあった。中では器物を取り扱う音がした。宗助は戸を開けて、瓦斯七輪を置いた板の間に蹲踞んでいる下女に挨拶をした。

「これはこちらなのでしょう。今朝私の家の裏に落ちていましたから持つて来ました」と云いながら、文庫を出した。

下女は「そうでございましたか、どうも」と簡単に礼を述べて、文庫を持ったまま、板の間の仕切まで行つて、仲働らしい女を呼び出した。そこで小声に説明をして、品物を渡すと、仲働はそれを受取ったなり、ちよつと宗助の方を見たがすぐ奥へ入った。入れ違に、十二三になる丸顔の眼の大きな女の子と、その妹らしい揃のリボンを懸けた子がいっしょ

に馳^かけて来て、小さい首を二つ並べて台所へ出した。そうして宗助の顔を眺^{なが}めながら、泥棒よと耳語^{ささやき}やった。宗助は文庫を渡してしまえば、もう用が済んだのだから、奥の挨拶はどうでもいいとして、すぐ帰ろうかと考えた。

「文庫は御宅のでしょうね。いいんでしょね」と念を押して、何にも知らない下女を気の毒がらしているところへ、最前の仲働が出て来て、

「どうぞ御通り下さい」と丁寧^{ていねい}に頭を下げたので、今度は宗助の方が少し痛み入るようになった。下女はいよいよしとやかに同じ請求を繰り返した。宗助は痛み入る境を通り越して、ついに迷惑を感じ出した。ところへ主人が自分で出て来た。

主人は予想通り血色の好い下^{しも} 膨^{ふくれ}の福相^{ふくそう}を具^{そな}えていたが、御米の云ったように髭^{ひげ}のない男ではなかった。鼻の下に短かく刈り込んだのを生やして、ただ頬^ほから腮^{あご}を奇麗^{きれい}に蒼^{あお}くしていた。

「いやどうもとんだ御手数^{ごてかず}で」と主人は眼尻^{めじり}に皺^{しわ}を寄せながら礼を述べた。米沢^{よねざわ}の紺^{かすり}を着た膝^{ひざ}を板の間に突いて、宗助からいろいろ様子を聞いている態度が、いかにも緩^{ゆる}くりしていた。宗助は昨夕^{ゆうべ}から今朝へかけての出来事を一通り掻い撮^{つか}んで話した上、文庫のほかには何か取られたものがあるかないかを尋ねて見た。主人は机の上に置いた金時計を一つ取られた由^{よし}を答えた。けれどもまるで他のものでも失^なくした時のように、いっこう困ったと云う気色^{けしき}はなかった。時計よりはむしろ宗助の叙述の方に多くの興味を有^もって、泥棒が果して崖を伝って裏から逃げるつもりだったろうか、または逃げる拍子^{ひょうし}に、崖から落ちたものだろうかと云うような質問を掛けた。

宗助は固^{もと}より返答ができなかった。

そこへ最前の仲働が、奥から茶や蓐^ぐを運んで来たので、宗助はまた帰りはぐれた。主人はわざわざ座蒲団^{ざぶとん}まで取り寄せて、とうとうその上へ宗助の尻を据^すえさした。そうして今朝早く来た刑事の話をし始めた。刑事の判定によると、賊は宵から邸内に忍び込んで、何でも物置かなぞに隠れていたに違^{ちが}ない。這入口^{はいりぐち}はやはり勝手である。燐寸^{マツチ}を擦^すって蠟燭^{ろうそく}を点して、それを台所にあつた小桶^{こおけ}の中へ立てて、茶の間へ出たが、次の部屋には細君と子供が寝ているので、廊下伝いに主人の書斎へ来て、そこで仕事をしていると、この間生れた末の男の子が、乳を呑^のむ時刻が来たものか、眼を覚^さまして泣き出したため、賊は書斎の戸を開けて庭へ逃げたらしい。

「平常^{いづつも}のように犬がいると好かったんですがね。あいにく病気なので、四五日前病院へ入れてしまったもんですから」と主人は残念がった。宗助も、

「それは惜しい事でした」と答えた。すると主人はその犬の種^{ブリード}やら血統やら、時々獵^{かり}に連れて行く事や、いろいろな事を話し始めた。

「獵^{りよう}は好ですから。もっとも近来は神経痛で少し休んでいますが。何しろ秋口から冬へ掛けて嶋^{しぎ}なぞを打ちに行くと、どうしても腰から下は田の中へ浸^{つか}って、二時間も三時間も暮らさなければならいんですから、全く身体^{からだ}には好くないようです」

主人は時間に制限のない人と見えて、宗助が、なるほどとか、そうですか、とか云っていると、いつまでも話しているので、宗助はやむを得ず途中で立ち上がった。

「これからまた例の通り出かけなければなりませんから」と切り上げると、主人は始めて気がついたように、忙がしいところを引き留めた失礼を謝した。そうしていずれまた刑事が現状を見に行くかも知れないから、その時はよろしく願うと云うような事を述べた。最後に、

「どうかちと御話に。私も近頃はむしろ閑な方ですから、また御邪魔に出ますから」と丁寧（ていねい）に挨拶をした。門を出て急ぎ足に宅へ帰ると、毎朝出る時刻よりも、もう三十分ほど後れていた。

「あなたどうなすったの」と御米が気を揉んで玄関へ出た。

宗助はすぐ着物を脱いで洋服に着換えながら、

「あの坂井と云う人はよっぽど気楽な人だね。金があるとおあ（ゆる）くりできるもんかな」と云った。

八

「小六さん、茶の間から始めて。それとも座敷の方を先にして」と御米（およね）が聞いた。

小六は四五日前とうとう兄の所へ引き移った結果として、今日の障子（しょうじ）の張替（はりかえ）を手伝わなければならない事となった。彼は昔（むか）叔父（しよふ）の家にいた時、安之助（やすのすけ）といっしょになって、自分の部屋の唐紙（からかみ）を張り替えた経験がある。その時は糊（のり）を盆（ひら）に溶（と）いたり、篋（へら）を使って見たり、だいぶ本式にやり出したが、首尾（しゆび）よく乾かして、いざ元の所へ建てるという段になると、二枚（そ）とも反（そ）つ繰（く）り返（か）って敷居（みぞ）の溝（みぞ）へ嵌（は）まらなかった。それからこれも安之助と共同して失敗した仕事であるが、叔母の云い

ついで、障子を張らせられたときには、水道でざぶざぶ枠（わく）を洗ったため、やっぱり乾いた後で、惣体（そうたい）に歪（ゆが）みが出て非常に困難した。

「姉さん、障子を張るときは、よほど慎重にしないと失策（しくじ）です。洗（せん）っちゃ駄目（だめ）ですぜ」と云いながら、小六は茶の間の縁側（えんがわ）からびりびり破き始めた。

縁先は右の方に小六のいる六畳が折れ曲って、左には玄関が突き出している。その向うを塀（へい）が縁と平行に塞（ふさ）いでいるから、まあ四角な囲内（かこうち）と云っていい。夏になるとコスモスを一面に茂らして、夫婦とも毎朝露の深い景色（けしき）を喜んだ事もあるし、また塀の下へ細い竹を立てて、それへ朝顔を絡（から）ませた事もある。その時は起き抜けに、今朝咲いた花の数を勘（かん）定（じよう）合（ご）って二人が楽（たのしみ）にした。けれども秋から冬へかけては、花も草もまるで枯れてしまうので、小さな砂漠（さばく）みたように、眺（なが）めるのも気の毒なくらい淋（さび）しくなる。小六はこの霜（しも）ばかり降りた四角な地面を背にして、しきりに障子の紙を剥（は）がしていた。

時々寒い風が来て、後（うしろ）から小六の坊主頭（えり）と襟（えり）の辺（あたり）を襲（おそ）った。そのたびに彼は赤い手を無言のまま働（はたら）かしながら、馬尻（バケツ）の中で雑巾（ぞうきん）を絞（しぼ）って障子の棧（さん）を拭き出した。

「寒いでしょう、御氣の毒（ごきどく）さまね。あいにく御天氣（ごてんき）が時雨（しぐ）れたもんだから」と御米（およね）が愛想（あいそ）を云って、鉄瓶（てつびん）の湯（ゆ）を注（つ）ぎ注（つ）ぎ、昨日（きのう）煮（ゆ）いた糊（のり）を溶（と）いた。

小六は実際こんな用をするのを、内心では大いに輕蔑（けいべつ）していた。ことに昨今自分がやむなく置かれた境遇（きんぐう）からして、この際（いま）多少自己を侮辱（おとし）しているかの觀（かん）を抱（いだ）いて雑巾（ぞうきん）を手にして

いた。昔し叔父の家で、これと同じ事をやらせられた時は、暇潰しの慰みとして、不愉快どころかかえって面白かった記憶さえあるのに、今じゃこのくらいな仕事よりほかにする能力のないものと、強いて周囲から諦めさせられたような気がして、縁側の寒いのがなおのこと癢に触った。

それで嫂には快よい返事さえ碌にしなかった。そうして頭の中で、自分の下宿にいた法科大学生が、ちよつと散歩に出るついでに、資生堂へ寄って、三つ入りの石鹸と齒磨を買うのにさえ、五円近くの金を払う華奢を思い浮べた。するとどうしても自分一人が、こんな窮境に陥るべき理由がないように感ぜられた。それから、こんな生活状態に甘んじて一生を送る兄夫婦がいかにも憫然に見えた。彼らは障子を張る美濃紙を買うのにさえ気兼ねをしまいかと思われるほど、小六から見ると、消極的な暮し方をしていた。

「こんな紙じゃ、またすぐ破けますね」と云いながら、小六は巻いた小口を一尺ほど日に透かして、二三度力任せに鳴らした。

「そう？ でも宅じゃ小供がないから、それほどでもなくつてよ」と答えた御米は糊を含ました刷毛を取ってとんとんとと棧の上を渡した。

二人は長く継いだ紙を双方から引き合つて、なるべく垂るみのできないように力めたが、小六が時々面倒臭そうな顔を見ると、御米はつい遠慮が出て、好加減に髪剃で小口を切り落してしまふ事もあった。したがってでき上つたものには、所々のぶくぶくがだいぶ目についた。御米は情なさそうに、戸袋に立て懸けた張り立ての障子を眺めた。そうして心の中

で、相手が小六でなくなつて、夫であつたならと思つた。

「皺が少しできたのね」

「どうせ僕の御手際じゃ旨く行かない」

「なに兄さんだつて、そう御上手じゃなくなつてよ。それに兄さんはあなたよりよっぽど無精ね」

小六は何にも答えなかった。台所から清が持つて来た含嗽茶碗を受け取つて、戸袋の前へ立つて、紙が一面に濡れるほど霧を吹いた。二枚目を張ったときは、先に霧を吹いた分がほぼ乾いて皺がおおかた平らになっていた。三枚目を張ったとき、小六は腰が痛くなつたと云い出した。実を云うと御米の方は今朝から頭が痛かつたのである。

「もう一枚張つて、茶の間だけ済ましてから休みましょう」と云つた。

茶の間を済ましているうちに午になつたので、二人は食事をはじめた。小六が引き移つてからこの四五日、御米は宗助のいない午飯を、いつも小六と差向で食べる事になった。宗助といつしよになつて以来、御米の毎日膳を共にしたものは、夫よりほかになかつた。夫の留守の時は、ただ独り箸を執るのが多年の習慣であつた。だから突然この小舅と自分の間に御櫃を置いて、互に顔を見合せながら、口を動かすが、御米に取つては一種異な経験であつた。それも下女が台所で働いているときは、まだしもだが、清の影も音もしないとなると、なおのこと変に窮屈な感じが起つた。無論小六よりも御米の方が年上であるし、また従来の関係から云つても、両性を絡みつける艶っぽい空気は、箱束的な初期においてすら、二人の間に起り得べきはずのものではなかつた。御米は小六

と差向に膳に着くときのこの氣ぶっせいな心持が、いつになつたら消えるだろうと、心の中で私に疑ぐつた。小六が引き移るまでは、こんな結果が出ようとは、まるで氣がつかなくなつたのだからなおさら当惑した。仕方がないからなるべく食事中に話をして、せめて手持無沙汰な隙間だけでも補おうと力めた。不幸にして今の小六は、この嫂の態度に対してほどの好い調子を出すだけの余裕と分別を頭の中に発見し得なかつたのである。

「小六さん、下宿は御馳走があつて」

こんな質問に逢うと、小六は下宿から遊びに來た時分のように、淡泊な遠慮のない答をする訳に行かなくなつた。やむを得ず、

「なにそうでもありません」ぐらいいしておく、その語氣がからりと澄んでいないので、御米の方では、自分の待遇が悪いせいかと解釈する事もあつた。それがまた無言の間に、小六の頭に映る事もあつた。

ことに今日は頭の具合が好くないので、膳に向つても、御米はいつものように力めるのが退儀であつた。力めて失敗するのはなお厭であつた。それで二人とも障子を張るときよりも言葉少なに食事を済ました。

午後は手が慣れたせい、朝に比べると仕事が少し果取つた。しかし二人の気分は飯前よりもかえつて縁遠くなつた。ことに寒い天氣が二人の頭に応えた。起きた時は、日載せた空がしだいに遠退いて行くかと思われるほどに、好く晴れていたが、それが真蒼に色づく頃から急に雲が出て、暗い中で粉雪でも醸しているように、日の目を密封した。二人は交

る交る火鉢に手を翳した。

「兄さんは來年になると月給が上がるんでしょう」

ふと小六がこんな問を御米にかけた。御米はその時疊の上の紙片を取つて、糊に汚れた手を拭いていたが、全く思も寄らないという顔をした。

「どうして」

「でも新聞で見ると、來年から一般に官吏の増俸があると云う話じゃありませんか」

御米はそんな消息を全く知らなかつた。小六から詳しい説明を聞いて、始めてなるほどと首肯した。

「全くね。これじゃ誰だって、やつて行けないわ。御着の切身なんか、私が東京へ來てからでも、もう倍になつてゐるんですもの」と云つた。着の切身の値段になると小六の方が全く無識であつた。御米に注意されて始めてそれほどむやみに高くなるものかと思つた。

小六にちよつとした好奇心の出たため、二人の會話は存外素直に流れて行つた。御米は裏の家主の十八九時代に物価の大変安かつた話を、この間宗助から聞いた通り繰り返した。その時分は蕎麦を食うにしても、盛かけが八厘、種ものが二錢五厘であつた。牛肉は普通が一人前四錢で、ロースは六錢であつた。寄席は三錢か四錢であつた。学生は月に七円ぐらい国から貰えば中の部であつた。十円も取るとすでに贅沢と思われた。

「小六さんも、その時分だと訳なく大学が卒業できたのにね」と御米が云つた。

「兄さんもその時分だと大変暮ししやすい訳ですな」と小六が

答えた。

座敷の張易が済んだときにはもう三時過になった。そうこ
うしているうちには、宗助も帰って来るし、晩の支度も始め
なくってはならないので、二人はこれを一段落として、糊や
髪剃を片づけた。小六は大きな伸を一つして、握り拳で自分
の頭をこんこんと叩いた。

「どうも御苦労さま。疲れたでしょう」と御米は小六を労わ
った。小六はそれよりも口淋しい思がした。この間文庫を届
けてやった礼に、坂井からくれたと云う菓子を、戸棚から出
して貰って食べた。御米は御茶を入れた。

「坂井と云う人は大学出なんですか」

「ええ、やっぱりそうなんですって」

小六は茶を飲んで煙草を吹いた。やがて、

「兄さんは増俸の事をまだあなたに話さないんですか」と聞
いた。

「いいえ、ちつとも」と御米が答えた。

「兄さんみたようになれたら好いだろな。不平も何もなく
って」

御米は特別の挨拶もしなかった。小六はそのまま起って六
畳へ這入ったが、やがて火が消えたと云って、火鉢を抱えて
また出て来た。彼は兄の家に厄介になりながら、もう少し立
てば都合がつくだらうと慰めた安之助の言葉を信じて、学校
は表向休学の体にして一時の始末をつけたのである。

九

裏の坂井と宗助とは文庫が縁になって思わぬ関係がついた。
それまでは月に一度こちらから清に家賃を持たしてやると、
向からその受取を寄こすだけの交渉に過ぎなかったのだか
ら、崖の上に西洋人が住んでいると同様で、隣人としての親
みは、まるで存在していなかったのである。

宗助が文庫を届けた日の午後に、坂井の云った通り、刑事
が宗助の家の裏手から崖下を検べに來たが、その時坂井もい
っしょだったので、御米は始めて噂に聞いた家主の顔を見た。
髭のないと思つたのに、髭を生やしているのと、自分なぞに
対しても、存外丁寧な言葉を使うのが、御米には少し案外で
あった。

「あなた、坂井さんはやっぱり髭を生やしていてよ」と宗助
が帰ったとき、御米はわざわざ注意した。

それから二日ばかりして、坂井の名刺を添えた立派な菓子
折を持って、下女が礼に來たが、せんだつてはいろいろ御世
話になりまして、ありがとう存じます、いずれ主人が自身に
伺うはずでございませうと云いおいて、帰って行つた。

その晩宗助は到來の菓子折の蓋を開けて、唐饅頭を頬張り
ながら、

「こんなものをくれるところをもつて見ると、それほど吝
もないようだね。他の家の子をブランコへ乗せてやらない
て云うのは嘘だらう」と云つた。御米も、
「きつと嘘よ」と坂井を弁護した。

夫婦と坂井とは泥棒の這入らない前より、これだけ親しみの度が増したようなものの、それ以上に接近しようと云う念は、宗助の頭にも、御米の胸にも宿らなかつた。利害の打算から云えば無論の事、単に隣人の交際とか情誼とか云う点から見ても、夫婦はこれよりも前進する勇氣を有たなかつたのである。もし自然がこのままに無為の月日を駆つたなら、久しからぬうちに、坂井は昔の坂井になり、宗助は元の宗助になつて、崖の上と崖の下に互の家が懸け隔るごとく、互の心も離れ離れになつたに違なかつた。

ところがそれからまた二日置いて、三日目の暮れ方に、獺の襟の着いた暖かそうな外套を着て、突然坂井が宗助の所へやつて来た。夜間客に襲われつけない夫婦は、軽微の狼狽を感じたくらい驚ろかされたが、座敷へ上げて話して見ると、坂井は丁寧に先日のお礼を述べた後、

「御蔭で取られた品物がまた戻りましたよ」と云いながら、白縮緬の兵児帯に巻き付けた金鎖を外して、両蓋の金時計を出して見せた。

規則だから警察へ届ける事は届けたが、実はだいぶ古い時計なので、取られてもそれほど惜しくもないぐらゐに諦らめていたら、昨日になつて、突然差出人の不明な小包が着いて、その中にちゃんと自分の失くしたのが包んであつたんだと云う。

「泥棒も持ち扱かつたんでしよう。それとも余り金にならないうで、やむを得ず返してくれる氣になつたんですかね。何しろ珍らしい事で」と坂井は笑つていた。それから、

「何私から云うと、実はあの文庫の方がむしろ大切な品でし

てね。祖母が昔し御殿へ勤めていた時分、戴いたんだと云つて、まあ記念のようなものですから」と云うような事も説明して聞かした。

その晩坂井はそんな話を約二時間もして歸つて行つたが、相手になつた宗助も、茶の間で聞いていた御米も、大變談話の材料に富んだ人だと思わぬ訳に行かなかつた。後で、

「世間の広い方ね」と御米が評した。

「閑だからさ」と宗助が解釈した。

次の日宗助が役所の歸りがけに、電車を降りて横町の道具屋の前まで来ると、例の獺の襟を着けた坂井の外套がちょっと眼に着いた。横顔を往來の方へ向けて、主人を相手に何か云っている。主人は大きな眼鏡を掛けたまま、下から坂井の顔を見上げている。宗助は挨拶をすべき折でもないと思つたから、そのまま行き過ぎようとして、店の正面まで来ると、坂井の眼が往來へ向いた。

「やあ昨夜は。今御歸りですか」と気軽に声をかけられたので、宗助も愛想なく通り過ぎる訳にも行かなくなつて、ちょっと歩調を緩めながら、帽子を取つた。すると坂井は、用はもう済んだと云う風をして、店から出て来た。

「何か御求めですか」と宗助が聞くと、

「いえ、何」と答えたまま、宗助と並んで家の方へ歩き出した。六七間来たとき、

「あの爺い、なかなか猾い奴ですよ。華山の偽物を持って来て押付ようとしやがるから、今叱りつけてやつたんです」と云い出した。宗助は始めて、この坂井も余裕ある人に共通な好事を道楽にしているのだと心づいた。そうしてこの間売り

払った抱一の屏風も、最初からこう云う人に見せたら、好かつたろうにと、腹の中で考えた。

「あれは書画には明るい男なんですか」

「なに書画どころか、まるで何も分らない奴です。あの店の様子を見ても分るじゃありませんか。骨董らしいものは一つも並んでいやしない。もとが紙屑屋から出世してあれだけになつたんですからね」

坂井は道具屋の素性をよく知っていた。出入の八百屋の阿爺の話によると、坂井の家は旧幕の頃何とかの守と名乗ったもので、この界限では一番古い門閥家なのだそうである。瓦解の際、駿府へ引き上げなかつたんだとか、あるいは引き上げてまた出て来たんだとか云う事も耳にしたようであるが、それは判然宗助の頭に残っていないかつた。

「小さい内から悪戯ものでね。あいつが餓鬼大将になつてよく喧嘩をしに行った事がありますよ」と坂井は御互の子供の時の事まで一口洩らした。それがまたどうして華山の贗物を売り込もうと巧んだのかと聞くと、坂井は笑つて、こう説明した。――

「なに親父の代から鼻屑にしてやつてるものですから、時々何だ蚊だつて持つて来るんです。ところが眼も利かない癖に、ただ慾ばりたがつてね、まことに取扱ひ悪い代物です。それについてこの間抱一の屏風を買つて貰つて、味を占めたんでね」

宗助は驚ろいた。けれども話の途中を遮ぎる訳に行かなかつたので、黙っていた。坂井は道具屋がそれ以来乗氣になつて、自身に分りもしない書画類をしきりに持ち込んで来る事やら、大坂出来の高麗焼を本物だと思つて、大事に飾つてお

いた事やら話した末、

「まあ台所で使う食卓か、たかだか新の鉄瓶ぐらいしか、あんな所じゃ買えたもんじゃありません」と云つた。

そのうち二人は坂の上へ出た。坂井はそこを右へ曲る、宗助はそこを下へ下りなければならなかつた。宗助はもう少ししよに歩いて、屏風の事を聞きたかつたが、わざわざ回り路をするのも変だと心づいて、それなり分れた。分れる時、「近い中御邪魔に出てみようございますか」と聞くと、坂井は、

「どうぞ」と快よく答えた。

その日は風もなくひとしきり日も照つたが、家にいると底冷のする寒さに襲われるとか云つて、御米はわざわざ置炬燵に宗助の着物を掛けて、それを座敷の真中に据えて、夫の帰りを待ち受けていた。

この冬になつて、昼のうち炬燵を拵らえたのは、その日が始めてであつた。夜は疾うから用いていたが、いつも六畳に置くだけであつた。

「座敷の真中にそんなものを据えて、今日はどうしたんだい」
「でも、御客も何も無いからいいでしょう。だつて六畳の方は小六さんがいて、塞がつてゐるんですもの」

宗助は始めて自分の家に小六のいる事に気がついた。襦衣の上から暖かい紡績織を掛けて貰つて、帯をぐるぐる巻きつけたが、

「ここは寒帯だから炬燵でも置かなくっちゃ凌げない」と云つた。小六の部屋になつた六畳は、畳こそ奇麗でないが、南と東が開いていて、家中で一番暖かい部屋なのである。

宗助は御米の汲んで来た熱い茶を湯呑から二口ほど飲んで、「小六はいるのかい」と聞いた。小六は固よりいたはずである。けれども六畳はひっそりして人のいるようにも思われなかった。御米が呼びに立とうとするのを、用はないからいいと留めたまま、宗助は炬燵蒲団の中へ潜り込んで、すぐ横になった。一方口に崖を控えている座敷には、もう暮方の色が萌していた。宗助は手枕をして、何を考えともなく、ただこの暗く狭い景色を眺めていた。すると御米と清が台所で働く音が、自分に関係のない隣の人の活動のごとくに聞えた。そのうち、障子だけがただ薄白く宗助の眼に映るように、部屋の中が暮れて来た。彼はそれでもじっとして動かずにいた。声を出して洋灯の催促もしなかった。

彼が暗い所から出て、晩食の膳に着いた時は、小六も六畳から出て来て、兄の向うに坐った。御米は忙しいので、つい忘れたと云って、座敷の戸を締めに立った。宗助は弟に夕方になったら、ちと洋灯を点けるとか、戸を閉てるとかして、忙しい姉の手伝でもしたら好かろうと注意したかったが、昨今引き移ったばかりのものに、気まずい事を云うのも悪かろうと思つてやめた。

御米が座敷から帰つて来るのを待つて、兄弟は始めて茶碗に手を着けた。その時宗助はようやく今日役所の帰りがけに、道具屋の前で坂井に逢った事と、坂井があの大きな眼鏡を掛けている道具屋から、抱一の屏風を買ったと云う話をした。

御米は、

「まあ」と云つたなり、しばらく宗助の顔を見ていた。

「じゃきつとあれよ。きつとあれに違ないわね」

小六は始めのうち何にも口を出さなかったが、だんだん兄弟夫婦の話を聞いているうちに、ほぼ関係が明瞭になったので、「全体いくらで売ったのです」と聞いた。御米は返事をする前にちよつと夫の顔を見た。

食事が終ると、小六はじきに六畳へ這入った。宗助はまた炬燵へ帰った。しばらくして御米も足を温めに来た。そうして次の土曜か日曜には坂井へ行つて、一つ屏風を見て来たらいいだろうと云うような事を話し合つた。

次の日曜になると、宗助は例の通り一週に一返の楽寝を貪ぼつたため、午前半日をとうとう空に潰してしまった。御米はまた頭が重いか云つて、火鉢の縁に倚りかかつて、何をするのも懶そうに見えた。こんな時に六畳が空いていれば、朝からでも引込む場所があるのにとすると、宗助は小六に六畳をあてがつた事が、間接に御米の避難場を取り上げたと同じ結果に陥るので、ことに済まないような気がした。

心持が悪ければ、座敷へ床を敷いて寝たら好かろうと注意しても、御米は遠慮して容易に応じなかった。それではまた炬燵でも拵えたらどうだ、自分も当るからと云つて、とうとう櫓と掛蒲団を清に云いつけて、座敷へ運ばした。

小六は宗助が起きる少し前に、どこかへ出て行つて、今朝は顔さえ見せなかった。宗助は御米に向つて別段その行先を聞き糺しもしなかった。この頃では小六に関係した事を云い出して、御米にその返事をさせるのが、気の毒になつて来た。御米の方から、進んで弟の讒訴でもするようだと、叱るにしろ、慰さめるにしろ、かえつて始末が好いと考える時もあった。

午になっても御米は炬燵から出なかった。宗助はいつそ静かに寝かしておく方が身体のためによからうと思ったので、そっと台所へ出て、清にちよつと上の坂井まで行つてくるからと告げて、不斷着の上へ、袂の出る短いインヴァネスを纏つて表へ出た。

今まで陰気な室にいた所為か、通へ来ると急にからりと気が晴れた。肌の筋肉が寒い風に抵抗して、一時に緊縮するよな冬の心持の鋭どく出るうちに、ある快感を覚えたので、宗助は御米もあ家にばかり置いては善くない、氣候が好くなったら、ちと戸外の空氣を呼吸させるようにしてやらなくては毒だと思いながら歩いた。

坂井の家の門を入ったら、玄関と勝手口の仕切になつていゝ生垣の目に、冬に似合わないぱつとした赤いものが見えた。傍へ寄つてわざわざ検べると、それは人形に掛ける小さい夜具であつた。細い竹を袖に通して、落ちないように、扇骨木の枝に寄せ掛けた手際が、いかにも女の子の所作らしく殊勝に思われた。こう云う悪戯をする年頃の娘は固よりの事、子供と云う子供を育て上げた経験のない宗助は、この小さい赤い夜具の尋常に日に干してある有様をしばらく立つて眺めていた。そうして二十年も昔に父母が、死んだ妹のために飾つた、赤い雛段と五人囃と、模様の美しい干菓子と、それから甘いように辛い白酒を思い出した。

坂井の主人は在宅ではあつたけれども、食事中だと云うので、しばらく待たせられた。宗助は座に着くや否や、隣の室で小さい夜具を干した人達の騒ぐ声を耳にした。下女が茶を運ぶために襖を開けると、襖の影から大きな眼が四つほどす

でに宗助を覗いていた。火鉢を持つて出ると、その後からまた違った顔が見えた。始めてのせいか、襖の開閉のたびに出る顔がごとく違つていて、子供の数が何人あるか分らないように思われた。ようやく下女が退がりきりに退がると、今度は誰だか唐紙を一寸ほど細目に開けて、黒い光る眼だけをその間から出した。宗助も面白くなって、黙つて手招ぎをして見た。すると唐紙をぴたりと閉て、向う側で三四人が声を合して笑い出した。

やがて一人の女の子が、「よう、御姉様またいつものように叔母さんごっこしましうよ」と云い出した。すると姉らしいのが、

「ええ、今日は西洋の叔母さんごっこよ。東作さんは御父さまだからパパで、雪子さんは御母さまだからママつて云うのよ。よくつて」と説明した。その時また別の声で、

「おかしいわね。ママだつて」と云つて嬉しそうに笑つたものがあつた。

「私それでもいつも御祖母さまなのよ。御祖母さまの西洋の名がなくっちゃいけないわねえ。御祖母さまは何て云うのと聞いたものもあつた。

「御祖母さまはやっぱりババでいいでしょう」と姉がまた説明した。

それから当分の間は、御免下さいましたの、どちらからいらつしやいましたのと盛に挨拶の言葉が交換されていた。その間にはちりんちりと云う電話の仮色も交つた。すべてが宗助には陽気で珍らしく聞えた。

そこへ奥の方から足音がして、主人がこつちへ出て来たら

しかつたが、次の間へ入るや否や、

「さあ、御前達はここで騒ぐんじゃない。あっちへ行っておいで。御客さまだから」と制した。その時、誰だかすぐに、「厭だよ。御父ちゃんべい。大きい御馬買ってくれなくっちゃ、あっちへ行かないよ」と答えた。声は小さい男の子の声であつた。年が行かないためか、舌がよく回らないので、抗弁のしようがいかにも億劫で手間がかかつた。宗助はそこを特に面白く思つた。

主人が席に着いて、長い間待たした失礼を詫びている間に、子供は遠くへ行つてしまつた。

「大變御賑やかで結構です」と宗助が今自分の感じた通を述べる、主人はそれを愛嬌と受取つたものと見えて、

「いや御覧のごとく乱雑な有様で」と言訳らしい返事をしたが、それを緒に、子供の世話の焼けて、夥だしく手のかかる事などをいろいろ宗助に話して聞かした。その中で綺麗な

支那製の花籃のなかへ炭団を一杯盛つて床の間に飾つたと云う滑稽と、主人の編上の靴のなかへ水を汲み込んで、金魚を

放したと云う悪戯が、宗助には大變耳新しかつた。しかし、女の子が多いので服装に物が要るとか、二週間も旅行して帰

つてくると、急にみんなの背が一寸ずつも伸びているので、何だか後から追いつかれるような心持がするとか、もう少し

すると、嫁入の支度で忙殺されるのみならず、きつと貧殺されるだろうとか云う話になると、子供のない宗助の耳にはそ

れほどの同情も起し得なかつた。かえつて主人が口で子供を煩冗がる割に、少しもそれを苦にする様子の、顔にも態度に

も見えないのを羨ましく思つた。

好い加減な頃を見計つて宗助は、せんだつて話のあつた屏風をちよつと見せて貰えまいかと、主人に申し出た。主人はさつそく引き受けて、ぱちぱちと手を鳴らして、召使を呼んだが、蔵の中にしまつてあるのを取り出して来るように命じた。そうして宗助の方を向いて、

「つい二三日前までそこへ立てておいたのですが、例の子供が面白半分になつたと屏風の影へ集まつて、いろいろな悪戯をするものですから、傷でもつけられちゃ大變だと思つてしまひ込んでしまいました」と云つた。

宗助は主人のこの言葉を聞いた時、今更手数をかけて、屏風を見せて貰うのが、氣の毒にもなり、また面倒にもなつた。実を云うと彼の好奇心は、それほど強くなかつたのである。なるほどいったん他の所有に歸したものは、たとい元が自分のであつたにしろ、無かつたにしろ、そこを突き留めたところで、實際上には何の効果もない話に違なかつた。

けれども、屏風は宗助の申し出た通り、間もなく奥から縁伝いに運び出されて、彼の眼の前に現れた。そうしてそれが予想通りついでの間まで自分の座敷に立ててあつた物であつた。この事実を発見した時、宗助の頭には、これと云つて大した感動も起らなかつた。ただ自分が今坐っている畳の色や、天井の柱目や、床の置物や、襖の模様などの中に、この屏風を立てて見て、それに、召使が二人がかりで、蔵の中から大事そうに取り出して来たと云う所作を付け加えて考えると、自分が持っていた時よりは、たしかに十倍以上貴い品のよきに眺められただけであつた。彼は即座に云うべき言葉を見出し得なかつたので、いたずらに、見慣れたものの上に、さ

らに新らしくもない眼を据えていた。

主人は宗助をもってある程度の鑑賞家と誤解した。立ちながら屏風の縁へ手を掛けて、宗助の面と屏風の面とを比較していたが、宗助が容易に批評を下さないのです。

「これは素性のたしかなものです。出が出ですからね」と云った。宗助は、ただ

「なるほど」と云った。

主人はやがて宗助の後へ回って来て、指でそこを指しながら、品評やら説明やらした。その中には、さすが御大名だけあって、好い絵の具を惜気もなく使うのがこの画家の特色だから、色がいかにもみごとであると云うような、宗助には耳新らしいけれども、普通一般に知れ渡った事もだいぶ交っていた。

宗助は好い加減な頃を見計らって、丁寧^{ていねい}に礼を述べて元の席に復した。主人も蒲団の上に直った。そうして、今度は野路や空云々という題句やら書体やらについて語り出した。宗助から見ると、主人は書にも俳句にも多くの興味を有っていた。いつの間にこれほどの知識を頭の中へ貯え得らるかと思うくらい、すべてに心得のある男らしく思われた。宗助は己れを恥じて、なるべく物数を云わないようにして、ただ向うの話だけに耳を借す事を力めた。

主人は客がこの方面の興味に乏しい様子を見て、再び話を画の方へ戻した。碌なものはないけれども、望ならば所蔵の画帖や幅物を見せてもいいと親切に申し出した。宗助はせっかくの好意を辞退しない訳に行かなかった。その代りに、失礼ですがと前置をして、主人がこの屏風を手に入れるについて、

どれほどの金額を払ったかを尋ねた。

「まあ掘出し物ですね。八十円で買いました」と主人はすぐ答えた。

宗助は主人の前に坐って、この屏風に関するいっさいの事を自白しようか、しまいかと思案したが、ふと打ち明けるのも一興だろうと心づいて、とうとう実はこれこれだと、今までの顛末を詳しく話し出した。主人は時々へえ、へえと驚ろいたような言葉を挟んで聞いていたが、しまいに、

「じゃあなたは別に書画が好きで、見にいらした訳でもないんですね」と自分の誤解を、さも面白い経験でもしたように笑い出した。同時に、そう云う訳なら、自分が直に宗助から相当の値で譲って貰えばよかったに、惜しい事をしたと云った。最後に横町の道具屋をひどく罵って、怪しからん奴だと云った。

宗助と坂井とはこれからだいぶ親しくなった。

十

佐伯の叔母も安之助もその後とんと宗助の宅へは見えなかった。宗助は固より麴町へ行く余暇を有たなかった。またそれだけの興味もなかった。親類とは云いながら、別々の日が二人の家を照らしていた。

ただ小六だけが時々話しに出かける様子であったが、これとても、そう繁々足を運ぶ訳でもないらしかった。それに彼は帰って来て、叔母の家の消息をほとんど御米に語らないのを常としておった。御米はこれを故意から出る小六の仕打か

とも疑^{うたぐ}った。しかし自分が佐伯に対して特別の利害を感じない以上、御米は叔母の動静を耳にしない方を、かえって喜んだ。

それでも時々、先方^{さき}の様子を、小六と兄の對話から聞き込む事もあった。一週間ほど前に、小六は兄に、安之助がまた新發明の応用に苦心している話をした。それは印氣^{インキ}の助けを借らないで、鮮明な印刷物を拵^{こしら}えるとか云う、ちょっと聞くとすこぶる重宝な器械についてであった。話題の性質から云っても、自分とは全く利害の交渉のないむずかしい事なので、御米は例の通り黙って口を出さずにいたが、宗助は男だけに幾分か好奇心が動いたと見えて、どうして印氣を使わずに印刷ができるかなどと問い糺^{ただ}していた。

専門上の知識のない小六が、精密な返答をし得るはずは無論なかった。彼はただ安之助から聞いたままを、覚えている限り念を入れて説明した。この印刷術は近來英國で發明になったもので、根本的にいうとやはり電氣の利用に過ぎなかった。電氣の一極を活字と結びつけておいて、他の一極を紙に通じて、その紙を活字の上へ圧^おしつけさえすれば、すぐできるのだと小六が云った。色は普通黒であるが、手加減したいで赤にも青にもなるから色刷などの場合には、絵の具を乾かす時間が省^{はぶ}けるだけでも大変重宝で、これを新聞に応用すれば、印氣^{インキ}や印氣ロールの費^{ついで}を節約する上に、全体から云って、少くとも従来の四分の一の手数がなくなる点から見ても、前途は非常に有望な事業であると、小六はまた安之助の話した通りを繰り返した。そうしてその有望な前途を、安之助がすでに手の中に握^うったかのごとき口氣^{こうき}であった。かつその多望

な安之助の未来のなかには、同じく多望な自分の影が、含まれているように、眼を輝やかした。その時宗助はいつもの調子で、むしろ穏やかに、弟の云う事を聞いていたが、聞いてしまった後^{あと}でも、別にこれという眼立った批評は加えなかった。實際こんな發明は、宗助から見ると、本当のようでもあり、また嘘のようでもあり、いよいよそれが世間に行われるまでは、賛成も反対もできかねたのである。

「じゃ鯉^{かつお}船^{ふね}の方はもう止したの」と、今まで黙っていた御米が、この時始めて口を出した。

「止したんじゃないんですが、あの方は費用が随分かかるので、いくら便利でも、そう誰も彼も拵^{こしら}える訳に行かないんだそうです」と小六が答えた。小六は幾分か安之助の利害を代表しているような口振であった。それから三人の間に、しばらく談話が交換されたが、しまいに、

「やつぱり何をしたって、そう旨^{うま}く行くもんじゃあるまいよ」と云った宗助の言葉と、

「坂井さんみたように、御金があつて遊んでいるのが一番いいわね」と云った御米の言葉を聞いて、小六はまた自分の部屋へ帰って行った。

こう云う機会に、佐伯の消息は折々夫婦の耳へ洩^もれる事はあるが、そのほかには、全く何をして暮らしているか、互に知らないで過す月日が多かった。

ある時御米は宗助にこんな問を掛けた。

「小六さんは、安さんの所へ行きたんびに、小遣^{こづかい}でも貰^{もら}って来るんでしょうか」

今まで小六について、それほどの注意を払っていないかった

宗助は、突然この間に逢って、すぐ、「なぜ」と聞き返した。御米はしばらく逡巡^{ためら}った末、

「だって、この頃よく御酒を呑^のんで帰って来る事があるのよ」と注意した。

「安さんが例の発明や、金儲^{かねもち}けの話をするとき、その聞き賃^{おし}に奢^{おご}るのかも知れない」と云って宗助は笑っていた。会話はそれなりでつい発展せずにしまった。

越えて三日目の夕方に、小六はまた飯時^{めしどき}を外^{はず}して帰って来なかった。しばらく待ち合せていたが、宗助はついに空腹だとか云い出して、ちよつと湯にでも行つて時間を延ばしたらという御米の小六に対する気兼^{きかね}に頓着^{とんじやく}なく、食事を始めた。

その時御米は夫に、

「小六さんに御酒を止^やめるように、あなたから云つちやいけなくって」と切り出した。

「そんなに意見しなければならぬほど飲むのか」と宗助は少し案外な顔をした。

御米はそれほどでもない、弁護しなければならなかった。けれども実際は誰もいない昼間のうちなどに、あまり顔を赤くして帰って来られるのが、不安だったのである。宗助はそれなり放っておいた。しかし腹の中では、はたして御米の云うごとく、どこかで金を借りるか、貰うかして、それほど好きもしないものを、わざと飲むのではなからうかと疑^うった。

そのうち年がだんだん片寄って、夜が世界の三分の二を領^{りよう}するよう^うに押しつま^ラって来た。風が毎日吹いた。その音を聞いているだけでも生活^{ライフ}に陰気な響^{こも}を与えた。小六はどうしても、六畳に籠^{こも}って、一日を送るに堪^たえなかった。落ちついて

考えれば考えるほど、頭が淋^{さみ}しくって、いたたまれなくなるばかりであった。茶の間へ出て、嫂^{あによめ}と話すのはなお厭^{いや}であった。やむを得ず外へ出た。そうして友達の宅^{うち}をぐるぐる回って歩いた。友達も始のうちは、平生^{いっしょ}の小六に対するように、若い学生のしたがる面白い話をいくらでもした。けれども小六はそう云う話が尽きても、まだやって来た。それでしまいは、友達が、小六は、退屈の余りに訪問をして、談話の復習^{ふけ}に耽^{ふけ}るものと評した。たまには学校の下読^{したよみ}やら研究やらに追われている多忙の身だと云う風もして見せた。小六は友達からそう呑気^{のんき}な怠けもののように取り扱われるのを、大変不愉快に感じた。けれども宅に落ちついては、読書も思索も、まるでできなかった。要するに彼^{かれ}ぐらいの年輩の青年が、一人前の人間になる階梯^{かいてい}として、修^{おそ}むべき事、力^{つと}むべき事には、内部の動揺やら、外部の束縛やらで、いっさい手が着かなかったのである。

それでも冷たい雨が横に降ったり、雪融^{ゆきとけ}の道がはげしく泥^{ぬか}ったりする時は、着物を濡^ぬらさなければならず、足袋^{たび}の泥を乾かさなければならぬ面倒があるので、いかな小六も時によると、外出を見合せる事があった。そう云う日には、実際困却すると見えて、時々六畳から出て来て、のそりと火鉢の傍^{そば}へ坐って、茶などを注^ついで飲んだ。そうしてそこに御米でもいると、世間話の一つや二つはしな^しないとも限^{かぎ}らなかった。

「小六さん御酒好き」と御米が聞いた事があった。

「もう直御正月ね。あなた御雑煮^{おぞうに}いくつ上がった」と聞いた事もあった。

そう云う場合が度重^{たびかさ}なるに連れて、二人の間は少しずつ近

寄る事ができた。しまいには、姉さんちよつとここを縫って下さいと、小六の方から進んで、御米に物を頼むようになって。そうして御米が緋の羽織を受取って、袖口の綻を繕っている間、小六は何にもせずそこに坐つて、御米の手先を見つめていた。これが夫だと、いつまでも黙って針を動かすのが、御米の例であつたが、相手が小六の時には、そう投遣にできないのが、また御米の性質であつた。だからそんな時には力めても話をした。話の題目で、ややともすると小六の口に宿りたがるものは、彼の未来をどうしたら好かろうと云う心配であつた。

「だって小六さんなんか、まだ若いじゃありませんか。何をしたってこれからだわ。そりや兄さんの事よ。そう悲観してもいいのは」

御米は二度ばかりこういう慰め方をした。三度目には、

「来年になれば、安さんの方でどうか都合して上げるって受合つて下すつたんじゃなくつて」と聞いた。小六はその時不愜な表情をして、

「そりや安さんの計画が、口でいう通り行く行けば訳はないんでしようが、だんだん考えると、何だか少し当にならないような気がし出してね。鯉船もあんまり儲からないようだから」と云つた。御米は小六の憮然としている姿を見て、それを時々酒気を帯びて帰つて来る、どこかに殺気を含んだ、しかも何が癢に障るんだか訳が分らないではなはだ不平らしい小六と比較すると、心の中で気の毒にもあり、またおかしくもあつた。その時は、

「本当にね。兄さんにさえ御金があると、どうでもして上げ

る事ができるんだけれども」と、御世辞でも何でも無い、同情的意を表した。

その夕暮であつたか、小六はまた寒い身体を外套に包んで出て行つたが、八時過に帰つて来て、兄夫婦の前で、袂から白い細長い袋を出して、寒いから蕎麦搔を拵らえて食おうと思つて、佐伯へ行つた帰りに買つて来たと云つた。そうして御米が湯を沸かしているうちに、煮出しを拵えるとか云つて、しきりに鯉節を搔いた。

その時宗助夫婦は、最近の消息として、安之助の結婚がとうとう春まで延びた事を聞いた。この縁談は安之助が学校を卒業すると間もなく起つたもので、小六が房州から帰つて、叔母に学資の供給を断られる時分には、もうだいたい話が進んでいたのである。正式の通知が来ないので、いつ纏つたか、宗助はまるで知らなかったが、ただ折々佐伯へ行つては、何か聞いて来る小六を通じてのみ、彼は年内に式を挙げるはずの新夫婦を予想した。その他には、嫁の里がある会社員で、有福な生計をしている事と、その学校が女学館であるという事と、兄弟がたくさんあると云う事だけを、同じく小六を通じて耳にした。写真にせよ顔を知つてるのは小六ばかりであつた。

「好い器量？」と御米が聞いた事がある。

「まあ好い方でしょう」と小六が答えた事がある。

その晩はなぜ暮のうちに式を済まさないかと云うのが、蕎麦搔のでき上る間、三人の話題になった。御米は方位でも悪いのだろうと臆測した。宗助は押しつまって日がないからだろうと考えた。独り小六だけが、

「やっぱり物質的の必要かららしいです。先が何でもよほど派出な家なんで、叔母さんの方でもそう単簡に済まされないんでしょ」といつにない世帯染みた事を云った。

十一

御米のぶらぶらし出したのは、秋も半ば過ぎて、紅葉の赤黒く縮れる頃であった。京都にいた時分は別として、広島でも福岡でも、あまり健康な月日を送った経験のない御米は、この点に掛けると、東京へ帰ってから、やはり仕合せとは云えなかった。この女には生れ故郷の水が、性に合わないのだろうと、疑ぐれば疑ぐられるくらい、御米は一時悩んだ事もあった。

近頃はそれがだんだん落ちついて来て、宗助の気を揉む機会も、年に幾度と勘定ができるくらい少なくなつたから、宗助は役所の出入に、御米はまた夫の留守の立居に、等しく安心して時間を過す事ができたのである。だからことしの秋が暮れて、薄い霜を渡る風が、つらく肌を吹く時分になって、また少し心持が悪くなり出しても、御米はそれほど苦にもならなかった。始のうちは宗助にさえ知らせなかった。宗助が見つけて、医者に掛かれと勧めても、容易に掛からなかった。そこへ小六が引越して来た。宗助はその頃の御米を観察して、体質の状態やら、精神の模様やら、夫だけによく知っていたから、なるべくは、人数を殖やして宅の中を混雑かせたくないとは思つたが、事情やむを得ないので、成るがままにしておくよりほかに、手段の講じようもなかった。ただ口の

先で、なるべく安静にしていなくてはいけないと云う矛盾した助言は与えた。御米は微笑して、

「大丈夫よ」と云った。この答を得た時、宗助はなおの事安心ができなくなった。ところが不思議にも、御米の気分は、小六が引越して来てから、ずっと引立った。自分に責任の少しでも加わつたため、心が緊張したものと見えて、かえって平生よりは、かいがいしく夫や小六の世話をした。小六にはそれがまるで通じなかったが、宗助から見ると、御米が在来よりどれほど力めているかがよく解つた。宗助は心のうちで、このまめやかな細君に新らしい感謝の念を抱くと同時に、この氣を張り過ぎる結果が、一度に身体に障るような騒ぎでも引き起してくれなければいいがと心配した。

不幸にも、この心配が暮の二十日過になつて、突然事実になりかけたので、宗助は予期の恐怖に火が点いたように、いたく狼狽した。その日は判然土に映らない空が、朝から重なり合つて、重い寒さが終日人の頭を抑えつけていた。御米は前の晩にまた寝られないで、休ませ損なつた頭を抱えながら、辛抱して働らき出したが、起つたり動いたりするたびに、多少脳に應える苦痛はあつても、比較的明るい外界の刺激に紛れたためか、じつと寝ていながら、頭だけが冴えて痛むよりは、かえつて凌ぎやすかつた。とかくして夫を送り出すまでは、しばらくしたらまたいつものように折り合つて来る事と思つて我慢していた。ところが宗助がいなくなつて、自分の義務に一段落が着いたという氣の弛みが出ると等しく、濁つた天氣がそろそろ御米の頭を攻め始めた。空を見ると凍っているようであるし、家の中にいると、陰気な障子の紙を透し

て、寒さが浸み込んで来るかと思われるくらいなのに、御米の頭はしきりに熱^{ほて}つて来た。仕方がないから、今朝あげた蒲団^{ふとん}をまた出して来て、座敷へ延べたまま横になった。それでも堪えられないので、清に濡^ぬ手拭^{てぬぐい}を絞^{しぼ}らして頭へ乗せた。それが直生^{じきなまぬる}温^{ぬる}くなるので、枕元に金^{かな}盥^うを取り寄せて時々絞^{しぼ}り易^かえた。午^{ひる}までこんな姑息^{こそくしゅだん}手段で断えず額を冷やして見たが、いっこうはかばかしい験^{げん}もないので、御米は小六のために、わざわざ起きて、いっしょに食事をする根気もなかった。清にいつけて膳立^{ぜんだて}をさせて、それを小六に薦^{すす}めさしたまま、自分^{自分}はやはり床を離れずにいた。そうして、平生夫のする柔^{やわら}かい括^{くくりまぐら}枕^{まくら}を持って来て貰^{もら}って、堅いのと取り替えた。御米は髪^{こわ}の損^{こわ}れるのを、女らしく苦にする勇氣にさえ乏しかったのである。

小六は六畳から出て来て、ちよつと襖^{ふすま}を開けて、御米の姿^{その}を覗^{のぞ}き込んだが、御米が半ば床の間の方を向いて、眼を塞^{ふさい}いでいたので、寝ついたとも思つたものか、一言^{ひとこと}の口も利^きかずに、またそつと襖を閉めた。そうして、たった一人大きな食卓を専^{せん}領して、始めからさらさらと茶漬を掻^かき込む音をさせた。

二時頃になつて、御米はやつとの事、とろとろと眠^ねつたが、眼が覺^さめたら額を捲^まいた濡れ手拭がほとんど乾くくらい暖かになつていた。その代り頭の方は少し楽になつた。ただ肩^{せすじ}から背筋^{せすじ}へ掛けて、全体に重苦しいような感じが新らしく加わつた。御米は何でも精をつけなくては毒だという考から、一人^{一人}で起きて遅い午飯^{ひるはん}を軽く食べた。

「御気分はいかがでございます」と清が御給仕をしながら、

しきりに聞いた。御米はだいたいぶいいようだったので、床を上げて貰^{もら}って、火鉢に倚^よつたなり、宗助の歸りを待ち受けた。宗助は例刻に歸つて来た。神田の通りで、門並旗^{かどなみ}を立てて、もう暮の売出しを始めた事だの、勸工場^{かんこうば}で紅白の幕を張^はつて楽隊に景氣をつけさしている事だのを話した末、

「賑^{にぎ}やかだよ。ちよつと行つて御覽。なに電車に乗^のつて行けば訳はない」と勧めた。そうして自分は寒さに腐蝕^{ふじよく}されたように赤い顔をしていた。

御米はこう宗助から勞^{いた}わられた時、何だか自分の身体の悪い事を訴^うたえるに忍びない心持がした。實際またそれほど苦しくもなかった。それでいつもの通り何気^{なにげ}ない顔をして、夫に着物を着換えさしたり、洋服を畳^{たた}んだりして夜^よに入った。

ところが九時近くになつて、突然宗助に向つて、少し加減が悪いから先へ寝たいと云い出した。今まで平生の通り機嫌よく話していただけに、宗助はこの言葉を聞いてちよつと驚ろいたが、大した事でもないと云う御米の保証に、ようやく安心してすぐ休む支度をさせた。

御米が床^{とこ}へ這^{はい}入^いつてから、約二十分ばかりの間、宗助は耳の傍^{はた}に鉄瓶^{てつびん}の音を聞きながら、静な夜を丸^{まる}心の洋灯^{ランンプ}に照らしていた。彼は来年度に一般官吏に増俸の沙汰^{さた}があるという評判を思い浮べた。またその前に改革か淘汰^{たうた}が行われるに違ないという噂に思い及んだ。そうして自分はどうちの方へ編入されるのだろうか疑つた。彼は自分を東京へ呼んでくれた杉原が、今もなお課長として本省にいないのを遺憾^{いかにん}とした。彼は東京へ移^{うつ}つてから不思議とまだ病氣をした事がなかった。したがってまだ欠勤届を出した事がなかった。学校を中途で

やめたなり、本はほとんど読まないのだから、学問は人並にできないが、役所でやる仕事に差支えるほどの頭脳ではなかった。

彼はいろいろな事情を綜合して考えた上、まあ大丈夫だろうと腹の中できめた。そうして爪の先で軽く鉄瓶の縁を敲いた。その時座敷で、

「あなたちよつと」と云う御米の苦しそうな声が聞えたので、我知らず立ち上がった。

座敷へ来て見ると、御米は眉を寄せて、右の手で自分の肩を抑えながら、胸まで蒲団の外へ乗り出してゐた。宗助はほとんど器械的に、同じ所へ手を出した。そうして御米の抑えている上から、固く骨の角を攫んだ。

「もう少し後の方」と御米が訴えるように云った。宗助の手が御米の思う所へ落ちつくまでには、二度も三度もそこここと位置を易えなければならなかった。指で圧してみると、頸と肩の継目の少し背中へ寄った局部が、石のように凝っていた。御米は男の力いっぱいそれを抑えてくれと頼んだ。宗助の額からは汗が煮染み出した。それでも御米の満足するほどは力が出なかった。

宗助は昔の言葉で早打肩というのを覚えていた。小さい時祖父から聞いた話に、ある侍が馬に乗ってどこかへ行く途中で、急にこの早打肩に冒されたので、すぐ馬から飛んで下りて、たちまち小柄を抜くや否や、肩先を切つて血を出したため、危うい命を取り留めたというのがあったが、その話が今明らかに記憶の焼点に浮んで出た。その時宗助はこれはならんとした。けれどもはたして刃物を用いて、肩の肉を突

いていいものやら、悪いものやら、決しかねた。

御米はいつになく逆上せて、耳まで赤くしていた。頭が熱いかと聞くと苦しうに熱いと答えた。宗助は大きな声を出して清に氷嚢へ冷たい水を入れて来いと命じた。氷嚢があとにく無かつたので、清は朝の通り金盥に手拭を浸けて持ってきた。清が頭を冷やしているうち、宗助はやはり精いっぱい肩を抑えていた。時々少しはいいかと聞いても、御米は微かに苦しいと答えるだけであつた。宗助は全く心細くなった。思い切つて、自分で馳け出して医者を迎に行こうとしたが、後が心配で一足も表へ出る気にはなれなかつた。

「清、御前急いで通りへ行つて、氷嚢を買つて医者と呼んで来い。まだ早いから起きてるだろう」

清はすぐ立つて茶の間の時計を見て、「九時十五分でございます」と云いながら、それなり勝手口へ回つて、ごそごそ下駄を探しているところへ、旨い具合に外から小六が歸つて来た。例の通り兄には挨拶もしないで、自分の部屋へ這入ろうとするのを、宗助はおい小六と烈しく呼び止めた。小六は茶の間で少し躊躇していたが、兄からまた二声ほど続けざまに大きな声を掛けられたので、やむを得ず低い返事をして、襖から顔を出した。その顔は酒気のまだ醒めない赤い色を眼の縁に帯びていた。部屋の中を覗き込んで、始めて吃驚した様子で、

「どうかなすつたんですか」と酔が一時に去つたような表情をした。

宗助は清に命じた通りを、小六に繰り返して、早くしてくれと急ぎ立てた。小六は外套も脱がずに、すぐ玄関へ取つて

返した。

「兄さん、医者まで行くのは急いでも時間が掛かりますから、坂井さんの電話を借りて、すぐ来るように頼みましょう」

「ああ。そうしてくれ」と宗助は答えた。そうして小六の帰る間、清に何返となく金盥の水を易えさしては、一生懸命に御米の肩を圧しつけたり、揉んだりしてみた。御米の苦しむのを、何もせずにただ見ているに堪えなかったから、こうして自分の気を紛らしていたのである。

この時の宗助に取って、医者の方の来るのを今か今かと待ち受ける心ほど苛いものはなかった。彼は御米の肩を揉みながらも、絶えず表の物音に気を配った。

ようやく医者が来たときは、始めて夜が明けたような心持がした。医者は商売柄だけあって、少しも狼狽えた様子を見せなかった。小さい折靱を脇に引き付けて、落ちつき払った態度で、慢性病の患者でも取り扱うように緩くりした診察をした。その逼らない顔色を傍で見ていたせい、わくわくした宗助の胸もようやく治まった。

医者は芥子を局部へ貼る事と、足を湿布で温める事と、それから頭を氷で冷す事とを、応急手段として宗助に注意した。そうして自分で芥子を掻いて、御米の肩から頸の根へ貼りつけてくれた。湿布は清と小六とで受持った。宗助は手拭の上から氷嚢を額の上に当てがった。

とかくするうち約一時間も経った。医者はしばらく経過を見て行こうと云って、それまで御米の枕元に坐っていた。世間話も折々は交えたが、おおかたは無言のまま二人共に御米の容体を見守る事が多かった。夜は例のごとく静に更けた。

「だいぶ冷えますな」と医者が云った。宗助は気の毒になったので、あとの注意をよく聞いた上、遠慮なく引き取ってくれるようにと頼んだ。その時御米は先刻よりはだいぶ軽快になっていたのである。

「もう大丈夫でしょう。頓服を一回上げますから今夜飲んで御覧なさい。多分寝られるだろうと思います」と云って医者は帰った。小六はすぐその後を追って出て行った。

小六が薬取に行った間に、御米は

「もう何時」と云いながら、枕元の宗助を見上げた。宵とは違って頬から血が退いて、洋灯に照らされた所が、ことに蒼白く映った。宗助は黒い毛の乱れたせいだろうと思って、わざわざ鬢の毛を掻き上げてやった。そうして、

「少しはいいだろう」と聞いた。

「ええよつぽど楽になったわ」と御米はいつもの通り微笑を洩らした。御米は大抵苦しい場合でも、宗助に微笑を見せる事を忘れなかった。茶の間では、清が突伏したまま軀をかいていた。

「清を寝かしてやって下さい」と御米が宗助に頼んだ。

小六が薬取りから帰って来て、医者の云いつけ通り服薬を済ましたのは、もうかれこれ十二時近くであった。それから二十分と経たないうちに、病人はすやすや寝入った。

「好い塩梅だ」と宗助が御米の顔を見ながら云った。小六もしばらく嫂の様子を見守っていたが、

「もう大丈夫でしょう」と答えた。二人は氷嚢を額からおろした。

やがて小六は自分の部屋へ這入る。宗助は御米の傍へ床を

延べていつものごとく寝た。五六時間の後冬の夜は錐のよう
な霜を挟さんで、からりと明け渡った。それから一時間する
と、大地を染める太陽が、遮るもののない蒼空に憚りなく上
った。御米はまだすやすや寝ていた。

そのうち朝餉も済んで、出勤の時刻がようやく近づいた。
けれども御米は眠りから覚める気色もなかった。宗助は枕辺
に曲んで、深い寢息を聞きながら、役所へ行くどうか休もうか
と考えた。

十二

朝の内は役所で常のごとく事務を執っていたが、折々昨夕
の光景が眼に浮ぶに連れて、自然御米の病気が氣に罹るので、
仕事は思うように運ばなかった。時には変な間違をさえた。
宗助は午になるのを待つて、思い切つて宅へ歸つて来た。

電車の中では、御米の眼がいつ頃覚めたらう、覚めた後は
心持がだいぶ好くなつたらう、発作ももう起る氣遣なかつた
と、すべて悪くない想像ばかり思い浮べた。いつもと違って、
乗客の非常に少ない時間に乗り合わせたので、宗助は周囲の
刺戟に氣を使う必要がほとんどなかった。それで自由に頭の中
へ現われる画を何枚となく眺めた。そのうちに、電車は終
点に来了。

宅の門口まで来ると、家の中はひっそりして、誰もいない
ようであつた。格子を開けて、靴を脱いで、玄関に上がつて
も、出て来るものはなかった。宗助はいつものように縁側か
ら茶の間へ行かずに、すぐ取付の襖を開けて、御米の寝てい

る座敷へ這入った。見ると、御米は依然として寝ていた。枕
元の朱塗の盆に散薬の袋と洋杯が載っていて、その洋杯の水
が半分残っているところも朝と同じであつた。頭を床の間の
方へ向けて、左の頬と芥子を貼った襟元が少し見えるところ
も朝と同じであつた。呼吸よりほかに現実世界と交通のない
ように思われる深い眠も朝見た通りであつた。すべてが今朝
出掛に頭の中へ収めて行つた光景と少しも變つていなかった。
宗助は外套も脱がずに、上から曲んで、すうすういう御米の
寢息をしばらく聞いていた。御米は容易に覚めそうにも見え
なかつた。宗助は昨夕御米が散薬を飲んでから以後の時間を
指を折つて勘定した。そうしてようやく不安の色を面に表わ
した。昨夕までは寝られないのが心配になつたが、こう前後
不覺に長く寝るところを眼のあたりに見ると、寝る方が何か
の異状ではないかと考え出した。

宗助は蒲団へ手を掛けて二三度軽く御米を揺振つた。御米
の髪が括枕の上で、波を打つように動いたが、御米は依然
としてすうすう寝ていた。宗助は御米を置いて、茶の間から
台所へ出た。流し元の小桶の中に茶碗と塗椀が洗わなまま浸
けてあつた。下女部屋を覗くと、清が自分の前に小さな膳を
控えたなり、御櫃に倚りかかつて突伏していた。宗助はまた
六畳の戸を引いて首を差し込んだ。そこには小六が掛蒲団を
一枚頭から引被つて寝ていた。

宗助は一人で着物を着換えたが、脱ぎ捨てた洋服も、人手
を借りずに自分で畳んで、押入にしまった。それから火鉢へ
火を継いで、湯を沸かす用意をした。二三分は火鉢に持たれ
て考えていたが、やがて立ち上がって、まず小六から起しに

かかった。次に清を起した。二人とも驚ろいて飛び起きた。小六に御米の今朝から今までの様子を聞くと、実は余り眠いので、十一時半頃飯を食って寝たのだが、それまでは御米もよく熟睡していたのだと云う。

「医者へ行ってね。昨夜の薬を戴いてから寝出して、今になっても眼が覚めませんが、差支ないでしょうかって聞いて来てくれ」

「はあ」

小六は簡単な返事をして出て行つた。宗助はまた座敷へ来て御米の顔を熟視した。起してやらなくっては悪いような、また起しては身体へ障るような、分別のつかない惑を抱いて腕組をした。

間もなく小六が帰つて来て、医者はちょうど往診に出かけるところであつた、訳を話したら、では今から一二軒寄つてすぐ行こうと答えた、と告げた。宗助は医者が見えるまで、こうして放つておいて構わないのかと小六に問い返したが、小六は医者が以上よりほかに何にも語らなかつたと云うだけなので、やむを得ず元のごとく枕辺にじつと坐っていた。そうして心の中で、医者も小六も不親切過ぎるよう感じた。彼はその上昨夕御米を介抱している時に帰つて来た小六の顔を思い出して、なお不愉快になつた。小六が酒を呑む事は、御米の注意で始めて知つたのであるが、その後気をつけて弟の様子をよく見ていると、なるほど何だか真面目でないところもあるようなので、いつかみっちり異見でもしなければならぬまいくらいに考へてはいたが、面白くもない二人の顔を御米に見せるのが、気の毒なので、今日までわざと遠慮してい

たのである。

「云い出すなら御米の寝ている今である。今ならどんな気不味いことを双方で言い募つたつて、御米の神経に障る気遣はない」

ここまで考へついたけれども、知覚のない御米の顔を見ると、またその方が気がかりになつて、すぐにでも起したい心持があるので、つい決し兼てぐずぐずしていた。そこへようやく医者が来てくれた。

昨夕の折靴をまた丁寧に傍へ引きつけて、緩くり巻煙草を吹かしながら、宗助の云うことを、はあはあと聞いていたが、どれ拝見致しましょうと御米の方へ向き直つた。彼は普通の場合のように病人の脈を取つて、長い間自分の時計を見つめていた。それから黒い聴診器を心臓の上に当てた。それを丁寧にあちらこちらと動かした。最後に丸い穴の開いた反射鏡を出して、宗助に蠟燭を点けてくれと云つた。宗助は蠟燭を持たないので、清に洋灯を点けさせた。医者は眠っている御米の眼を押し開けて、仔細に反射鏡の光を睫の奥に集めた。診察はそれで終つた。

「少し薬が利き過ぎましたね」と云つて宗助の方へ向き直つたが、宗助の眼の色を見るや否や、すぐ、

「しかし御心配になる事はありません。こう云う場合に、もし悪い結果が起るとすると、きつと心臓か脳を冒すものです。が、今拝見したところでは双方共異状は認められませんから」と説明してくれた。宗助はそれでようやく安心した。医者はまた自分の用いた眠り薬が比較的新しいもので、学理上、他の睡眠剤のように有害でない事や、またその効目が患者の

體質に因^よつて、程度に大変な相違のある事などを語って帰った。帰るとき宗助は、

「では寝られるだけ寝かしておいても差^さ支^しありませんか」と聞いたたら、医者は用さえなければ別に起す必要もあるまいと答えた。

医者が帰ったあとで、宗助は急に空腹になった。茶の間へ出ると、先刻^{さつぎ}掛けておいた鉄瓶^{てつびん}がちんちん沸^{たぎ}っていた。清を呼んで、膳^{ぜん}を出せと命ずると、清は困った顔つきをして、まだ何の用意もできていないと答えた。なるほど晩食^{ばんめし}には少し間があった。宗助は楽々と火鉢^{えび}の傍^{そば}に胡坐^{あぐら}を掻^かいて、大根の香^{かう}の物を噛^かみながら湯漬^{ゆづけ}を四杯ほどつけざまに掻^かき込んだ。それから約三十分ほどしたら御米の眼がひとりでに覚^さめた。

十三

新年の頭を拵^{こし}えようという気になって、宗助は久し振に髪結^{かみゆいど}床の敷居を跨^{また}いだ。暮のせい客がだいぶ立て込んでいたので、缺^{はさま}の音が二三力所で、同時にちよきちよき鳴った。この寒さを無理に乗り越して、一日も早く春に入ろうと焦慮^{あせ}するような表通の活動を、宗助は今見て来たばかりなので、その缺^かの音が、いかにも忙^{せわ}しない響^ことなって彼の鼓膜を打った。

しばらく煖炉^{ストーブ}の傍^{そば}で煙草^{たばこ}を吹かして待っている間に、宗助は自分と関係のない大きな世間の活動に否応なしに捲^まき込まれて、やむを得ず年を越さなければならぬ人のごとくに感じた。正月を眼の前へ控えた彼は、実際これという新らしい希望もないのに、いたずらに周囲から誘われて、何だかざわ

ざわした心持を抱^{いだ}いていたのである。

御米^{およね}の発作^{はつさ}はようやく落ちついた。今では平日^{いっぴ}のごとく外へ出ても、家の事^{うち}がそれほど気にかからないぐらいになった。余所^{よそ}に比べると閑静な春の支度も、御米から云えば、年一度の忙^{いそ}がしさには違^{ちが}なかつたので、あるいはいつも通りの準備さえ抜いて、常よりも簡単に年を越す覚悟をした宗助は、蘇生^{よみがえ}つたようにはつきりした妻^{さい}の姿を見て、恐ろしい悲劇が一步遠退^{とのお}いた時のごとくに、胸を撫^なでおろした。しかしその悲劇がまたいついかなる形で、自分の家族を捕^{とら}えに来るかわらないと云う、ぼんやりした掛念^{けねん}が、折々彼の頭のなかに霧^{きり}となつてかかった。

年の暮に、事を好むとしか思われない世間の人々が、故意と短い日を前へ押し出したがつて齷齪^{あくせく}する様子を見ると、宗助はなおの事この茫漠^{ぼうばく}たる恐怖の念に襲^{おそ}われた。成ろうことなら、自分だけは陰気な暗い師走^{しわす}の中に一人残っていたい思さえ起った。ようやく自分の番が来て、彼は冷たい鏡のうちに、自分の影を見出した時、ふとこの影は本来何者だろうと眺^{なが}めた。首から下は真白な布に包まれて、自分の着ている着物の色も縞^{しま}も全く見えなかつた。その時彼はまた床屋の亭主が飼っている小鳥^{かじ}の籠^{かご}が、鏡の奥に映っている事に気がついた。鳥^{とま}が止^とり木の上をちらりちらりと動いた。

頭^いへ香^{におい}のする油を塗られて、景気のいい声を後^{うしろ}から掛けられて、表へ出たときは、それでも清々^{せいせい}した心持であつた。御米の勧め通り髪を刈^つった方が、結局^{つまり}気を新たにする効果があつたのを、冷たい空気の中で、宗助は自覚した。

水道税の事でちよつと聞き合せる必要が生じたので、宗助

は帰り路に坂井へ寄った。下女が出て来て、こちらへと云うから、いつもの座敷へ案内するかと思うと、そこを通り越して、茶の間へ導びいていった。すると茶の間の襖が二尺ばかり開いていて、中から三四人の笑い声が聞えた。坂井の家庭は相変わらず陽気であった。

主人は光沢の好い長火鉢の向側に坐っていた。細君は火鉢を離れて、少し縁側の障子の方へ寄って、やはりこちらを向いていた。主人の後に細長い黒い棹に嵌めた柱時計がかかっていた。時計の右が壁で、左が袋戸棚になっていた。その張交に石摺だの、俳画だの、扇の骨を抜いたものなどが見えた。

主人と細君のほかに、筒袖の揃いの模様の被布を着た女の子が二人肩を擦りつけ合って坐っていた。片方は十二三で、片方は十ぐらいに見えた。大きな眼を揃えて、襖の陰から入って来た宗助の方を向いたが、二人の眼元にも口元にも、今笑ったばかりの影が、まだゆたかに残っていた。宗助は一応室の内を見回して、この親子のほかに、まだ一人妙な男が、一番入口に近い所に畏まっているのを見出した。

宗助は坐って五分と立たないうちに、先刻の笑声は、この変な男と坂井の家族との間に取り換わされた問答から出る事を知った。男は砂埃でさらつきそうな赤い毛と、日に焼けて生涯褪めつこない強い色を有っていた。瀬戸物の釦の着いた白木綿の襯衣を着て、手織の硬い布子の襟から財布の紐みたような長い丸打をかけた様子は、滅多に東京などへ出る機会のない遠い山の国のものとしか受け取れなかった。その上男はこの寒いのに膝小僧を少し出して、紺の落ちた小倉の帯の尻に差した手拭を抜いては鼻の下を擦った。

「これは甲斐の国から反物を背負ってわざわざ東京まで出て来る男なんです」と坂井の主人が紹介すると、男は宗助の方を向いて、

「どうか旦那、一つ買っておくれ」と挨拶をした。

なるほど銘仙だの御召だの、白紬だのがそこら一面に取り散らしてあった。宗助はこの男の形装や言葉遣のおかしい割に、立派な品物を背中へ乗せて歩行くのをむしろ不思議に思った。主人の細君の説明によると、この織屋の住んでいる村は焼石ばかりで、米も粟も収れないから、やむを得ず桑を植えて蚕を飼うんだそうであるが、よほど貧しい所と見えて、柱時計を持っている家が一軒だけで、高等小学へ通う小供が三人しかないという話であった。

「字の書けるものは、この人ぎりなんだそうですよ」と云って細君は笑った。すると織屋も、

「本当のこんだよ、奥さん。読み書き算筆のできるものは、おれよりほかにねえんだからね。全く非道い所にや達ない」と真面目に細君の云う事を首肯した。

織屋はいろいろの反物を主人や細君の前へ突きつけては、「買っておくれ」という言葉をしきりに繰り返した。そりゃ高いよいくらいくらに御負けなどと云われると、「値じゃねえね」とか、「拝むからそれで買っておくれ」とか、「まあ目方を見ておくれ」とかすべて異様な田舎びた答をした。そのたびに皆が笑った。主人夫婦はまた閑だと思えて、面白半分にいつまでも織屋を相手にした。

「織屋、御前そうして荷を背負って、外へ出て、時分どきになつたら、やっぱり御膳を食べるんだろね」と細君が聞いて

た。

「飯を食わねえでいられるもんじゃないよ。腹の減る事ちゅうたら」

「どんな所で食べるの」

「どんな所で食べるちゅうて、やっぱり茶屋で食うだね」

主人は笑いながら茶屋とは何だと聞いた。織屋は、飯を食わす所が茶屋だと答えた。それから東京へ出立には飯が非常に旨いので、腹を据えて食い出すと、大抵の宿屋は叶わない、三度三度食っちゃ気の毒だと云うような事を話して、また皆を笑わした。

織屋はしまいに撚糸の紬と、白紬を一匹細君に売りつけた。宗助はこの押しつまった暮に、夏の紬を買う人を見て余裕のあるものはまた格別だと感じた。すると、主人が宗助に向って、

「どうですあなたも、ついでに何か一つ。奥さんの不断着でも」と勧めた。細君もこう云う機会に買って置くと、幾割か値安に買える便宜を説いた。そうして、

「なに、御払はいつでもいいんです」と受合ってくれた。宗助はとうとう御米のために銘仙を一反買う事にした。主人はそれをさんさん値切って三円に負けさせた。

織屋は負けた後でまた、

「全く値じゃねえね。泣きたくなるね」と云ったので、大勢がまた一度に笑った。

織屋はどこへ行ってもこういう鄙びた言葉を使って通しているらしかった。毎日馴染みの家をぐるぐる回って歩いていくうちには、背中の荷がだんだん軽くなって、しまいに紺の

風呂敷と真田紐だけが残る。その時分にはちょうど旧の正月が来るので、ひとまず国元へ帰って、古い春を山の中で越して、それからまた新しい反物を背負えるだけ背負って出て来るのだと云った。そうして養蚕の忙しい四月の末か五月の初までに、それを悉皆金に換えて、また富士の北影の焼石ばかりころがっている小村へ帰って行くのださうである。

「宅へ来出してから、もう四五年になりますが、いつ見ても同じ事で、少しも変わらないんですよ」と細君が注意した。

「実際珍らしい男です」と主人も評語を添えた。三日も外へ出ないと、町幅がいつの間にか取り広げられていたり、一日新聞を読まないと、電車の開通を知らずに過したりする今の世に、年に二度も東京へ出ながら、こう山男の特色をどこまでも維持して行くのは、実際珍らしいに違なかった。宗助はつくづくこの織屋の容貌やら態度やら服装やら言葉使やらを観察して、一種気の毒な思をなした。

彼は坂井を辞して、家へ帰る途中にも、折々インヴァネスの羽根の下に抱えて来た銘仙の包を持ち易えながら、それを三円という安い価で売った男の、粗末な布子の縞と、赤くてばさばさした髪の毛と、その油気のない硬い髪の毛が、どういう訳か、頭の真中で立派に左右に分けられている様を、絶えず眼の前に浮べた。

宅では御米が、宗助に着せる春の羽織をようやく縫い上げて、圧の代りに坐蒲団の下へ入れて、自分でその上へ坐っていると云うのであった。

「あなた今夜敷いて寝て下さい」と云って、御米は宗助を顧みた。夫から、坂井へ来ていた甲斐の男の話を聞いた時は、

御米もさすがに大きな声を出して笑った。そうして宗助の持つて帰った銘仙の縞柄と地合を飽かず眺めては、安い安いと云った。銘仙は全く品の良いものであった。

「どうして、そう安く売って割に合うんでしょう」としまいに聞き出した。

「なに中へ立つ呉服屋が儲け過ぎてゐるのさ」と宗助はその道に明るいような事を、この一反の銘仙から推断して答えた。

夫婦の話はそれから、坂井の生活に余裕のある事と、その余裕のために、横町の道具屋などに意外な儲け方をされる代りに、時とするとこう云う織屋などから、差し向き不用のものを廉価に買っておく便宜を有している事などに移って、しまいとその家庭のいかにも陽気で、賑やかな模様に落ちて行った。宗助はその時突然語調を更えて、

「なに金があるばかりじゃない。一つは子供が多いからさ。子供さえあれば、大抵貧乏な家でも陽気になるものだ」と御米を覚した。

その云い方が、自分達の淋しい生涯を、多少自ら窘めるような苦い調子を、御米の耳に伝えたので、御米は覚え膝の上の反物から手を放して夫の顔を見た。宗助は坂井から取って来た品が、御米の嗜好に合ったので、久しぶりに細君を喜ばせてやった自覚があるばかりだったから、別段そこには気がつかなかった。御米もちょっと宗助の顔を見たなりその時は何にも云わなかった。けれども夜に入って寝る時間が来るまで御米はそれをわざと延ばしておいたのである。

二人はいつもの通り十時過床に入ったが、夫の眼がまだ覚めている頃を見計らって、御米は宗助の方を向いて話しかけ

た。

「あなた先刻小供がないと淋しくっていけないとおっしゃってね」

宗助はこれに類似の事を普遍的に云った覚はたしかにあった。けれどもそれは強がちに、自分達の身の上について、特に御米の注意を惹くために口にした、故意の觀察でないのだから、こう改たまって聞き糺されると、困るよりほかはなかった。

「何も宅の事を云ったのじゃないよ」

この返事を受けた御米は、しばらく黙っていた。やがて、「でも宅の事を始終淋しい淋しいと思っていらいっしやるから、必竟あんな事をおっしゃるんでしょう」と前とほぼ似たような問を繰り返した。宗助は固よりそうだと答えなければならぬ。或物を頭の中に有っていた。けれども御米を憚って、それほど明白地な自白をあえてし得なかった。この病氣上りの細君の心を休めるためには、かえってそれを冗談にして笑ってしまふ方が善かろうと考えたので、

「淋しいと云えば、そりゃ淋しくもないがね」と調子を易えてなるべく陽気に出たが、そこで詰まったぎり、新しい文句も、面白い言葉も容易に思いつけなかった。やむを得ず、

「まあいいや。心配するな」と云った。御米はまた何とも答えなかった。宗助は話題を変えようと思って、

「昨夕も火事があったね」と世間話をし出した。すると御米は急に、

「私は実にあなたに御氣の毒で」と切なそうに言訳を半分し

て、またそれなり黙ってしまった。洋灯はいつものように床の間の上に据えてあった。御米は灯に背いていたから、宗助には顔の表情が判然分らなかったけれども、その声は多少涙でうるんでいるように思われた。今まで仰向いて天井を見ていた彼は、すぐ妻の方へ向き直った。そうして薄暗い影になった御米の顔をじっと眺めた。御米も暗い中からじっと宗助を見ていた。そうして、

「疾からあなたに打ち明けて謝罪まろうと思つていたんですが、つい言い悪かったもんだから、それなりにしておいたのです」と途切れ途切れに云った。宗助には何の意味かまるで解らなかった。多少はヒステリーのせいかとも思つたが、全然そうとも決しかねて、しばらく茫然していた。すると御米が思い詰めた調子で、

「私にはとても子供のできる見込はないのよ」と云い切つて泣き出した。

宗助はこの可憐な自白をどう慰さめていいか分別に余つて当惑していたうちにも、御米に対してはなはだ気の毒だという思が非常に高まつた。

「子供なんざ、無くてもいいじゃないか。上の坂井さんみたようにたくさん生れて御覧、傍から見ても気の毒だよ。まるで幼稚園のようで」

「だって一人もできないときまっちまったら、あなただって好かないでしょう」

「まだできないときままりやしないじゃないか。これから生れるかも知れないやね」

御米はなおと泣き出した。宗助も途方に暮れて、発作の治

まるのを穏やかに待っていた。そうして、緩くり御米の説明を聞いた。

夫婦は和合同棲という点において、人並以上に成功したと同時に、子供にかけては、一般の隣人よりも不幸であった。それも始から宿る種がなかったのなら、まだしもだが、育つべきものを途中で取り落したのだから、さらに不幸の感が深かった。

始めて身重になったのは、一人が京都を去つて、広島に瘠世帯を張っている時であった。懷妊と事がきまつたとき、御米はこの新しい経験に対して、恐ろしい未来と、嬉しい未来を一度に夢に見るような心持を抱いて日を過ごした。宗助はそれを眼に見えない愛の精に、一種の確証となるべき形を与えた事実と、ひとり解釈して少なからず喜んだ。そうして自分の命を吹き込んだ肉の塊が、目の前に踊る時節を指を折つて楽しみに待った。ところが胎児は、夫婦の予期に反して、五カ月まで育つて突然下りてしまった。その時分の夫婦の活計は苦しい苛い月ばかり続いていった。宗助は流産した御米の蒼い顔を眺めて、これも必竟は世帯の苦労から起るんだと判じた。そうして愛情の結果が、貧のために打ち崩されて、永く手の裡に捕える事のできなくなったのを残念がった。御米はひたすら泣いた。

福岡へ移つてから間もなく、御米はまた酸いものを嗜む人となった。一度流産すると癖になると聞いたので、御米は万に注意して、つつましくやかに振舞っていた。そのせいか経過は至極順当に行つたが、どうした訳か、これという原因もないのに、月足らずで生れてしまった。産婆は首を傾けて、一

度医者に見せるように勧めた。医者に診て貰うと、発育が充分でないから、室内の温度を一定の高さにして、昼夜とも変らないくらい、人工的に暖めなければいけないと云った。宗助の手際では、室内に煖炉を据えつける設備をするだけでも容易ではなかった。夫婦はわが時間と算段の許す限りを尽して、専念に赤児の命を護った。けれどもすべては徒勞に帰した。一週間の後、二人の血を分けた情の塊はついに冷たくなった。御米は幼児の亡骸を抱いて、

「どうしましょう」と啜り泣いた。宗助は再度の打撃を男らしく受けた。冷たい肉が灰になって、その灰がまた黒い土に和するまで、一口も愚痴らしい言葉は出さなかった。そのうちいつとなく、二人の間に挟まっていた影のようなものが、しだいに遠退いて、ほどなく消えてしまった。

すると三度目の記憶が来た。宗助が東京に移って始ての年に、御米はまた懐妊したのである。出京の当座は、だいぶん身体が衰ろえていたので、御米はもちろん、宗助もひどくそこを氣遣ったが、今度こそはという腹は両方にあつたので、張のある月を無事にだんだんと重ねて行つた。ところがちょうど五月目になって、御米はまた意外の失敗をやつた。その頃はまだ水道も引いてなかったから、朝晩下女が井戸端へ出て水を汲んだり、洗濯をしなければならなかった。御米はある日裏にいる下女に云いつける用ができたので、井戸流の傍に置いた盥の傍まで行つて話をしたついでに、流を向へ渡ろうとして、青い苔の生えている濡れた板の上へ尻足を突いた。御米はまたやり損なつたとは思つたが、自分の粗忽を面目ながつて、宗助にはわざと何事も語らずにその場を通した。け

れどもこの震動が、いつまで経つても胎児の発育にこれという影響も及ぼさず、したがつて自分の身体にも少しの異状を引き起さなかつた事がたしかに分つた時、御米はようやく安心して、過去の失を改めて宗助の前に告げた。宗助は固より妻を咎める意もなかつた。ただ、

「よく氣をつけないと危ないよ」と穏やかに注意を加えて過ぎた。

とかくするうちに月が満ちた。いよいよ生れるという間際まで日が詰つたとき、宗助は役所へ出ながらも、御米の事がしきりに氣にかかつた。帰りにはいつも、今日はことによると留守のうちになどと案じ続けては、自分の家の格子の前に立つた。そうして半ば予期している赤児の泣声が聞えないと、かえつて何かの変でも起つたらしく感じて、急いで宅へ飛び込んで、自分と自分の粗忽を恥ずる事があつた。

幸に御米の産氣づいたのは、宗助の外に用のない夜中だったので、傍にいて世話のできると云う点から見ればはなはだ都合が好かつた。産婆も緩くり間に合うし、脱脂綿その他の準備もことごとく不足なく取り揃えてあつた。産も案外軽かつた。けれども肝心の小児は、ただ子宮を逃れて広い所へ出たというまでで、浮世の空氣を一口も呼吸しなかつた。産婆は細い硝子の管のようなものを取つて、小さい口の内へ強い呼吸をしきりに吹き込んだが、効目はまるでなかつた。生れたものは肉だけであつた。夫婦はこの肉に刻みつけられた、眼と鼻と口とを髣髴した。しかしその咽喉から出る声はついに聞く事ができなかった。

産婆は出産のあつたついで一週間前に来て、丁寧に胎児の心

臍まで聴診して、至極御健全だと保証して行ったのである。よし産婆の云う事に間違があつて、腹の児の發育が今までのうちにどこかで止つていたにしたところで、それが直取り出されない以上、母体は今日まで平氣に持ち応える訳がなかった。そこをだんだん調べて見て、宗助は自分がいまだかつて聞いた事のない事実を発見した時に、思わず恐れ驚ろいた。胎児は出る間際まで健康であつたのである。けれども臍帯纏絡と云つて、俗に云う胞を頸へ捲きつけていた。こう云う異常の場合には、固より産婆の腕で切り抜けるよりほかにしようのないもので、経験のある婆さんなら、取り上げる時に、旨く頸に掛かつた胞を外して引き出すはずであつた。宗助の頼んだ産婆もかなり年を取っているだけに、このくらいのことには心得ていた。しかし胎児の頸を絡んでいた臍帯は、時たまあるごとく一重ではなかつた。二重に細い咽喉を巻いている胞を、あの細い所を通す時に外し損なつたので、小児はぐつと氣管を絞められて窒息してしまつたのである。

罪は産婆にもあつた。けれどもなかば以上は御米の落度に違なかつた。臍帯纏絡の変状は、御米が井戸端で滑つて痛く尻餅を搗いた五カ月前すでに自ら醸したものと知れた。御米は産後の蓐中にその始末を聞いて、ただ軽く首肯いたざり何にも云わなかつた。そうして、疲労に少し落ち込んだ眼を濡ませて、長い睫毛をしきりに動かした。宗助は慰さめながら、手帛で頬に流れる涙を拭いてやつた。

これが子供に関する夫婦の過去であつた。この苦い経験を嘗めた彼らは、それ以後幼児について余り多くを語るを好まなかつた。けれども二人の生活の裏側は、この記憶のために淋

しく染めつけられて、容易に剥げそうには見えなかつた。時としては、彼我がの笑声を通してさえ、御互の胸に、この裏側が薄暗く映る事もあつた。こういう訳だから、過去の歴史を今夫に向つて新たに繰り返そうとは、御米も思い寄らなかつたのである。宗助も今更妻からそれを聞かせられる必要は少しも認めていなかったのである。

御米の夫に打ち明けると云つたのは、固より二人の共有していた事実についてではなかつた。彼女は三度目の胎児を失つた時、夫からその折の模様を聞いて、いかにも自分が残酷な母であるかのごとく感じた。自分が手を下した覚がないにせよ、考えようによつては、自分と生を与えたものの生を奪うために、暗闇と明海の途中に待ち受けて、これを絞殺したと同じ事であつたからである。こう解釈した時、御米は恐ろしい罪を犯した悪人と己を見倣さない訳に行かなかつた。そうして思わざる徳義上の苛責を人知れず受けた。しかもその苛責を分つて、共に苦しんでくれるものは世界中に一人もなかつた。御米は夫にさえこの苦しみを語らなかつたのである。

彼女はその時普通の産婦のように、三週間を床の中で暮らした。それは身体から云うと極めて安静の三週間に違なかつた。同時に心から云うと、恐るべき忍耐の三週間であつた。宗助は亡児のために、小さい柩を拵らえて、人の眼に立たない葬儀を営なんだ。しかる後、また死んだもののために小さな位牌を作つた。位牌には黒い漆で戒名が書いてあつた。位牌の主は戒名を持っていた。けれども俗名は両親といえども知らなかつた。宗助は最初それを茶の間の箆笥の上へ載せて、役所から帰ると絶えず線香を焚いた。その香が六畳に寝

ている御米の鼻に時々通った。彼女の官能は当時それほどに鋭どくなっていたのである。しばらくしてから、宗助は何を考えたか、小さい位牌を筆筒の抽出の底へしまってしまった。そこには福岡で亡くなった小供の位牌と、東京で死んだ父の位牌が別々に綿で包んで丁寧に入れてあった。東京の家を畳むとき宗助は先祖の位牌を一つ残らず携えて、諸所を漂泊するの煩わしさに堪えなかったもので、新しい父の分だけを鞆の中に収めて、その他はことごとく寺へ預けておいたのである。

御米は宗助のするすべてを寝ながら見たり聞いたりしていた。そうして布団の上に仰向になったまま、この二つの小さい位牌を、眼に見えない因果の糸を長く引いて互に結びつけた。それからその糸をなお遠く延ばして、これは位牌にもならず流れてしまった、始めから形のない、ぼんやりした影のような死児の上に投げかけた。御米は広島と福岡と東京に残る一つずつの記憶の底に、動かしがたい運命の厳かな支配を認めて、その厳かな支配の下に立つ、幾月日の自分を、不思議にも同じ不幸を繰り返すべく作られた母であると観じた時、時ならぬ呪詛の声を耳の傍に聞いた。彼女が三週間の安静を、蒲団の上に貪ぼらなければならないように、生理的に強いられている間、彼女の鼓膜はこの呪詛の声でほとんど絶えず鳴っていた。三週間の安臥は、御米に取って実に比類のない忍耐の三週間であった。

御米はこの苦しい半月余りを、枕の上でじっと見つめながら過ごした。しまいには我慢して横になっているのが、いかにも苛かったので、看護婦の帰った明る日に、こっそり起き

てぶらぶらして見たが、それでも心に逼る不安は、容易に紛らせなかった。退儀な身体を無理に動かす割に、頭の中は少しも動いてくれないので、また落胆りして、ついには取り放しの夜具の下へ潜り込んで、人の世を遠ざけるように、眼を堅く閉ってしまふ事もあった。

そのうち定期の三週間も過ぎて、御米の身体は自からすつきりなつた。御米は奇麗に床を払って、新しい気のある眉を再び鏡に照らした。それは更衣の時節であった。御米も久しぶりに綿の入った重いものを脱ぎ棄てて、肌に垢の触れない軽い気持を爽やかに感じた。春と夏の境をぱつと飾る陽気な日本の風物は、淋しい御米の頭にも幾分かの反響を与えた。けれども、それはただ沈んだものを掻き立てて、賑やかな光りのうちに浮かしたまでであつた。御米の暗い過去の中にその時一種の好奇心が萌したのである。

天氣の勝れて美しいある日の午前、御米はいつもの通り宗助を送り出してから直に、表へ出た。もう女は日傘を差して外を行くべき時節であつた。急いで日向を歩くと額の辺が少し汗ばんだ。御米は歩き歩き、着物を着換える時、筆筒を開けたら、思わず一番目の抽出の底にしまつてあつた、新しい位牌に手が触れた事を思いつづけて、とうとうある易者の門を潜った。

彼女は多数の文明人に共通な迷信を子供の時から持っていた。けれども平生はその迷信がまた多数の文明人と同じように、遊戲的に外に現われるだけで済んでいた。それが実生活の厳かな部分を冒すようになったのは、全く珍らしいと云わなければならなかつた。御米はその時真面目な態度と真面目

な心を有^もつて、易者の前に坐^まつて、自分が将来子を生むべき、また子を育てるべき運命を天から与えられるだろうかを確めた。易者は大道に店を出して、往来の人の身の上を一二銭で占^うなう人と、少しも違^{ちが}つた様子もなく、算^{さん}木^ぎをいろいろに並べて見たり、筮^{ぜい}竹^{ちく}を揉^もんだり数えたりした後で、仔細^{しさい}らしく腮^{あご}の下^{ひげ}の髯^{ひげ}を握^{にぎ}つて何か考^{かん}えたが、終りに御米の顔をつくづく眺^{なが}めた末、

「あなたには子供はできません」と落ちつき払^はつて宣告した。御米は無言のまま、しばらく易者の言葉を頭の中で嚙^かんだり碎^{くだ}いたりした。それから顔を上げて、

「なぜでしょう」と聞き返した。その時御米は易者が返事をする前に、また考^{かん}えるだろうと思^{おも}つた。ところが彼はまともに御米の眼の間を見詰めたまま、すぐ

「あなたは人に対してすまない事をした覚^{おぼえ}がある。その罪が祟^{たた}っているから、子供はけっして育たない」と云い切^きつた。御米はこの一言^{いちげん}に心臓を射抜かれる思^{おも}があつた。くしやりと首を折^うつたなり家へ歸^{かへ}つて、その夜は夫の顔さえろくろく見上げなかつた。

御米の宗助に打ち明けないで、今まで過^あしたというのは、この易者の判断であつた。宗助は床の間に乗せた細い洋灯^{ランペン}の灯^ひが、夜の中に沈^{しず}んで行きそうな静かな晩に、始めて御米の口からその話を聞いたとき、さすがに好い気味はしなかつた。「神經の起^おつた時、わざわざそんな馬鹿な所へ出かけるからさ。錢^{ぜに}を出^でして下^{くだ}らない事を云^いわれてつまらないじゃないか。その後もその占^うの宅^{うち}へ行くのかい」

「恐^{おそ}ろしいから、もうけっして行かないわ」

「行かないがいい。馬鹿氣^{ばかき}ている」
宗助はわざと鷹揚^{おうよう}な答をしてまた寝てしまった。

十四

宗助^{そうすけ}と御米^{およね}とは仲の好い夫婦に違^{ちが}なかつた。いつしよになつてから今日^{こんにち}まで六年ほどの長い月日を、まだ半日も氣^き不^ふ味^みく暮^くした事はなかつた。言^い逆^{さか}に顔を赤^{あか}らめ合^あつた試^{ため}はなおなかつた。二人は呉服屋の反物を買^かつて着^きた。米屋から米を取^とつて食^くつた。けれどもその他には一般の社会に待つところのきわめて少ない人間であつた。彼らは、日常の必要品を供給する以上の意味において、社会の存在をほとんど認^ためていなかった。彼らに取^とつて絶對に必要なものは御互^{おた}だけで、その御互^{おた}だけが、彼らにはまた充分であつた。彼らは山の中にいる心を抱^{いだ}いて、都会に住^すんでいた。

自然^{しぜん}の勢^{いきおい}として、彼らの生活は單調に流れない訳に行^いかなかつた。彼らは複雑な社会の煩^{わづらひ}を避^さけ得^えたと共に、その社会の活動から出るさまざまの經驗に直接触^ふれる機会を、自分と塞^{ふさ}いでしまつて、都会に住^すみながら、都会に住む文明人の特權^{とくけん}を棄^すてたような結果に到着した。彼らも自分達の日常に変化のない事は折々自覺^{みじん}した。御互^{おた}が御互^{おた}に飽^あきるの、物足りなくなるのという心は微塵^{みじん}も起^おりなかつたけれども、御互^{おた}の頭に受^うけ入れる生活の内容には、刺戟^{しげき}に乏^{ひそ}しい或物が潜^{ひそ}んでいるような鈍^{にぶ}い訴^{うたえ}があつた。それにもかかわらず、彼らが毎日同じ判を同じ胸に押^おして、長の月日を倦^うまず渡^わつて來^きたのは、彼らが始^はから一般の社会に興味を失^うつていたため

ではなかった。社会の方で彼らを二人ぎりに切りつめて、その二人に冷かな背を向けた結果にほかならなかった。外に向って生長する余地を見出し得なかった二人は、内に向って深く延び始めたのである。彼らの生活は広さを失なうと同時に、深さを増して来た。彼らは六年の間世間に散漫な交渉を求めなかった代りに、同じ六年の歳月を挙げて、互の胸を掘り出した。彼らの命は、いつの間にか互の底にまで喰い入った。二人は世間から見れば依然として二人であった。けれども互から云えば、道義上切り離す事のできない一つの有機体になった。二人の精神を組み立てる神経系は、最後の繊維に至るまで、互に抱き合つてでき上つていた。彼らは大きな水盤の表に滴たった二点の油のようなものであった。水を弾いて二つがいっしょに集まつたと云うよりも、水に弾かれた勢で、丸く寄り添つた結果、離れる事ができなくなったと評する方が適當であつた。

彼らはこの抱合の中に、尋常の夫婦に見出しがたい親和と飽満と、それに伴なう倦怠とを兼ね具えていた。そうしてその倦怠の慵い気分支配されながら、自己を幸福と評価する事だけは忘れなかった。倦怠は彼らの意識に眠のような幕を掛けて、二人の愛をうつとり霞ます事はあつた。けれども鰥で神経を洗われる不安はけつして起し得なかった。要するに彼らは世間に疎いだけそれだけ仲の好い夫婦であつたのである。

彼らは人並以上に睦ましい月日を渝らずに今日から明日へと繋いで行きながら、常はそこに気がつかずに顔を見合わせているようなものの、時々自分達の睦まじがる心を、自分で確

と認める事があつた。その場合には必ず今まで睦まじく過ごした長の歳月を溯のぼって、自分達がいかな犠牲を払って、結婚をあえてしたかと云う當時を憶い出さない訳には行かなかった。彼らは自然が彼らの前にもたらした恐るべき復讐の下に戦きながら跪ずいた。同時にこの復讐を受けるために得た互の幸福に對して、愛の神に一弁の香を焚く事を忘れなかった。彼らは鞭たれつつ死に赴くものであつた。ただその鞭の先に、すべてを癒やす甘い蜜の着いている事を覺つたのである。

宗助は相當に資産のある東京ものの子弟として、彼らに共通な派出な嗜好を、学生時代には遠慮なく充たした男である。彼はその時服装にも、動作にも、思想にも、ことごとく当世らしい才人の面影を漲らして、昂い首を世間に擡げつつ、行こうと思う辺りを闊歩した。彼の襟の白かつたごとく、彼のズボンの裾が奇麗に折り返されていたごとく、その下から見える彼の靴足袋が模様入のカシミヤであつたごとく、彼の頭は華奢な世間向きであつた。

彼は生れつき理解の好い男であつた。したがって大した勉強をする気にはなれなかった。学問は社会へ出るための方便と心得ていたから、社会を一步退ぞかなくては達する事のできない、学者という地位には、余り多くの興味を有っていなかった。彼はただ教場へ出て、普通の学生のする通り、多くのノートブックを黒くした。けれども宅へ歸つて来て、それを読み直したり、手を入れたりした事は滅多になかった。休んで抜けた所さえ大抵はそのままにして放つて置いた。彼は下宿の机の上に、このノートブックを奇麗に積み上げて、

いつ見ても整然と秩序のついた書齋を空にしては、外を歩
るいた。友達は多く彼の寛濶を羨んだ。宗助も得意であった。
彼の未来は虹のように美しく彼の眸を照らした。

その頃の宗助は今と違って多くの友達を持っていた。実を
云うと、軽快な彼の眼に映ずるすべての人は、ほとんど誰彼
の区別なく友達であった。彼は敵という言葉の意味を正當に
解し得ない楽道家として、若い世をのびのびと渡った。

「なに不景気な顔さえしなければ、どこへ行つたつて驪迎さ
れるもんだよ」と学友の安井によく話した事があつた。實際
彼の顔は、他を不愉快にするほど深刻な表情を示し得た試が
なかつた。

「君は身体が丈夫だから結構だ」とよくどこかに故障の起る
安井が羨ましがつた。この安井というのは国は越前だが、長
く横浜にいたので、言葉や様子は毫も東京ものと異なる点が
なかつた。着物道楽で、髪の毛を長くして真中から分ける癖
があつた。高等学校は違つていたけれども、講義のときよく
隣合せに並んで、時々聞き損なつた所などを後から質問する
ので、口を利き出したのが元になって、つい懇意になつた。

それが学年の始りだったので、京都へ来て日のまだ浅い宗助
にはだいぶんの便宜であつた。彼は安井の案内で新しい土
地の印象を酒のごとく吸い込んだ。二人は毎晩のように三条
とか四条とかいう賑やかな町を歩いた。時によると京極も通
り抜けた。橋の真中に立つて鴨川の水を眺めた。東山の上に
出る静かな月を見た。そうして京都の月は東京の月よりも丸
くて大きいように感じた。町や人に厭きたときは、土曜と日
曜を利用して遠い郊外に出た。宗助は至る所の大竹藪に緑の籠

る深い姿を喜んだ。松の幹の染めたように赤いのが、日を照
り返して幾本となく並ぶ風情を楽しんだ。ある時は大悲閣へ
登つて、即非の額の下に仰向きながら、谷底の流を下る櫓の
音を聞いた。その音が雁の鳴声によく似ているのを二人とも
面白がつた。ある時は、平八茶屋まで出掛けて行つて、そこ
に一日寝ていた。そうして不味い河魚の串に刺したのを、か
みさんに焼かして酒を呑んだ。そのかみさんは、手拭を被つ
て、紺の立付みたようなものを穿いていた。

宗助はこんな新しい刺激の下に、しばらくは慾求の満足
を得た。けれどもひととおり古い都の臭を嗅いで歩くうちに、
すべてがやがて、平板に見えだして来た。その時彼は美しく
い山の色と清い水の色が、最初ほど鮮明な影を自分の頭に宿
さないのを物足らず思い始めた。彼は暖かな若い血を抱いて、
その熱りを冷す深い緑に逢えなくなつた。そうかといつて、
この情熱を焚き尽すほどの烈しい活動には無論出会わなかつ
た。彼の血は高い脈を打つて、いたずらにむず痒く彼の身体
の中を流れた。彼は腕組をして、坐ながら四方の山を眺めた。
そうして、

「もうこんな古臭い所には厭きた」と云つた。

安井は笑いながら、比較のため、自分の知つてゐる或友達
の故郷の物語をして宗助に聞かした。それは浄瑠璃の間の土山
雨が降るとある有名な宿の事であつた。朝起きてから夜寝る
まで、眼に入るものは山よりほかにない所で、まるで擂鉢の
底に住んでゐると同じ有様だと告げた上、安井はその友達
の小さい時分の経験として、五月雨の降りつく折などは、小
供心に、今にも自分の住んでゐる宿が、四方の山から流れて

来る雨の中に浸かってしまいで、心配でならなかったと云う話をした。宗助はそんな拙鉢の底で一生を過す人の運命ほど情ないものはあるまいと考えた。

「そう云う所に、人間がよく生きていられるな」と不思議そうな顔をして安井に云った。安井も笑っていた。そうして土山から出た人物の中では、千両函を摩り替えて礫になったのが一番大きいのだと云う一口話をやはり友達から聞いた通り繰り返した。狭い京都に飽きた宗助は、単調な生活を破る色彩として、そう云う出来事も百年に一度ぐらいは必要だろうとまで思った。

その時分の宗助の眼は、常に新らしい世界にばかり注がれていた。だから自然がひととおり四季の色を見せてしまったあとでは、再び去年の記憶を呼び戻すために、花や紅葉を迎える必要がなくなった。強く烈しい命に生きたと云う証券を飽くまで握りたかった彼には、活きた現在と、これから生れようとする未来が、当面の問題であつたけれども、消えかかる過去は、夢同様に価の乏しい幻影に過ぎなかった。彼は多くの剥げかかった社と、寂果てた寺を見尽して、色の褪めた歴史の上に、黒い頭を振り向ける勇気を失いかけた。寝巻けた昔に徘徊するほど、彼の気分は枯れていなかったのである。

学年の終りに宗助と安井とは再会を約して手を分った。安井はひとまず郷里の福井へ帰って、それから横浜へ行くつもりだから、もしその時には手紙を出して通知をしよう、そうしてなるべくならいっしょの汽車で京都へ下ろう、もし時間が許すなら、興津あたりで泊って、清見寺や三保の松原や、久能山でも見ながら緩くり遊んで行こうと云った。宗助は大

いによからうと答えて、腹のなかではすでに安井の端書を手にする時の心持さえ予想した。

宗助が東京へ帰ったときは、父は固よりまだ丈夫であつた。小六は子供であつた。彼は一年ぶりに殷んな都の炎熱と煤煙を呼吸するのをかえって嬉しく感じた。燬くような日の下に、渦を捲いて狂い出しそうな瓦の色が、幾里となく続く景色を、高い所から眺めて、これでこそ東京だと思ふ事さえあつた。今の宗助なら目を眩しかねない事々物々が、ことごとく壮快の二字を彼の額に焼き付けべく、その時は反射して来たのである。

彼の未来は封じられた蓄のように、開かない先は他に知れないばかりでなく、自分にも確とは分らなかった。宗助はただ洋々の二字が彼の前途に棚引いている気がしただけであつた。彼はこの暑い休暇中にも卒業後の自分に対する謀を忍がせにはしなかった。彼は大学を出てから、官途につこうか、または実業に従おうか、それすら、まだ判然と心にきめていなかったにかかわらず、どちらの方面でも構わず、今のうちから、進めるだけ進んでおく方が利益だと心づいた。彼は直接父の紹介を得た。父を通して間接にその知人の紹介を得た。そうして自分の将来を影響し得るような人を物色して、二三の訪問を試みた。彼らのあるものは、避暑という名義の下に、すでに東京を離れていた。あるものは不在であつた。またあるものは多忙のため時を期して、勤務先で会おうと云った。宗助は日のまだ高くない七時頃に、昇降器で煉瓦造の三階へ案内されて、その応接間に、もう七八人も自分と同じように、同じ人を待つている光景を見て驚ろいた事もあつた。

彼はこうして新らしい所へ行つて、新らしい物に接するのが、用向の成否に関わらず、今まで眼に付かずに過ぎた活きた世界の断片を頭へ詰め込むような気がして何となく愉快であつた。

父の云いつけで、毎年の通り虫干の手伝をさせられるのも、こんな時には、かえつて興味の多い仕事の一部分に数えられる。彼は冷たい風の吹き通す土蔵の戸前の湿っぽい石の上に腰を掛けて、古くから家にあつた江戸名所図会と、江戸砂子という本を物珍しそうに眺めた。畳まで熱くなつた座敷の真中へ胡坐を搔いて、下女の買つて来た樟脳を、小さな紙片に取り分けては、医者でくれる散薬のような形に畳んだ。宗助は小供の時から、この樟脳の高い香と、汗の出る土用と、炮烙灸と、蒼空を緩く舞う鳶とを連想していた。

とかくするうちに節は立秋に入つた。二百十日の前には、風が吹いて、雨が降つた。空には薄墨の煮染んだような雲がしきりに動いた。寒暖計が二三日下がり切りに下がつた。宗助はまた行李を麻縄で絡めて、京都へ向う支度をしなければならなくなつた。

彼はこの間にも安井と約束のある事は忘れなかつた。家へ歸つた当座は、まだ二カ月も先の事だからと緩く構えていたが、だんだん時日が逼るに従つて、安井の消息が気になつてきた。安井はその後一枚の端書さえ寄こさなかつたのである。宗助は安井の郷里の福井へ向けて手紙を出して見た。けれども返事はついに来なかつた。宗助は横浜の方へ問い合せて見ようと思つたが、つい番地も町名も聞いて置かなかつたので、どうする事もできなかつた。

立つ前の晩に、父は宗助を呼んで、宗助の請求通り、普通の旅費以外に、途中で二三日滞在した上、京都へ着いてからの当分の小遣を渡して、

「なるたけ節儉しなくちゃいけない」と諭した。

宗助はそれを、普通の子が普通の親の訓戒を聞く時のごとくに聞いた。父はまた、

「来年また歸つて来るまでは会わないから、随分気をつけて」と云つた。その歸つて来る時節には、宗助はもう帰れなくなつていたのである。そうして歸つて来た時は、父の亡骸がもう冷たくなつていたのである。宗助は今に至るまでその時の父の面影を思い浮べてはすまないような気がした。

いよいよ立つと云う間際に、宗助は安井から一通の封書を受取つた。開いて見ると、約束通りいっしょに歸るつもりでいたが、少し事情があつて先へ立たなければならぬ事になつたからと云う断を述べた末に、いづれ京都で緩くり会おうと書いてあつた。宗助はそれを洋服の内懐に押し込んで汽車に乗つた。約束の興津へ来たとき彼は一人でプラトフオームへ降りて、細長い一筋町を清見寺の方へ歩いた。夏もすでに過ぎた九月の初なので、おおかたの避暑客は早く引き上げた後だから、宿屋は比較的閑静であつた。宗助は海の見える一室の中に腹這になつて、安井へ送る絵端書へ二三行の文句を書いた。そのなかに、君が来ないから僕一人でここへ来たという言葉を入れた。

翌日も約束通り一人で三保と竜華寺を見物して、京都へ行つてから安井に話す材料をできるだけ拵えた。しかし天氣のせい、か、当にした連のないためか、海を見ても、山へ登つて

も、それほど面白くなかった。宿にじっとしているのは、なお退屈であつた。宗助は匆々にまた宿の浴衣を脱ぎ棄てて、絞りの三尺と共に欄干に掛けて、興津を去つた。

京都へ着いた一日目は、夜汽車の疲れやら、荷物の整理やらで、往來の日影を知らずに暮らした。二日目になつてようやく学校へ出て見ると、教師はまだ出揃つていなかった。学生も平日よりは数が不足であつた。不審な事には、自分より三四日前に歸っているべきはずの安井の顔さえどこにも見えなかった。宗助はそれがかかるので、歸りにわざわざ安井の下宿へ回つて見た。安井のいる所は樹と水の多い加茂の社の傍であつた。彼は夏休み前から、少し閑静な町外れへ移つて勉強するつもりだとか云つて、わざわざこの不便な村同様な田舎へ引込んだのである。彼の見つけ出した家から寂た土塀を二方に回らして、すでに古風に片づいていた。宗助は安井から、その主人はもと加茂神社の神官の一人であつたと云う話を聞いた。非常に能弁な京都言葉を操る四十ばかりの細君がいて、安井の世話をしていた。

「世話つて、ただ不味い菜を拵らえて、三度ずつ室へ運んでくれるだけだよ」と安井は移り立てからこの細君の悪口を利いていた。宗助は安井をここに二三度訪ねた縁故で、彼のいわゆる不味い菜を拵らえる主を知っていた。細君の方でも宗助の顔を覚えていた。細君は宗助を見るや否や、例の柔かい舌で慇懃な挨拶を述べた後、こっちから聞こうと思つて来た。安井の消息を、かえつて向うから尋ねた。細君の云うところによると、彼は郷里へ歸つてから当日に至るまで、一片の音信さえ下宿へは出さなかつたのである。宗助は案外な思で自

分の下宿へ歸つて来た。

それから一週間ほどは、学校へ出るたんびに、今日は安井の顔が見えるか、明日は安井の声がするかと、毎日漠然とした予期を抱いては教室の戸を開けた。そうして毎日また漠然とした不足を感じては歸つて来た。もっとも最後の三四日における宗助は早く安井に会いたいと思うよりも、少し事情があるから、失敬して先へ立つとわざわざ通知しながら、いつまで待つても影も見せない彼の安否を、関係者としてむしろ氣にかけていたのである。彼は学友の誰彼に万遍なく安井の動静を聞いて見た。しかし誰も知るものはなかつた。ただ一人が、昨夕四条の人込の中で、安井によく似た浴衣がけの男を見たと答えた事があつた。しかし宗助にはそれが安井だろうとは信じられなかつた。ところがその話を聞いた翌日、すなわち宗助が京都へ着いてから約一週間の後、話の通りの服装をした安井が、突然宗助の所へ尋ねて来た。

宗助は着流しのまま麦藁帽を手に持った友達の姿を久し振に眺めた時、夏休み前の彼の顔の上に、新しい何物かがさらに付け加えられたような氣がした。安井は黒い髪に油を塗つて、目立つほど奇麗に頭を分けていた。そうして今床屋へ行つて来たところだと言ひらしい事を云つた。

その晩彼は宗助と一時間余りも雑談に耽つた。彼の重々しい口の利き方、自分を憚かつて、思い切れないような話の調子、「しかるに」と云う口癖、すべて平生の彼と異なる点はなかった。ただ彼はなぜ宗助より先へ横浜を立つたかを語らなかつた。また途中どこで暇取つたため、宗助より後れて京都へ着いたかを判然告げなかつた。しかし彼は三四日前ようや

く京都へ着いた事だけを明かにした。そうして、夏休み前にいた下宿へはまだ帰らずにいると云った。

「それでどこに」と宗助が聞いたとき、彼は自分の今泊っている宿屋の名前を、宗助に教えた。それは三条辺の三流位の家であった。宗助はその名前を知っていた。

「どうして、そんな所へ這入ったのだ。当分そこにいるつもりなのかい」と宗助は重ねて聞いた。安井はただ少し都合があつてとばかり答えたが、

「下宿生活はもうやめて、小さい家でも借りようかと思つてゐる」と思いがけない計画を打ち明けて、宗助を驚ろかした。

それから一週間ばかりの中に、安井はとうとう宗助に話した通り、学校近くの閑静な所に一戸を構えた。それは京都に共通な暗い陰気な作りの上に、柱や格子を黒赤く塗つて、わざと古臭く見せた狭い貸家であつた。門口に誰の所有ともつかない柳が一本あつて、長い枝がほとんど軒に触りそうに風に吹かれる様を宗助は見た。庭も東京と違って、少しは整つていた。石の自由になる所だけに、比較的大きなのが座敷の真正面に据えてあつた。その下には涼しそうな苔がいくらでも生えた。裏には敷居の腐つた物置が空のままがらんと立っている後に、隣の竹藪が便所の出入りに望まれた。

宗助のここを訪問したのは、十月に少し間のある学期の始めであつた。残暑がまだ強いので宗助は学校の往復に、蝙蝠傘を用いていた事を今に記憶していた。彼は格子の前で傘を畳んで、内を覗き込んだ時、粗い縞の浴衣を着た女の影をちらりと認めた。格子の内は三和土で、それが真直に裏まで突き抜けているのだから、這入つてすぐ右手の玄関めいた上り口

を上らない以上は、暗いながら一筋に奥の方まで見える訳であつた。宗助は浴衣の後影が、裏口へ出る所で消えてなくなるまでそこに立っていた。それから格子を開けた。玄関へは安井自身が現れた。

座敷へ通つてしばらく話していたが、さっきの女は全く顔を出さなかつた。声も立てず、音もさせなかつた。広い家ではないから、つい隣の部屋ぐらゐにいたのだらうけれども、いないのとまるで違わなかつた。この影のように静かな女が御米であつた。

安井は郷里の事、東京の事、学校の講義の事、何くれとなく話した。けれども、御米の事については一言も口にしなかつた。宗助も聞く勇氣に乏しかった。その日はそれなり別れた。

次の日二人が顔を合したとき、宗助はやはり女の事を胸の中に記憶していたが、口へ出しては一言も語らなかつた。安井も何気ない風をしていた。懇意な若い青年が心易立に話しかう遠慮のない題目は、これまで二人の間に何度となく交換されたにもかかわらず、安井はここへ来て、息詰つたごとくに見えた。宗助もそこを無理にこじ開けるほどの強い好奇心は有たなかつた。したがつて女は二人の意識の間に挟まりながら、つい話頭に上らないで、また一週間ばかり過ぎた。

その日曜に彼はまた安井を訪うた。それは二人の関係している或会について用事が起つたため、女とは全く縁故のない動機から出た淡泊な訪問であつた。けれども座敷へ上がつて、同じ所へ坐らせられて、垣根に沿うた小さな梅の木を見ると、この前来た時の事が明らかに思い出された。その日も

座敷の外は、しんと静であつた。宗助はその静かなうちに忍んでいる若い女の影を想像しない訳に行かなかつた。同時にその若い女はこの前と同じように、けつして自分の前に出て来る氣遣はあるまいと信じていた。

この予期の下に、宗助は突然御米に紹介されたのである。その時御米はこの間のように粗い浴衣を着てはいなかつた。これからよそへ行くか、または今外から帰つて来たと云う風な粧をして、次の間から出て来た。宗助にはそれが意外であつた。しかし大した綺羅を着飾つた訳でもないのに、衣服の色も、帯の光も、それほど彼を驚かすまでには至らなかつた。その上御米は若い女にありがちな嬌羞というものを、初対面の宗助に向つて、あまり多く表わさなかつた。ただ普通の人間を静にして言葉寡々に切りつめただけに見えた。人の前へ出ても、隣の室に忍んでいる時と、あまり区別のないほど落ちついた女だという事を見出した宗助は、それから推して、御米のひっそりしていたのは、穴勝恥かしがつて、人の前へ出るのを避けるためばかりでもなかつたんだと思つた。

安井は御米を紹介する時、

「これは僕の妹だ」という言葉を用いた。宗助は四五分対坐して、少し談話を取り換わしているうちに、御米の口調のどこにも、国訛らしい音の交つていない事に気がついた。

「今まで御国の方に」と聞いたたら、御米が返事をする前に安井が、

「いや横浜に長く」と答えた。

その日は二人して町へ買物に出ようと云うので、御米は不断着を脱ぎ更えて、暑いところをわざわざ新らしい白足袋

まで穿いたものと知れた。宗助はせっかくの出がけを喰い留めて、邪魔でもしたように氣の毒な思をした。

「なに宅を持ち立てだものだから、毎日毎日要るものを新らしく発見するんで、一週に一二返は是非都まで買い出しに行かなければならない」と云いながら安井は笑つた。

「途までいっしょに出掛けよう」と宗助はすぐ立ち上がった。ついでに家の様子を見てくれと安井の云うに任せた。宗助は次の間にある亜鉛の落しのついた四角な火鉢や、黄な安つぽい色をした真鍮の薬罐や、古びた流しの傍に置かれた新らしい過ぎる手桶を眺めて、門へ出た。安井は門口へ錠をおろして、鍵を裏の家へ預けるとか云つて、走けて行つた。宗助と御米は待つている間、二言、三言、尋常な口を利いた。

宗助はこの三四分間に取り換わした互の言葉を、いまだに覚えていた。それはただの男がただの女に対して人間たる親みを表わすために、やりとりする簡略な言葉に過ぎなかつた。形容すれば水のように浅く淡いものであつた。彼は今日まで路傍道上において、何かの折に触れて、知らない人を相手に、これほどの挨拶をどのくらい繰り返して来たか分らなかつた。

宗助は極めて短かいその時の談話を、一々思い浮べるたびに、その一々が、ほとんど無着色と云つていいほどに、平淡であつた事を認めた。そうして、かく透明な声が、二人の未来を、どうしてああ真赤に、塗りつけたかを不思議に思つた。今では赤い色が日を経て昔の鮮かさを失っていた。互を焚き焦がした燄は、自然と変色して黒くなっていた。二人の生活はかようにして暗い中に沈んでいた。宗助は過去を振り向いて、事の成行を逆に眺め返しては、この淡泊な挨拶が、いか

に自分らの歴史を濃く彩ったかを、胸の中であくまで味わいつつ、平凡な出来事を重大に変化させる運命の力を恐ろしかった。

宗助は二人で門の前に佇んでいる時、彼らの影が折れ曲つて、半分ばかり土塀に映つたのを記憶していた。御米の影が蝙蝠傘で遮ぎられて、頭の代りに不規則な傘の形が壁に落ちたのを記憶していた。少し傾むきかけた初秋の日が、じりじり二人を照り付けたのを記憶していた。御米は傘を差したまま、それほど涼しくもない柳の下に寄つた。宗助は白い筋を縁に取つた紫の傘の色と、まだ褪め切らない柳の葉の色を、一歩遠退いて眺め合わせた事を記憶していた。

今考えるとすべてが明らかであつた。したがって何らの奇もなかった。二人は土塀の影から再び現われた安井を待ち合わして、町の方へ歩いた。歩く時、男同志は肩を並べた。御米は草履を引いて後に落ちた。話も多くは男だけで受持つた。それも長くはなかった。途中まで来て宗助は一人分れて、自分の家へ歸つたからである。

けれども彼の頭にはその日の印象が長く残っていた。家へ歸つて、湯に入つて、灯火の前に坐つた後にも、折々色の着いた平たい画として、安井と御米の姿が眼先にちらついた。それのみか床に入つてからは、妹だと云つて紹介された御米が、果して本当の妹であらうかと考え始めた。安井に問いつめない限り、この疑の解決は容易でなかったけれども、臆断はすぐついた。宗助はこの臆断を許すべき余地が、安井と御米の間に充分存在し得るだらうぐらいに考えて、寝ながらおかしく思つた。しかもその臆断に、腹の中で徘徊する事の馬

鹿馬鹿しいのに気がついて、消し忘れた洋灯をようやくふつと吹き消した。

こう云う記憶の、しだいに沈んで痕迹もなくなるまで、相互の顔を見ずに過すほど、宗助と安井とは疎遠ではなかった。二人は毎日学校で出合うばかりでなく、依然として夏休み前の通り往来を続けていた。けれども宗助が行くたびに、御米は必ず挨拶に出るとは限らなかつた。三返に一返ぐらい、顔を見せないで、始ての時のように、ひっそり隣りの室に忍んでいる事もあつた。宗助は別にそれにも留めなかつた。それにもかかわらず、二人はようやく接近した。幾何ならずして冗談を云うほどの親みができた。

そのうちまた秋が来た。去年と同じ事情の下に、京都の秋を繰り返す興味に乏しかつた宗助は、安井と御米に誘われて茸狩に行った時、朗らかな空氣のうちにまた新しい香を見出した。紅葉も三人で観た。嵯峨から山を抜けて高雄へ歩く途中で、御米は着物の裾を捲くつて、長襦袢だけを足袋の上まで牽いて、細い傘を杖にした。山の上から一町も下に見える流れに日が射して、水の底が明らかに遠くから透かされた時、御米は

「京都は好い所ね」と云つて二人を顧みた。それをいっしょに眺めた宗助にも、京都は全く好い所のように思われた。こう揃つて外へ出た事も珍らしくはなかつた。家の中で顔を合わせる事はなおしばしばあつた。或時宗助が例のごとく安井を尋ねたら、安井は留守で、御米ばかり淋しい秋の中に取り残されたように一人坐つていた。宗助は淋しいでしよう云つて、つい座敷に上り込んで、一つ火鉢の両側に手を翳

しながら、思ったより長話をして帰った。或時宗助がぼかんとて、下宿の机に倚りかかったまま、珍らしく時間の使い方に困っていると、ふと御米がやって来た。そこまで買物に出たから、ついでに寄ったんだとか云って、宗助の薦める通り、茶を飲んだり菓子を食べたり、緩く寛ろいだ話をして帰った。

こんな事が重なって行くうちに、木の葉がいつの間にか落ちてしまった。そうして高い山の頂が、ある朝真白に見えた。吹き曝しの河原が白くなって、橋を渡る人の影が細く動いた。その年の京都の冬は、音を立てずに肌を透す陰忍な質のものであった。安井はこの悪性の寒気にあてられて、苛いインフルエンザに罹った。熱が普通の風邪よりもよほど高かったので、始は御米も驚ろいたが、それは一時の事で、すぐ退いたには退いたから、これでもう全快と思うと、いつまで立っても判然しなかった。安井は癩のような熱に絡みつかれて、毎日その差し引きに苦しんだ。

医者は少し呼吸器を冒されているようだと云って、切に転地を勧めた。安井は心ならず押入の中の柳行李に麻縄を掛けた。御米は手提鞆に錠をおろした。宗助は二人を七条まで見送って、汽車が出るまで室の中へ這入って、わざと陽気な話をした。プラットフォームへ下りた時、窓の内から、

「遊びに来たまえ」と安井が云った。

「どうぞ是非」と御米が言った。

汽車は血色の好い宗助の前をそろそろ過ぎて、たちまち神戸の方に向って煙を吐いた。

病人は転地先で年を越した。絵端書は着いた日から毎日の

ように寄こした。それにいつでも遊びに来いと繰り返して書いてない事はなかった。御米の文字も一二行ずつは必ず交っていた。宗助は安井と御米から届いた絵端書を別にして机の上に重ねて置いた。外から帰るとそれが直眼に着いた。時々はそれを一枚ずつ順に読み直したり、見直したりした。しまいにもうすっかり癒ったから帰る。しかしせっかくここまで来ながら、ここで君の顔を見ないのは遺憾だから、この手紙が着きしだい、ちよつとでいいから来いという端書が来た。無事と退屈を忌む宗助を動かすには、この十数言で充分であった。宗助は汽車を利用してその夜のうちに安井の宿に着いた。

明るい灯火の下に三人が待設けた顔を合わせた時、宗助は何よりもまず病人の色沢の回復して来た事に気がついた。立つ前よりもかえって好いくらいに見えた。安井自身もそんな心持がすると云って、わざわざ襯衣の袖を捲り上げて、青筋の入った腕を独で撫でていた。御米も嬉しうに眼を輝かした。宗助にはその活潑な目遣がことに珍らしく受取れた。今まで宗助の心に映じた御米は、色と音の撩乱する裏に立ってさえ、極めて落ちついていた。そうしてその落ちつきの大部分はやたらに動かさない眼の働らきから来たとしか思われなかった。

次の日三人は表へ出て遠く濃い色を流す海を眺めた。松の幹から脂の出る空気を吸った。冬の日には短い空を赤裸々に横切っておとなしく西へ落ちた。落ちる時、低い雲を黄に赤に竈の火の色に染めて行った。風は夜に入っても起らなかった。ただ時々松を鳴らして過ぎた。暖かい好い日が宗助の泊って

いる三日の間続いた。

宗助はもつと遊んで行きたいと云った。御米はもつと遊んで行きましよう云った。安井は宗助が遊びに来たから好い天気になったんだろうと云った。三人はまた行李と鞆を携えて京都へ帰った。冬は何事もなく北風を寒い国へ吹きやうた。山の上を明らかにした斑な雪がしだいに落ちて、後から青い色が一度に芽を吹いた。

宗助は當時を憶い出すたびに、自然の進行がそこではたりと留まって、自分も御米もたちまち化石してしまつたら、かつて苦はなかつたろうと思つた。事は冬の下から春が頭を擡げる時分に始まって、散り尽した桜の花が若葉に色を易える頃に終つた。すべてが生死の戦であつた。青竹を炙つて油を絞るほどの苦しみであつた。大風は突然不用意の二人を吹き倒したのである。二人が起き上がった時はどこもかしこもすでに砂だらけであつたのである。彼らは砂だらけになつた自分達を認めた。けれどもいつ吹き倒されたかを知らなかつた。

世間は容赦なく彼らに徳義上の罪を背負した。しかし彼ら自身は徳義上の良心に責められる前に、いったん茫然として、彼らの頭が確であるかを疑つた。彼らは彼らの眼に、不徳義な男女として恥ずべく映る前に、すでに不合理な男女として、不可思議に映つたのである。そこに言訳らしい言訳が何にもなかつた。だからそこに云うに忍びない苦痛があつた。彼らは残酷な運命が氣紛に罪もない二人の不意を打って、面白半分 穿の中に突き落したのを無念に思つた。

曝露の日がまともに彼らの眉間を射たとき、彼らはすでに

徳義的に瘰癧の苦痛を乗り切つていた。彼らは蒼白い額を素直に前に出して、そこに蝕に似た烙印を受けた。そうして無形の鎖で繋がれたまま、手を携えてどこまでも、いっしょに歩調を共にしなければならぬ事を見出した。彼らは親を棄てた。親類を棄てた。友達を棄てた。大きく云えば一般の社会を棄てた。もしくはそれらから棄てられた。学校からは無論棄てられた。ただ表向だけはこちらから退学した事になつて、形式の上に人間らしい迹を留めた。

これが宗助と御米の過去であつた。

十五

この過去を負わされた二人は、広島へ行つても苦しんだ。福岡へ行つても苦しんだ。東京へ出て来ても、依然として重い荷に抑えつけられていた。佐伯の家とは親しい関係が結ばなくなつた。叔父は死んだ。叔母と安之助はまだ生きているが、生きている間に打ち解けた交際はできないほど、もう冷淡の日を重ねてしまつた。今年はまだ歳暮にも行かなかつた。向からも来なかつた。家に引取つた小六さえ腹の底では兄に敬意を払つていなかった。二人が東京へ出たてには、單純な小供の頭から、正直に御米を悪んでいた。御米にも宗助にもそれがよく分つていた。夫婦は日の前に笑み、月の前に考えて、静かな年を送り迎えた。今年ももう尽きる間際まで来た。通 町では暮の内から門並揃の注連飾をした。往來の左右に何十本となく並んだ、軒より高い笹が、ことごとく寒い風に吹かれて、さらさらと鳴つた。宗助も二尺余りの細い松を

買って、門の柱に釘付にした。それから大きな赤い橙を御供の上に載せて、床の間に据えた。床にはいかがわしい墨画の梅が、蛤の格好をした月を吐いてかかっていた。宗助にはこの変な軸の前に、橙と御供を置く意味が解らなかった。

「いったいこりや、どう云う了見だね」と自分で飾りつけた物を眺めながら、御米に聞いた。御米にも毎年こうする意味はとんと解らなかった。

「知らないわ。ただそうしておけばいいのよ」と云って台所へ去った。宗助は、

「こうしておいて、つまり食うためか」と首を傾けて御供の位置を直した。

伸餅は夜業に俎を茶の間まで持ち出して、みんなで切った。庖丁が足りないの、宗助は始からしまいまで手を出さなかった。力のあるだけに小六が一番多く切った。その代り不同も一番多かった。中には見かけの悪い形のものも交った。変なのがでるたびに清が声を出して笑った。小六は庖丁の背に濡布巾をあてがって、硬い耳の所を断ち切りながら、「格好はどうでも、食いさいすればいいんだ」と、うんと力を入れて耳まで赤くした。

そのほかに迎年の支度としては、小殿原を熬って、煮染を重詰にするくらいなものであった。大晦日の夜に入って、宗助は挨拶かたがた屋賃を持って、坂井の家に行った。わざと遠慮して勝手口へ回ると、摺硝子へ明るい灯が映って、中はざわざわしていた。上り框に帳面を持って腰をかけた掛取らしい小僧が、立って宗助に挨拶をした。茶の間には主人も細君もいた。その片隅に印禅天を着た出入のものらしいのが、

下を向いて、小さい輪飾をいくつも拵えていた。傍に讓葉と裏白と半紙と鉢が置いてあった。若い下女が細君の前に坐って、釣銭らしい札と銀貨を畳に並べていた。主人は宗助を見て、

「いやどうも」と云った。「押しつまってさぞ御忙しいでしょう。この通りごたごたです。さあどうぞこちらへ。何ですな、御互に正月にはもう飽きましたな。いくら面白いものでも四十辺以上繰り返すと厭になりますね」

主人は年の送迎に煩らわしいような事を云ったが、その態度にはどこと指してくさくさしたところは認められなかった。言葉遣は活潑であった。顔はつやつやしていた。晩食に傾けた酒の勢が、まだ頬の上に差しているごとく思われた。宗助は貰い煙草をして二三十分ばかり話して帰った。

家では御米が清を連れて湯に行くとか云って、石鹼入を手拭に包んで、留守居を頼む夫の帰を待ち受けていた。

「どうなすったの、随分長かったわね」と云って時計を眺めた。時計はもう十時近くであった。その上清は湯の戻りに髪結の所へ回って頭を拵えるはずだそうであった。閑静な宗助の活計も、大晦日にはそれ相應の事件が寄せて来た。

「払はもう皆済んだのかい」と宗助は立ちながら御米に聞いた。御米はまだ薪屋が一軒残っていると答えた。

「来たら払ってちょうだい」と云って懷の中から汚れた男持の紙入と、銀貨入の墓口を出して、宗助に渡した。

「小六はどうした」と夫はそれを受取ながら云った。

「先刻大晦日の夜の景色を見て来るって出て行ったのよ。随分御苦労さまね。この寒いのに」と云う御米の後に追いて、

清は大きな声を出して笑った。やがて、「御若いから」と評しながら、勝手口へ行って、御米の下駄を揃えた。

「どこの夜景を見る気なんだ」

「銀座から日本橋通のだって」

御米はその時もう框から下りかけていた。すぐ腰障子を開ける音がした。宗助はその音を聞き送って、たった一人火鉢の前に坐って、灰になる炭の色を眺めていた。彼の頭には明日の日の丸が映った。外を乗り回す人の絹帽子の光が見えた。洋剣の音だの、馬の嘶だの、遣羽子の声が聞えた。彼は今から数時間の後また年中行事のうちで、もっとも人の心を新にすべく仕組まれた景物に出逢わなければならなかった。

陽気そうに見えるもの、賑かそうに見えるものが、幾組となく彼の心の前を通り過ぎたが、その中で彼の臂を把って、いっしょに引張って行こうとするものは一つもなかった。彼はただ饗宴に招かれない局外者として、酔う事を禁じられたごとくに、また酔う事を免かれた人であった。彼は自分と御米の生命を、毎年平凡な波瀾のうちに送る以上に、面前大した希望も持っていなかった。こうして忙がしい大晦日に、一人家を守る静かさが、ちょうど彼の平生の現実を代表していた。

御米は十時過に帰って来た。いつもより光沢の好い頬を灯に照らして、湯の温のまだ抜けない襟を少し開けるように襦袢を重ねていた。長い襟首がよく見えた。

「どうも込んで込んで、洗う事も桶を取る事もできないくらいなの」と始めて緩くり息を吐いた。

清の帰ったのは十一時過であった。これも綺麗な頭を障子から出して、ただ今、どうも遅くなりましたと挨拶をしたついでに、あれから二人とか三人とか待ち合したと云う話をした。

ただ小六だけは容易に帰らなかった。十二時を打ったとき、宗助はもう寝ようと云い出した。御米は今日に限って、先へ寝るのも変なものだと思って、できるだけ話を繋いでいた。小六は幸にして間もなく帰った。日本橋から銀座へ出てそれから、水天宮の方へ廻ったところが、電車が込んで何台も待ち合わせたために遅くなったという言訳をした。

白牡丹へ這入って、景物の金時計でも取ろうと思ったが、何も買うものがなかったので、仕方なしに鈴の着いた御手玉を一箱買って、そうして幾百となく器械で吹き上げられる風船を一つ攫んだら、金時計は当らないで、こんなものがあつたと云って、袂から倶楽部洗粉を一袋出した。それを御米の前に置いて、

「姉さんに上げましょう」と云った。それから鈴を着けた、梅の花の形に縫った御手玉を宗助の前に置いて、

「坂井の御嬢さんにでも御上げなさい」と云った。

事に乏しい一大家族の大晦日は、それで終りを告げた。

十六

正月は二日目の雪を率て注連飾の都を白くした。降りやんだ屋根の色がもとに復る前、夫婦は亜鉛張の庇を滑り落ちる雪の音に幾遍か驚ろかされた。夜半にはどさと云う響がこと

にはなはだしかった。小路の泥濘は雨上りと違つて一日や二日では容易に乾かなかつた。外から靴を汚して帰つて来る宗助が、御米の顔を見るたびに、

「こりやいけない」と云いながら玄関へ上つた。その様子があたかも御米を路を悪くした責任者と見做している風に受取られるので、御米はしまいに、

「どうも済みません。本当に御氣の毒さま」と云つて笑い出した。宗助は別に返すべき冗談も有たなかつた。

「御米ここから出かけるには、どこへ行くにも足駄を穿かなくっちゃならないように見えるだろう。ところが下町へ出ると大違だ。どの通もどの通もからからで、かえつて埃が立つくらいだから、足駄なんぞ穿いちゃきまりが悪くつて歩けやしない。つまりこう云う所に住んでいる我々は一世紀がた後れる事になるんだね」

こんな事を口にする宗助は、別に不足らしい顔もしていなかつた。御米も夫の鼻の穴を潜る煙草の煙を眺めるくらいな氣で、それを聞いていた。

「坂井さんへ行つて、そう云つていらつしやいな」と軽い返事をした。

「そうして屋賃でも負けて貰う事にしよう」と答えたまま、宗助はついに坂井へは行かなかつた。

その坂井には元日の朝早く名刺を投げ込んだだけで、わざと主人の顔を見ずに門を出たが、義理のある所を一日のうちにほぼ片づけて夕方帰つて見ると、留守の間に坂井がちゃんと来ていたので恐縮した。二日は雪が降つただけで何事もなく過ぎた。三日目の日暮に下女が使に来て、御閑ならば、旦

那樣と奥さまと、それから若旦那様には是非今晚御遊びにいらつしやるようにと云つて歸つた。

「何をするんだろう」と宗助は疑ぐつた。

「きつと歌加留多でしょう。小供が多いから」と御米が云つた。「あなた行つていらつしやいな」

「せつかくだから御前行くが好い。おれは歌留多は久しく取らないから駄目だ」

「私も久しく取らないから駄目ですわ」

二人は容易に行こうとはしなかつた。しまいに、では若旦那がみんなを代表して行くが宜からうという事になった。

「若旦那行つて来い」と宗助が小六に云つた。小六は苦笑いして立つた。夫婦は若旦那と云う名を小六に冠らせる事を大変な滑稽のように感じた。若旦那と呼ばれて、苦笑いする小六の顔を見ると、等しく声を出して笑い出した。小六は春らしい空氣の中から出た。そうして一町ほどの寒さを横切つて、また春らしい電灯の下に坐つた。

その晩小六は大晦日に買った梅の花の御手玉を袂に入れて、これは兄から差上げますとわざわざ断つて、坂井の御嬢さんに贈物にした。その代り帰りには、福引に當つた小さな裸人形を同じ袂へ入れて来た。その人形の額が少し欠けて、そこだけ墨で塗つてあつた。小六は真面目な顔をして、これが袖萩だそうですと云つて、それを兄夫婦の前に置いた。なぜ袖萩だか夫婦には分らなかつた。小六には無論分らなかつたのを、坂井の奥さんが叮嚀に説明してくれたそうであるが、それでも腑に落ちなかつたので、主人がわざわざ半切に洒落と本文を並べて書いて、帰つたらこれを兄さんと姉さんに御

見せなさいと云つて渡したとかいう話であつた。小六は袂を
探つてその書付を取り出して見せた。それに「此垣一重が黒鉄
の」と認めた後に括弧をして、（此餓鬼額が黒欠の）とつけ
加えてあつたので、宗助と御米はまた春らしい笑を洩らした。
「随分念の入った趣向だね。いったい誰の考だい」と兄が
聞いた。

「誰ですか」と小六はやっぱりつまらなそうな顔をして、
人形をそこへ放り出したまま、自分の室に歸つた。

それから二三日して、たしか七日の夕方に、また例の坂井
の下女が来て、もし御閑ならどうぞ御話にと、丁寧（ていねい）に主人の
命を伝えた。宗助と御米は洋灯（ランツ）を点けてちやうど晩食（ばんめし）を始め
たところであつた。宗助はその時茶碗を持ちながら、

「春もようやく一段落が着いた」と語つていた。そこへ清が
坂井からの口上を取り次いだので、御米は夫の顔を見て微笑
した。宗助は茶碗を置いて、

「まだ何か催おしがあるのかい」と少し迷惑（まづ）そうな眉をした。
坂井の下女に聞いて見ると、別に来客もなければ、何の支度
もないという事であつた。その上細君は子供を連れて親類へ
呼ばれて行つて留守だという話までした。

「それじゃ行こう」と云つて宗助は出掛けた。宗助は一般の
社交を嫌つていた。やむを得なければ会合の席などへ顔を出
す男でなかつた。個人としての朋友（ともだち）も多くは求めなかつた。
訪問（ほうもん）はする暇（ひま）を有（も）たなかつた。ただ坂井だけは取除（とりぬけ）であつた。
折々は用もないのにこつちからわざわざ出掛けて行つて、時
を潰（つぶ）して来る事さえあつた。その癖坂井は世の中でもっとも
社交的人であつた。この社交的な坂井と、孤独な宗助が二

人寄つて話ができるのは、御米にさえ妙に見える現象であつ
た。坂井は、

「あっちへ行きましょう」と云つて、茶の間を通り越して、
廊下伝いに小さな書齋へ入つた。そこには棕櫚（しやろ）の筆で書いた
ような、大きな硬い字が五字ばかり床の間にかかつていた。棚
の上に見事な白い牡丹（ぼたん）が活けてあつた。そのほか机でも蒲団（ふとん）
でもことごとく綺麗（きれい）であつた。坂井は始め暗い入口に立つて、
「さあどうぞ」と云いながら、どこかぴちりと振つて、電気
灯を点けた。それから、

「ちよつと待ちたまえ」と云つて、燐寸（マッヂ）で瓦斯（ガス）煖炉（だんろ）を焚（た）いた。
瓦斯煖炉は室に比例したごく小さいものであつた。坂井はし
かる後蒲団を薦めた。

「これが僕の洞窟（どうくつ）で、面倒になるとここへ避難するんです」
宗助も厚い綿（わた）の上で、一種の静かさを感じた。瓦斯の燃え
る音が微かにしてしだいに背中からほかほか煖まつて来た。

「ここにいとると、もうどことも交渉はない。全く気楽です。悠
くりしていらつしやい。實際正月と云うものは予想外に煩瑣（わづ）
いものですね。私も昨日（きのう）までほとんどへとへとに降参（こうさん）さ
せられました。新年が停滯（もたれ）しているのは実に苦しいですよ。それ
で今日の午（ひる）から、とうとう塵世（じんせい）を遠ざけて、病氣（びやうき）になつてぐ
つと寝込んでしまいました。今しがた眼を覚まして、湯に入
つて、それから飯を食つて、煙草（たばこ）を呑んで、気がついて見ると、
家内（かだい）が子供を連れて親類へ行つて留守なんでしょう。なるほ
ど静かなはずだと思ひましてね。すると今度は急に退屈（たいくつ）にな
つたのです。人間も随分わがままなものですよ。しかしいく
ら退屈（たいくつ）だつて、この上おめでたいものを、見たり聞いたりし

ちや骨が折れますし、また御正月らしいものを呑んだり食ったりするのも恐れますから、それで、御正月らしくない、と云うと失礼だが、まあ世の中とあまり縁のないあなた、と云ってもまだ失敬かも知れないが、つまり一口に云うと、超然派ちようぜんはの一人いちにんと話がして見たくなったんで、それでわざわざ使を上げたような訳なんです」と坂井は例の調子で、ことごとくすらすらしたものであった。宗助はこの楽天家の前では、よく自分の過去を忘れる事があった。そうして時によると、自分自分がもし順当に発展して来たら、こんな人物になりはしなかったろうかと考えた。

そこへ下女が三尺の狭い入口を開けて這入はいって来たが、改めて宗助に鄭重ていじゆうな御辞儀をした上、木皿のような菓子皿のようなものを、一つ前に置いた。それから同じ物をもう一つ主人の前に置いて、一口もものを云わずに退がった。木皿の上には護謨毬ゴムまりほどな大きな田舎饅頭いなかまんじゅうが一つ載のせてあった。それに普通の倍以上もあると思うれる楊枝ようじが添えてあった。「どうです暖かい内に」と主人が云ったので、宗助は始めてこの饅頭の蒸むして間もない新らしさに気がついた。珍らしそうに黄色い皮を眺めた。

「いやできたてじゃありません」と主人がまた云った。「実は昨夜ある所へ行さくやって、冗談じようだん半分に賞めたら、御土産おみやげに持っていらっしやいと云うから貰もらって来たんです。その時は全く暖たかだったんですがね。これは今上げようと思って蒸むし返さしたのです」

主人は箸はしとも楊枝ようじとも片のつかないもので、無雑作むざうさに饅頭を割わって、むしやむしや食い始めた。宗助も饗ひんに倣ならった。

その間に主人は昨夕ゆうべ行いった料理屋で逢あったとか云って妙な芸者の話をした。この芸者はポケット論語が好きで、汽車へ乗のったり遊びに行いったりするときは、いつでもそれを懐ふところにして出るそうであった。

「それでね孔子の門人のうちで、子路しろうが一番好すきだって云うんですがね。そのいわれを聞くと、子路と云う男は、一つ何か教おすわって、それをまだ行いわないうちに、また新しい事を聞くと苦にするほど正直だからだって云うんです。実のところ私も子路はあまりよく知らないから困こったが、何しろ一人好い人ができて、それと夫婦にならない前に、また新らしく好い人ができると苦になるようなものじゃないかって、聞いて見たんです……」

主人はこんな事をはなはだ気楽そうに述べ立てた。その話の様子からして考えると、彼はのべつにこういふ場所しつにゆうに入い出して、その刺戟しげきにはとうに麻痺まひしながら、因習の結果、依然として月に何度となく同じ事を繰くりり返かへしているらしかった。よく聞き糺ただして見ると、しかく平気な男も、時々は歡樂の飽満ほうまんに疲労して、書齋たかのなかで精神を休める必要が起るのだそうであった。

宗助はそういう方面にまるで経験のない男ではなかったのだ、強しいて興味を装よそおう必要もなく、ただ尋常な挨拶あいさつをするところが、かえって主人の氣に入るらしかった。彼は平凡な宗助の言葉のなかから、一種異彩のある過去を覗のぞくような素振そぶりを見せた。しかしそちらへは宗助が進すすみたがらない痕迹こんせきが少しでも出ると、すぐ話を転じた。それは政略よりもむしろ礼讓れいじやうからであった。したがって宗助には毫ごうも不愉快を与えな

った。

そのうち小六の噂が出た。主人はこの青年について、肉身の兄が見逃すような新しい観察を、二三有^もっていた。宗助は主人の評語を、当ると当たらないとに論なく、面白く聞いた。そのなかに、彼は年に合^あわしては複雑な実用に適^あしない頭を有^あっていないが、年よりも若い単純な性情を平気で露^{あら}わす子供じやないかという質問があつた。宗助はすぐそれを首肯^{うけが}した。しかし学校教育だけで社会教育のないものは、いくら年を取つてもその傾^{かたむき}があるだろうと答えた。

「さよう、それと反対で、社会教育だけあつて学校教育のないものは、随分複雑な性情を發揮する代りに、頭はいつまでも小供ですからね。かえつて始末が悪いかも知れない」

主人はここでちよつと笑つたが、やがて、

「どうです、私の所^{わたし}へ書生に寄こしちや、少しは社会教育になるかも知れない」と云つた。主人の書生は彼の犬が病気で病院へ這^{はい}入る一カ月前とかに、徴兵検査に合格して入^いり込んだ。ぎり今では一人もいないのだそうであつた。

宗助は小六の所置をつける好機会が、求めざるに先だつて、春と共に自^{おのず}から回^{めぐ}つて来たのを喜こんだ。同時に、今まで世間に向つて、積極的に好意と親切を要求する勇氣を有^もたなかつた彼は、突然この主人の申し出^{もう}に逢^いつて少しまごつくくらい驚ろいた。けれどもできるならなりたけ早く弟を坂井に預けて置いて、この變動から出る自分の余裕^{よゆう}に、幾分か安之助の補助を足して、そうして本人の希望通り、高等の教育を受けさせてやろうという分別をした。そこで打ち明けた話を腹藏なく主人にすると、主人はなるほどなるほどと聞いている

だけであつたが、しまいに雑作^{ぞうさく}なく、

「そいつは好いでしよう」と云つたので、相談はほぼその座で纏^{まと}まった。

宗助はそこで辞して帰ればよかつたのである。また辞して帰ろうとしたのである。ところが主人からまあ緩^{ゆる}くりなさいと云つて留められた。主人は夜は長い、まだ宵^{よい}だと云つて時計まで出して見せた。實際彼は退屈^{たいくつ}しなかつた。宗助も帰ればただ寝るよりほかに用のない身体^{からだ}なので、ついまた尻^{しつ}を据えて、濃い煙草^{たばこ}を新らしく吹かし始めた。しまいには主人の例に倣^{なら}つて、柔^ならかい座蒲團^{ざぶとん}の上で膝^{ひざ}さえ崩^{くず}した。

主人は小六の事に關聯して、

「いや弟^{わし}などを有^あつていると、随分厄介^{やっかい}なものですよ。私^{わたし}

も一人やくざなのを世話をした覚^{おぼ}えがありますかね」と云つて、自分の弟が大学にいたとき金のかかつた事などを、自分が学生時代の質朴^{しつぱく}さに比べていろいろ話した。宗助はこの派出^{はで}好^{ずき}な弟が、その後どんな徑路^{けいりょ}を取つて、どう發展したかを、氣味の悪い運命^{うなが}の意思を窺^{うかが}う一端として、主人に聞いて見た。

主人は卒然^{そつぜん}

「冒^{アドヴェンチュラー}険^{チャー}者^{しつぽ}」と、頭も尾^{しつぽ}もない一句を投^なげようように吐いた。

この弟は卒業後主人の紹介で、ある銀行に這^{はい}入つたが、何でも金を儲^{もう}けなくつちやいけないと口癖^{くはく}のように云つていた。それで、日露戦争後間もなく、主人の留めるのも聞かずに、大いに發展して見たいとかとなえてついに満洲^{まんしゅう}へ渡つたのだと云う。そこで何を始めるかと思うと、遼河^{りょうが}を利用して、豆粕^{まめかす}大豆^{だいず}を船^{ふね}で下^{くだ}す、大仕掛な運送業^{うんそうぎや}を經營して、たちまち失敗してしまつたのだそうである。元より当人は、資本主で

はなかったのだけれども、いよいよという曉に、勘定して見ると大きな欠損と事がきまったので、無論事業は継続する訳に行かず、当人は必然の結果、地位を失ったぎりになった。

「それから後私もどうしたかよく知らなかったんですが、その後ようやく聞いて見ると、驚ろきましたね。蒙古へ這入って漂流しているんです。どこまで山気があるんだか分らないんで、私も少々剣呑になつてゐるんですよ。それでも離れてゐるうちは、まあどうかしているだろうぐらいに思つて放っておきます。時たま音便があつたつて、蒙古という所は、水に乏しい所で、暑い時には往来へ泥溝の水を撒くとかね、またはその泥溝の水が無くなると、今度は馬の小便を撒くとか、したがつてはなはだ臭いとか、まあそんな手紙が来るだけですから、——そりやあ金の事も云つて来ますが、なに東京と蒙古だから打遣つておけばそれまでです。だから離れてさえいれば、まあいいんですが、そいつが去年の暮突然出て来ましてね」

主人は思いついたように、床の柱にかけた、綺麗な房のついた一種の裝飾物を取りおろした。

それは錦の袋に這入った一尺ばかりの刀であつた。鞘は何とも知れぬ緑色の雲母のようなものでできていて、その所々が三力所ほど巻いてあつた。中身は六寸ぐらいしかなかった。したがつて刃も薄かつた。けれども鞘の格好はあたかも六角の檜の棒のように厚かつた。よく見ると、柄の後に細い棒が二本並んで差さつていた。結果は鞘を重ねて離れないために銀の鉢巻をしたと同じであつた。主人は

「土産にこんなものを持って来ました。蒙古刀だそうですね」

と云いながら、すぐ抜いて見せた。後に差してあつた象牙のような棒も二本抜いて見せた。

「こりや箸ですよ。蒙古人は始終これを腰へぶら下げていて、いざ御馳走という段になると、この刀を抜いて肉を切つて、そうしてこの箸で傍から食うんだそうですね」

主人はことさらに刀と箸を両手に持つて、切つたり食つたりする真似をして見せた。宗助はひたすらにその精巧な作りを眺めた。

「まだ蒙古人の天幕に使うフェルトも貰いましたが、まあ昔の毛氈と變つたところありませんね」

主人は蒙古人の上手に馬を扱う事や、蒙古犬の瘠せて細長くて、西洋のグレー・ハウンドに似ている事や、彼らが支那人のためにだんだん押し狭められて行く事や、——すべて近頃あつちから歸つたという弟に聞いたままを宗助に話した。宗助はまた自分のいまだかつて耳にした事のない話だけに、一々少なからぬ興味を有つてそれを聞いて行つた。そのうちに、元来この弟は蒙古で何をしているのだろうという好奇心が出た。そこでちよつと主人に尋ねて見ると、主人は、「冒険者」と再び先刻の言葉 forcefully 強く繰り返した。「何をしているか分らない。私には、牧畜をやっています。しかも成功していますと云うんですがね、いっこう当にはなりません。今までもよく法螺を吹いて私を欺したもんです。それに今度東京へ出て来た用事と云うのがよっぽど妙です。何とか云う蒙古王のために、金を二万円ばかり借りたい。もし借してやらないと自分の信用に関わるつて奔走しているんですからね。そのとつぱじめに捕まつたのは私だが、いくら蒙古王

だって、いくら広い土地を抵当にするって、蒙古と東京じゃ催促さえできませんもの。で、私が断ると、蔭へ廻って妻に、兄さんはあれだから大きな仕事ができっこないって、威張っているんです。しようがない」

主人はここで少し笑ったが、妙に緊張した宗助の顔を見て、「どうです一遍逢って御覧になっちゃ、わざわざ毛皮の着いただぶだぶしたものなんか着て、ちよつと面白いですよ。何なら御紹介しましょう。ちょうど明後日の晩呼んで飯を食わせる事になっているから。――なに引つ掛っちゃいけませんかね。黙って向に喋舌らして、聞いている分には、少しも危険はありません。ただ面白いだけです」としきりに勧め出した。宗助は多少心を動かした。

「おいでになるのは御令弟だけですか」

「いやほかに一人弟の友達で向からいっしょに來たものが、来るはずになっています。安井とか云って私はまだ逢った事もない男ですが、弟がしきりに私に紹介したがるから、実はそれで二人を呼ぶ事にしたんです」

宗助はその夜蒼い顔をして坂井の門を出た。

十七

宗助と御米の一生を暗く彩どった関係は、二人の影を薄くして、幽霊のような思をどこかに抱かしめた。彼らは自己の心のある部分に、人に見えない結核性の恐ろしいものが潜んでいるのを、仄かに自覚しながら、わざと知らぬ顔に互と向き合って年を過した。

当初彼らの頭脳に痛く応えたのは、彼らの過が安井の前途に及ぼした影響であった。二人の頭の中で沸き返った凄惨泡のようなものがようやく静まった時、二人は安井もまた半途で学校を退いたという消息を耳にした。彼らは固より安井の前途を傷けた原因をなしたに違なかった。次に安井が郷里に帰ったという噂を聞いた。次に病気に罹って家に寝ているという報知を得た。二人はそれを聞きたびに重い胸を痛めた。最後に安井が満洲に行ったと云う音信が來た。宗助は腹の中で、病気はもう癒ったのだろうかと思った。または満洲行の方が嘘ではなからうかと考えた。安井は身体から云っても、性質から云っても、満洲や台湾に向く男ではなかったからである。宗助はできるだけ手を回して、事の真疑を探った。そうして、或る関係から、安井がたしかに奉天にいる事を確め得た。同時に彼の健康で、活潑で、多忙である事も確め得た。その時夫婦は顔を見合せて、ほつという息を吐いた。

「まあよかろう」と宗助が云った。

「病気よりはね」と御米が云った。

二人はそれから以後安井の名を口にするのを避けた。考え出す事さえもあえてしなかった。彼らは安井を半途で退学させ、郷里へ帰らせ、病気に罹らせ、もしくは満洲へ駆りやった罪に対して、いかに悔恨の苦しみを重ねても、どうする事もできない地位に立っていたからである。

「御米、御前信仰の心が起った事があるかい」と或時宗助が御米に聞いた。御米は、ただ、

「あるわ」と答えただけで、すぐ「あなたは」と聞き返した。

宗助は薄笑いをしたがり、何とも答えなかった。その代り推

して、御米の信仰について、詳しい質問も掛けなかった。御米には、それが仕合せかも知れなかった。彼女はその方面に、これというほど判然した凝り整った何物も有っていなかったからである。二人はとかくして会堂の腰掛にも倚らず、寺院の門も潜らずに過ぎた。そうしてただ自然の恵から来る月日と云う緩和剤の力だけで、ようやく落ちついた。時々遠くから不意に現れる訴も、苦しみとか恐れとかいう残酷の名を付けるには、あまり微かに、あまり薄く、あまりに肉体と慾得を離れ過ぎるようになった。必竟するに、彼らの信仰は、神を得なかったため、仏に逢わなかったため、互を目標として働らいた。互に抱き合つて、丸い円を描き始めた。彼らの生活は淋しいなりに落ちついて来た。その淋しい落ちつきのうちに、一種の甘い悲哀を味わった。文芸にも哲学にも縁のない彼らは、この味を舐め尽しながら、自分で自分の状態を得意がつて自覚するほどの知識を有たなかったから、同じ境遇にある詩人や文人などよりも、一層純粹であった。——これが七日の晩に坂井へ呼ばれて、安井の消息を聞くまでの夫婦の有様であった。

その夜宗助は家に帰って御米の顔を見るや否や、「少し具合が悪いから、すぐ寝よう」と云つて、火鉢に倚りながら、帰を待ち受けていた御米を驚ろかした。

「どうなすったの」と御米は眼を上げて宗助を眺めた。宗助はそこに突つ立っていた。

宗助が外から帰つて来て、こんな風をするのは、ほとんど御米の記憶にないくらい珍らしかった。御米は卒然何とも知れない恐怖の念に襲われたごとくに立ち上がったが、ほとん

ど器械的に、戸棚から夜具蒲団を取り出して、夫の云いつけ通り床を延べ始めた。その間宗助はやっぱり懷手をして傍に立っていた。そうして床が敷けるや否や、そこそこに着物を脱ぎ捨てて、すぐその中に潜り込んだ。御米は枕元を離れ得なかった。

「どうなすったの」

「何だか、少し心持が悪い。しばらくこうしてじっとしていたら、よくなるだろう」

宗助の答は半ば夜着の下から出た。その声が籠ったように御米の耳に響いた時、御米は済まない顔をして、枕元に坐つたなり動かなかった。

「あっちへ行つていてもいいよ。用があれば呼ぶから」

御米はようやく茶の間へ帰った。

宗助は夜具を被ったまま、ひとり硬くなつて眼を眠っていた。彼はこの暗い中で、坂井から聞いた話を何度となく反覆した。彼は満洲にいる安井の消息を、家主たる坂井の口を通して知ろうとは、今が今まで予期していなかった。もう少しの事で、その安井と同じ家主の家へ同時に招かれて、隣り合せか、向い合せに坐る運命になろうとは、今夜晩食を済ますまで、夢にも思いがけなかった。彼は寝ながら過去二三時間の経過を考えて、そのクライマックスが突如として、いかにも不意に起つたのを不思議に感じた。かつ悲しく感じた。彼はこれほど偶然な出来事を借りて、後から断りなしに足絡をかけなければ、倒す事のできないほど強いものとは、自分ながら任じていなかったのである。自分のような弱い男を放り出すには、もっと穩当な手段でたくさんでありそうなものだ

と信じていたのである。

小六こくから坂井の弟、それから満洲、蒙古もうこ、出京、安井、——こう談話の迹あとを辿れば辿るほど、偶然の度はあまりにはなはだしかった。過去の痛恨を新あらたにすべく、普通の人が滅多めったに出逢わないうこの偶然に出逢うために、千百人のうちから撰えり出されなければならぬほどの人物であつたかと思うと、宗助は苦しかった。また腹立たしかった。彼は暗い夜着の中で熱い息を吐いた。

この二三年の月日でようやく癒なおりかけた創口きずぐちが、急に疼うずき始めた。疼いたくに伴ともれて熱あつつて来た。再び創口が裂けて、毒のある風が容赦なく吹き込みそうになった。宗助はいつそのこと、万事を御米に打ち明けて、共に苦しみを分つて貰おうかと思つた。

「御米、御米」と二声呼んだ。

御米はすぐ枕元へ来て、上から覗のぞき込むように宗助を見た。宗助は夜具の襟えりから顔を全く出した。次の間の灯ひが御米の頬を半分照らしていた。

「熱い湯を一杯貰おう」

宗助はとうとう言おうとした事を言い切る勇氣を失つて、嘔うそを吐ついてごまかした。

翌日宗助は例のごとく起きて、平日と変る事なく食事を済ました。そうして給仕をしてくれる御米の顔に、多少安心の色が見えたのを、嬉うれしいような憐あわれなような一種の情緒じょうしよをもつて眺ながめた。

「昨ゆうべ夕は驚ろいたわ。どうなすつたのかと思つて」

宗助は下を向いて茶碗に注ついだ茶を呑のんだだけであつた。

何と答えていいか、適当な言葉を見出さなかつたからである。

その日は朝から風が吹き荒すさんで、折々埃ほこりと共に行く人の帽を奪つた。熱があると悪いから、一日休んだらと云う御米の心配を聞き捨てにして、例の通り電車へ乗つた宗助は、風の音と車の音の中に首を縮ちぢめて、ただ一つ所を見つめていた。降りる時、ひゅうという音がして、頭の上の針線はりぐねが鳴つたのに気がついて、空を見たら、この猛烈な自然の力の狂う間に、いつもより明らかな日がのそりと出ていた。風は洋袴ズボンの股またを冷たくして過ぎた。宗助にはその砂を捲まいて向うの堀の方へ進んで行く影が、斜めに吹かれる雨の脚あしのように判然はつきり見えた。

役所では用が手に着かなかつた。筆を持つて頼杖ほおづえを突いたまま何か考えた。時々は不必要な墨を妄みだりに磨すりおろした。煙草たばこはむやみに呑んだ。そうしては、思い出したように窓硝子まどガラスを通して外を眺めた。外は見るたびに風の世界であつた。宗助はただ早く歸りたかつた。

ようやく時間が来て家へ歸うちつたとき、御米は不安らしく宗助の顔を見て、

「どうもなくなつて」と聞いた。宗助はやむを得ず、どうもないが、ただ疲れたと答えて、すぐ炬燵こたつの中へ入つたなり、晩食ばんめしまで動かなかつた。そのうち風は日と共に落ちた。昼の反動で四隣あたりには急にひっそり静まつた。

「好い案排あんばいね、風が無くなつて。昼間のように吹かれると、家に坐つていても何だか氣味が悪くつてしようがないわ」

御米の言葉には、魔物でもあるかのように、風を恐れる調子があつた。宗助は落ちついて、

「今夜は少し暖たかいようだね。穏やかで好い御正月だ」と云った。飯を済まして煙草を一本吸う段になって、突然、

「御米、寄席へでも行って見ようか」と珍らしく細君を誘った。御米は無論否む理由を有たなかった。小六は義太夫などを聞くより、宅にいて餅でも焼いて食った方が勝手だというので、留守を頼んで二人出た。

少し時間が遅れたので、寄席はいっぱいであつた。二人は座蒲団を敷く余地もない一番後の方に、立膝をするように割り込まして貰った。

「大変な人ね」

「やっぱり春だから入るんだろう」

二人は小声で話しながら、大きな部屋にぎっしり詰まつた人の頭を見回した。その頭のうちで、高座に近い前の方は、煙草の煙で霞んでいるようにぼんやり見えた。宗助にはこの累々たる黒いものが、ことごとくこう云う娯楽の席へ来て、面白く半夜を潰す事のできる余裕のある人らしく思われた。彼はどの顔を見ても羨ましかった。

彼は高座の方を正視して、熱心に浄瑠璃を聞こうと力めた。けれどもいくら力めても面白くならなかった。時々眼を外らして、御米の顔を偷み見た。見るたびに御米の視線は正しい所を向いていた。傍に夫のいる事はほとんど忘れて、真面目に聴いているらしかった。宗助は羨やましい人のうちに、御米まで勘定しなければならなかった。

中入の時、宗助は御米に、

「どうだ、もう帰ろうか」と云い掛けた。御米はその唐突なのに驚ろかされた。

「厭なの」と聞いた。宗助は何とも答えなかった。御米は、「どうでもいいわ」と半分夫の意に忤らわれないような挨拶をした。宗助はせっかく連れて来た御米に対して、かえって気の毒な心が起った。とうとうしまいまで辛抱して坐っていた。家へ帰ると、小六は火鉢の前に胡坐を搔いて、背表紙の反り返るのも構わずに、手に持った本を上から翳して読んでいた。鉄瓶は傍へ卸したなり、湯は生温るく冷めてしまった。盆の上に焼き余りの餅が三切か四片載せてあつた。網の下から小皿に残った醤油の色が見えた。

小六は席を立て、

「面白かったですか」と聞いた。夫婦は十分ほど身体を炬燵で暖めた上すぐ床へ入った。

翌日になつても宗助の心に落ちつきが来なかった事は、ほぼ前の日と同じであつた。役所が退けて、例の通り電車へ乗ったが、今夜自分と前後して、安井が坂井の家へ客に来ると云う事を想像すると、どうしても、わざわざその人と接近するために、こんな速力で、家へ帰って行くのが不合理に思われた。同時に安井はその後どんなに変化したらうと思うと、よそから一目彼の様子が眺めたくもあつた。

坂井が一昨日の晩、自分の弟を評して、一口に「冒險者」と云った、その音が今宗助の耳に高く響き渡った。宗助はこの一語の中に、あらゆる自暴と自棄と、不平と憎悪と、乱倫と悖徳と、盲断と決行とを想像して、これらの一角に触れなければならぬほどの坂井の弟と、それと利害を共にすべく満洲からいっしょに出て来た安井が、いかなる程度の人物になつたかを、頭の中で描いて見た。描かれた画は無論

冒険者（アドヴェンチュラー）の字面の許す範囲内で、もっとも強い色彩を帯びたものであった。

かように、墮落の方面をとくに誇張した冒険者（アドヴェンチュラー）を頭の中で掙（こしら）え上げた宗助は、その責任を自身一人で全く負わなければならぬような気がした。彼はただ坂井へ客に来る安井の姿を一目見て、その姿から、安井の今日の人格（こうじん）を髣髴（ほうふつ）したかった。そうして、自分の想像ほど彼は墮落していないという慰藉（いしや）を得たかった。

彼は坂井の家の傍（そば）に立つて、向（むこう）に知れずに、他（ひと）を窺（うかが）うような便利な場所はあるまいかと考えた。不幸にして、身を隠すべきところを思いつき得なかった。もし日が落ちてから来るとすれば、こちらが認められない便宜（べんぎ）があると同時に、暗い中を通る人の顔の分らない不都合があった。

そのうち電車が神田へ来た。宗助はいつもの通りそこで乗り換えて家（うち）の方（うち）へ向いて行くのが苦痛（くるう）になった。彼の神経は一步でも安井の来る方角へ近づくに堪（た）えなかった。安井をよそながら見たいという好奇心は、始めからさほど強くなかっただけに、乗換（まぎわ）の間際（まぎわ）になって、全く抑（おさ）えつけられてしまった。彼は寒い町を多くの人のごとく歩いた。けれども多くの人のごとくに判然（はつきり）した目的（もく）は有（も）っていなかった。そのうち店に灯（ひ）が点（つ）いた。電車（でんしゃ）も灯火（あかり）を照（と）もした。宗助はある牛肉店に上がって酒を呑（の）み出した。一本は夢中に呑んだ。二本目は無理に呑んだ。三本目にも酔（よ）えなかった。宗助は背を壁に持たして、酔（よ）って相手のない人（ひと）のような眼（め）をして、ぼんやりどこかを見つめていた。

時刻が時刻なので、夕飯（ゆうめし）を食（く）いに来る客（きやく）は入れ代り立ち代

り来た。その多くは用弁（ようべん）的に飲食（いんし）を済（よ）まして、さっさと勘定（かんじよう）をして出て行くだけであった。宗助は周囲（しうい）のざわつく中に黙然（もくねん）として、他（ひと）の倍（ばい）も三倍（さんばい）も時（とき）を過（か）したごとくに感じた末（すえ）、ついに坐（ま）り切れずに席（せき）を立った。

表（うしろ）は左右（さゆう）から射（し）す店の灯（ひ）で明らかであった。軒先（けんせん）を通る人は、帽（ぼう）も衣装（いそう）もはつきり物色（ぶつしき）する事ができた。けれども広い寒（さ）さを照らすには余（あ）りに弱（よ）過ぎた。夜（よ）は戸（と）ごとの瓦斯（ガス）と電灯（でんとう）を閑（かん）却（かく）して、依然（いぜん）として暗（く）く大きく見えた。宗助はこの世界（せかい）と調和（てうわ）するほどな黒味（くろみ）の勝（か）った外套（まント）に包（か）まれて歩（あ）いた。その時（とき）彼は自分の呼吸（こそ）する空（く）気（き）さえ灰（はい）色（しき）になつて、肺（はい）の中（ちゆう）の血管（けっかん）に触（ふ）れるような気がした。

彼はこの晩（ばん）に限（かぎ）って、ベルを鳴（な）らして忙（いそ）がしそうに眼（め）の前（まへ）を往（い）ったり来（き）たりする電車（でんしゃ）を利用（りよう）する考（かんが）えが起（お）りなかつた。目的（もく）を有（も）って途（みち）を行（い）く人（ひと）と共に、抜（ぬ）目（め）なく足（あし）を運（は）ばす事（こと）を忘（わす）れた。しかも彼は根（ね）の締（しま）らない人間（にんげん）として、かく漂（ひょう）浪（ろう）の雛形（ひながた）を演（あ）じつつある自分の心（こころ）を省（かえり）みて、もしこの状態（じたい）が長（なが）く続（つづ）いたらどうしたらよからうと、ひそかに自分の未来（みらい）を案（あ）じ煩（わづら）った。今日（こんにち）までの経過（けいこ）から推（お）して、すべての創口（きずぐち）を癒（ゆ）合（ごう）するものは時（とき）日（じ）であるという格言（ごうげん）を、彼は自家（じか）の経験（けいけん）から割（わり）り出して、深く胸（むね）に刻（き）みつけていた。それが一（お）昨日（と）の晩（ばん）にすっかり崩（くず）れたのである。

彼は黒（くろ）い夜（よ）の中（ちゆう）を歩（あ）るきながら、ただどうかしてこの心（こころ）から逃（に）れ出（で）たいと思（おも）った。その心（こころ）はいかにも弱（よ）くて落（お）ちつかなくって、不安（ふあん）で不定（ふてい）で、度（ど）胸（むね）がな（な）き過（か）ぎて希（け）知（ち）に見（み）えた。彼は胸（むね）を抑（おさ）えつける一種（いっしゆう）の圧迫（あつぱく）の下（もと）に、いかにせば、今の自分（じぶん）を救（きう）う事（こと）ができるかという実（じ）際（さい）の方（かた）法（ぽう）のみを考（かん）えて、その圧

迫の原因になった自分の罪や過失は全くこの結果から切り放してしまった。その時の彼は他の事を考える余裕を失って、ことごとく自己本位になっていた。今までは忍耐で世を渡って来た。これからは積極的に人世觀を作り易えなければならなかった。そうしてその人世觀は口で述べるもの、頭で聞くものでは駄目であった。心の実質が太くなるものでなくては駄目であった。

彼は行く行く口の中で何遍も宗教の二字を繰り返した。けれどもその響は繰り返す後からすぐ消えて行つた。攫んだと思ふ煙が、手を開けるといつの間にか無くなっているように、宗教とははかない文字であった。

宗教と関聯して宗助は坐禅という記憶を呼び起した。昔し京都にいた時分彼の級友に相国寺へ行つて坐禅をするものがあつた。当時彼はその迂濶を笑つていた。「今の世に……」と思つていた。その級友の動作が別に自分と違つたところもないようなのを見て、彼はますます馬鹿馬鹿しい氣を起した。彼は今更ながら彼の級友が、彼の侮蔑に値する以上のある動機から、貴重な時間を惜しまずに、相国寺へ行つたのではなからうかと考え出して、自分の輕薄を深く恥じた。もし昔から世俗で云う通り安心とか立命とかいう境地に、坐禅の力で達する事ができるならば、十日や二十日役所を休んでも構わないからやってみようと思つた。けれども彼はこの道にかけては全くの門外漢であつた。したがって、これより以上明瞭な考も浮ばなかつた。

ようやく家へ辿り着いた時、彼は例のような御米と、例のような小六と、それから例のような茶の間と座敷と洋灯と筆笥

を見て、自分だけが例にない状態の下に、この四五時間を暮していたのだという自覺を深くした。火鉢には小さな鍋が掛けてあつて、その蓋の隙間から湯氣が立っていた。火鉢の傍には彼の常に坐る所に、いつもの座蒲団を敷いて、その前にちゃんと膳立がしてあつた。

宗助は糸底を上にしてわざと伏せた自分の茶碗と、この二三年来朝晩使い慣れた木の箸を眺めて、

「もう飯は食わないよ」と云つた。御米は多少不本意らしい風もした。

「おやそう。余り遅いから、おおかたどこかで召上がったろうとは思つたけれど、もしまだだといけないから」と云いながら、布巾で鍋の耳を撮んで、土瓶敷の上におろした。それから清を呼んで膳を台所へ退げさせた。

宗助はこういう風に、何ぞ事故ができて、役所の退出からすぐ外へ回つて遅くなる場合には、いつでもその顛末の大略を、帰宅早々御米に話すのを例にしていた。御米もそれを聞かないうちは氣がすまなかつた。けれども今夜に限って彼は神田で電車を降りた事も、牛肉屋へ上つた事も、無理に酒を呑んだ事も、まるで話したくなかつた。何も知らない御米はまた平常の通り無邪氣にそれからそれへと聞きたがつた。

「何別にこれという理由もなかつただけの事さ」——ついあすこいらで牛が食いたくなつただけの事さ」

「そうして御腹を消化するために、わざわざここまで歩いていらしたの」

「まあ、そうだ」

御米はおかしそうに笑つた。宗助はむしろ苦しかった。し

ばらくして、

「留守に坂井さんから迎いに来なかったかい」と聞いた。

「いいえ、なぜ」

「一昨日の晩行つたとき、御馳走するとか云っていたからさ」

「また？」

御米は少し呆れた顔をした。宗助はそれなり話を切り上げて寝た。頭の中をざわざわ何か通つた。時々眼を開けて見ると、例のごとく洋灯が暗くして床の間の上に載せてあった。御米はさも心地好さそうに眠っていた。ついこの間までは、自分の方が好く寝られて、御米は幾晩も睡眠の不足に悩まされたのであった。宗助は眼を閉じながら、明らかに次の間の時計の音を聞かなければならない今の自分をさらに心苦しく感じた。その時計は最初は幾つも続けざまに打つた。それが過ぎると、びんとただ一つ鳴つた。その濁つた音が彗星の尾のようにほうと宗助の耳朶にしばらく響いていた。次には二つ鳴つた。はなはだ淋しい音であった。宗助はその間に、何とかして、もっと鷹揚に生きて行く分別をしなければならなると云う決心だけをした。三時は朦朧として聞えたような聞えないようなうちに過ぎた。四時、五時、六時はまるで知らなかった。ただ世の中が膨れた。天が波を打って伸びかつ縮んだ。地球が糸で釣るした毬のごとくに大きな弧線を描いて空間に揺いた。すべてが恐ろしい魔の支配する夢であった。七時過に彼ははっとして、この夢から覚めた。御米がいつもの通り微笑して枕元に曲んでいた。冴えた日は黒い世の中を疾にどこかへ追いやっていた。

十八

宗助は一封の紹介状を懐にして山門を入った。彼はこれを同僚の知人の某から得た。その同僚は役所の往復に、電車の中で洋服の隠袋から菜根譚を出して読む男であった。こゝう云う方面に興味のない宗助は、固より菜根譚の何物なるかを知らなかった。ある日一つ車の腰掛に膝を並べて乗った時、それは何だと聞いて見た。同僚は小形の黄色い表紙を宗助の前に出して、こんな妙な本だと答えた。宗助は重ねてどんな事が書いてあるかと尋ねた。その時同僚は、一口に説明のできる格好な言葉を有つていなかったと見えて、まあ禅学の書物だろうというような妙な挨拶をした。宗助は同僚から聞いたこの返事をよく覚えていた。

紹介状を貰う四五日前、彼はこの同僚の傍へ行つて、君は禅学をやるのかと、突然質問を掛けた。同僚は強く緊張した宗助の顔を見てすこぶる驚ろいた様子であったが、いややらない、ただ慰み半分にあんな書物を読むだけだと、すぐ逃げてしまった。宗助は多少失望に弛んだ下唇を垂れて自分の席に帰った。

その日歸りがけに、彼らはまた同じ電車に乗り合わせた。先刻宗助の様子を、気の毒に観察した同僚は、彼の質問の奥に雑談以上のある意味を認めたものと見えて、前よりはもっと親切にその方面の話をして聞かした。しかし自分はいまだかつて参禅という事をした経験がないと自白した。もし詳しい話が聞きたければ、幸い自分の知り合によく鎌倉へ行く男

があるから紹介してやろうと云った。宗助は車の中でその人の名前と番地を手帳に書き留めた。そうして次の日同僚の手紙を持ってわざわざ回り道をして訪問に出かけた。宗助の懐にした書状はその折席上で認めて貰ったものであった。

役所は病氣になって十日ばかり休む事にした。御米の手前もやはり病氣だと取り繕った。

「少し脳が悪いから、一週間ほど役所を休んで遊んで来るよ」と云った。御米はこの頃の夫の様子はどこかに異状があるらしく思われるので、内心では始終心配していた矢先だから、平生煮え切らない宗助の果断を喜んだ。けれどもその突然なものにも全く驚ろいた。

「遊びに行くって、どこへいらっしゃるの」と眼を丸くしないばかりに聞いた。

「やっぱり鎌倉辺が好かろうと思っている」と宗助は落ちついて答えた。地味な宗助とハイカラな鎌倉とはほとんど縁の遠いものであった。突然二つのものを結びつけるのは滑稽であつた。御米も微笑を禁じ得なかつた。

「まあ御金持ね。私もいっしょに連れてってちょうだい」と云った。宗助は愛すべき細君のこの冗談を味わう余裕を有たなかつた。真面目な顔をして、

「そんな贅沢な所へ行くんじゃないよ。禅寺へ留めて貰って、一週間か十日、ただ静かに頭を休めて見るだけの事さ。それもはたして好くなるか、ならないか分らないが、空気のいい所へ行くと、頭には大変違ふと皆云うから」と弁解した。

「そりや違いますわ。だから行っていらっしゃいとも。今の本当の冗談よ」

御米は善良な夫に調戲つたのを、多少済まないように感じた。宗助はその翌日すぐ貰って置いた紹介状を懐にして、新橋から汽車に乗ったのである。

その紹介状の表には釈宜道様と書いてあつた。

「この間まで侍者をしていましたが、この頃では塔頭にある古い庵室に手を入れて、そこに住んでいるとか聞きました。どうですか、まあ着いたら尋ねて御覧なさい。庵の名はたしか一窓庵でした」と書いてくれる時、わざわざ注意があつたので、宗助は礼を云つて手紙を受取りながら、侍者だの塔頭だのという自分には全く耳新らしい言葉の説明を聞いて帰つたのである。

山門を入ると、左右には大きな杉があつて、高く空を遮っているために、路が急に暗くなつた。その陰気な空氣に触れた時、宗助は世の中と寺の中との区別を急に覺つた。静かな境内の入口に立った彼は、始めて風邪を意識する場合に似た一種の悪寒を催した。

彼はまず真直に歩るき出した。左右にも行手にも、堂のよなもののや、院のよなものがちよいちよい見えた。けれども人の出入はいっさいなかつた。ことごとく寂寞として錆び果てていた。宗助はどこへ行つて、宜道のいる所を教えて貰おうかと考えながら、誰も通らない路の真中に立って四方を見回した。

山の裾を切り開いて、一二丁奥へ上るように建てた寺だと思つて、後の方は樹の色で高く塞がっていた。路の左右も山続か丘陵の地勢に制せられて、けつして平ではないようであつた。その小高い所々に、下から石段を疊んで、寺らしい

門を高く構えたのが二三軒目に着いた。平地に垣を繞らして、点在しているのは、幾多もあった。近寄って見ると、いずれも門瓦の下に、院号やら庵号やらが額に掛けてあつた。

宗助は箔の剥げた古い額を一二枚読んで歩いたが、ふと一窓庵から先へ探し出して、もしそこに手紙の名宛の坊さんがいなかったら、もっと奥へ行つて尋ねる方が便利だろうと思いついた。それから逆戻りをして塔頭を一々調べにかかる、一窓庵は山門を這入るや否やすぐ右手の方の高い石段の上にあつた。丘外れなので、日当の好い、からりとした玄関先を控えて、後の山の懷に暖まっているような位置に冬を凌ぐ気色に見えた。宗助は玄関を通り越して庫裡の方から土間に足を入れた。上り口の障子の立てである所まで来て、たのむたのむと二三度呼んで見た。しかし誰も出て来てくれるものはなかつた。宗助はしばらくそこに立つたまま、中の様子を窺つていた。いつまで立っていても音沙汰がないので、宗助は不思議な思いをして、また庫裡を出て門の方へ引返した。すると石段の下から剃立の頭を青く光らした坊さんが上つて来た。年はまだ二十四五としか見えない若い色白の顔であつた。宗助は門の扉の所に待ち合わして、

「宜道さんとおっしゃる方はこちらにおいででしょうか」と聞いた。

「私が宜道です」と若い僧は答えた。宗助は少し驚ろいたが、また嬉しくもあった。すぐ懷中から例の紹介状を出して渡すと、宜道は立ちながら封を切つて、その場で読み下した。やがて手紙を巻き返して封筒へ入れると、

「ようこそ」と云つて、叮嚀に会釈したなり、先に立つて宗

助を導いた。二人は庫裡に下駄を脱いで、障子を開けて内へ這入った。そこには大きな囲炉裏が切つてあつた。宜道は鼠木綿の上に羽織つていた薄い粗末な法衣を脱いで釘に付けて、

「御寒うございましょう」と云つて、囲炉裏の中に深く埋けてあつた炭を灰の下から掘り出した。

この僧は若いに似合わずはなはだ落ちついた話振をする男であつた。低い声で何か受答えをした後で、にやりと笑う具合などは、まるで女のような感じを宗助に与えた。宗助は心のうちに、この青年がどういふ機縁の元に、思い切つて頭を剃つたものだろうかと考えて、その様子のしとやかなところを、何となく憐れに思った。

「大変御静なようですが、今日はどなたも御留守なんですか」「いえ、今日に限らず、いつも私一人です。だから用のあるときは構わず明け放しにして出ます。今もちよつと下まで行つて用を足して参りました。それがためせつかくおいでのところを失礼致しました」

宜道はこの時改めて遠来の人に対して自分の不在を詫びた。この大きな庵を、たった一人で預かっているさえ、相応に骨が折れるのに、その上に厄介が増したらさぞ迷惑だろうと、宗助は少し気の毒な色をほかに動かした。すると宜道は、

「いえ、ちつとも御遠慮には及びません。道のためでございまずから」とゆかしい事を云つた。そうして、目下自分の所に、宗助のほかには、まだ一人世話になつて居る居士の旨を告げた。この居士は山へ来てもう二年になるとかいう話であつた。宗助はそれから二三日して、始めてこの居士を見た

が、彼は剽軽な羅漢のような顔をしている氣樂そうな男であつた。細い大根を三四本ぶら下げて、今日は御馳走を買つて来た云つて、それを宜道に煮てもらつて食つた。宜道も宗助もその相伴をした。この居士は顔が坊さんらしいので、時々僧堂の衆に交つて、村の御齋などに出かける事があるとか云つて宜道が笑つていた。

そのほか俗人で山へ修業に来てゐる人の話もいろいろ聞いた。中に筆墨を商う男がいた。背中へ荷をいっぱい負つて、二十日なり三十日なり、そこから中回つて歩いて、ほぼ売り尽してしまふと山へ歸つて来て坐禅をする。それからしばらくして食うものがなくなると、また筆墨を背に載せて行商に出る。彼はこの両面の生活を、ほとんど循環小数のごとく繰り返して、飽く事を知らないのだと云う。

宗助は一見こだわりの無さそうなこれらの人の月日と、自分の内面にある今の生活とを比べて、その懸隔の甚だしいのに驚ろいた。そんな氣樂な身分だから坐禅ができるのか、あるいは坐禅をした結果そういう氣樂な心になれるのか迷つた。

「氣樂ではいけません。道楽にできるものなら、二十年も三十年も雲水をして苦しむものはありません」と宜道は云つた。

彼は坐禅をするときの一般の心得や、老師から公案の出事や、その公案に一生懸命嚙りついて、朝も晩も昼も夜も嚙りつづけに嚙らなくてはいけない事やら、すべて今の宗助には心元なく見える助言を与えた末、

「御案へ御案内しましょう」と云つて立ち上がった。

囲炉裏の切つてある所を出て、本堂を横に抜けて、その外れにある六畳の座敷の障子を縁から開けて、中へ案内された

時、宗助は始めて一人遠くに来た心持がした。けれども頭の中は、周囲の幽静な趣と反照するためか、かえつて町にいるときよりも動揺した。

約一時間もしたと思う頃宜道の足音がまた本堂の方から響いた。

「老師が相見になるそうでございますから、御都合が宜しければ参りましょう」と云つて、丁寧な敷居の上に膝を突いた。

二人はまた寺を空にして連立つて出た。山門の通りをほぼ一丁ほど奥へ来ると、左側に蓮池があつた。寒い時分だから池の中はただ薄濁りに淀んでゐるだけで、少しも清浄な趣はなかつたが、向側に見える高い石の崖外れまで、縁に欄干のある座敷が突き出しているところが、文人画にでもありそうな風致を添えた。

「あすこが老師の住んでいられる所です」と宜道は比較的新らしいその建物を指した。

二人は蓮池の前を通り越して、五六級の石段を上つて、その正面にある大きな伽藍の屋根を仰いだまま直左りへ切れた。玄関へ差しかかった時、宜道は

「ちよつと失礼します」と云つて、自分だけ裏口の方へ回つたが、やがて奥から出て来て、

「さあどうぞ」と案内をして、老師のいる所へ伴れて行つた。

老師というのは五十格好に見えた。赭黒い光沢のある顔をしてゐた。その皮膚も筋肉もことごとく緊つて、どこにも怠のないうところ、銅像のもたらす印象を、宗助の胸に彫りつけた。ただ唇があまり厚過ぎるので、そこに幾分の弛みが見えた。その代り彼の眼には、普通の人間にとうてい見るべ

からざる一種の精彩が閃めいた。宗助が始めてその視線に接した時は、暗中に卒然として白刃を見る思があった。

「まあ何から入っても同じであるが」と老師は宗助に向って云った。「父母未生以前本来の面目は何だか、それを一つ考えて見たら善かろう」

宗助には父母未生以前という意味がよく分らなかったが、何しろ自分と云うものは必竟何物だか、その本体を捕まえて見ると云う意味だろうと判断した。それより以上口を利くには、余り禅というものの知識に乏しかったので、黙ってまた宜道に伴れられて一窓庵へ帰って来た。

晩食の時宜道は宗助に、入室の時間の朝夕二回あることと、提唱の時間が午前である事などを話した上、

「今夜はまだ見解もできないかも知れませんが、明朝か明晩御誘い申しましょう」と親切に云ってくれた。それから最初のうちは、つめて坐わるのは難儀だから線香を立てて、それで時間を計って、少しずつ休んだら好かろうと云うような注意もしてくれた。

宗助は線香を持って、本堂の前を通って自分の室ときまつた六畳に這入って、ぼんやりして坐った。彼から云うといわゆる公案なるものの性質が、いかにも自分の現在と縁の遠いような気がしてならなかった。自分は今腹痛で悩んでいる。その腹痛と言う訴を抱いて来て見ると、あにはからんや、その対症療法として、むずかしい数学の問題を出して、まあこれでも考えたらよかろうと云われたと一般であった。考えろと云われれば、考えないでもないが、それは一応腹痛が治まってからの事でなくては無理であった。

同時に彼は勤を休んで、わざわざここまで来た男であった。紹介状を書いてくれた人、万事に気をつけてくれる宜道に対しても、あまりに軽卒な振舞はできなかった。彼はまず現在の自分が許す限りの勇気を提さげて、公案に向おうと決心した。それがいずれのところに彼を導びいて、どんな結果を彼の心に持ち来すかは、彼自身といえども全く知らなかった。彼は悟という美名に欺かれて、彼の平生に似合わぬ冒険を試みようとして企てたのである。そうして、もしこの冒険に成功すれば、今の不安な不定な弱々しい自分を救う事ができはしまいかと、はかない望を抱いたのである。

彼は冷たい火鉢の灰の中に細い線香を燻らして、教えられた通り座蒲団の上に半跏を組んだ。昼のうちはさまでとは思わなかった室が、日が落ちてから急に寒くなった。彼は坐りながら、背中のぞくぞくするほど温度の低い空氣に堪えなかった。

彼は考えた。けれども考える方向も、考える問題の実質も、ほとんど捕まえようのない空漠なものであった。彼は考えながら、自分は非常に迂闊な真似をしているのではなからうかと疑った。火事見舞に行く間際に、細かい地図を出して、仔細に町名や番地を調べているよりも、ずっと飛び離れた見当違の所作を演じているごとく感じた。

彼の頭の中をいろいろなものが流れた。そのあるものは明らかに眼に見えた。あるものは混沌として雲のごとくに動いた。どこから来てどこへ行くとも分らなかった。ただ先のが消える、すぐ後から次のものが現われた。そうして仕切りなしにそれからそれへと続いた。頭の往來を通るものは、

無限で無数で無尽蔵で、けっして宗助の命令によつて、留まる事も休む事もなかった。断ち切ろうと思えば思うほど、滾々として湧いて出た。

宗助は怖くなつて、急に日常の我を呼び起して、室の中を眺めた。室は微かな灯で薄暗く照らされていた。灰の中に立てた線香は、まだ半分ほどしか燃えていなかった。宗助は恐るべく時間の長いのに始めて気がついた。

宗助はまた考え始めた。すると、すぐ色のあるもの、形のあるものが頭の中を通り出した。ぞろぞろと群がる蟻のごとくに動いて行く、あとからまたぞろぞろと群がる蟻のごとくに現われた。じつとしてゐるのはただ宗助の身体だけであった。心は切ないほど、苦しいほど、堪えがたいほど動いた。

そのうちじつとしてゐる身体も、膝頭から痛み始めた。真直に延ばしてゐた脊髄がしだいしだいに前の方に曲つて来た。宗助は両手で左の足の甲を抱えるようにして下へおろした。

彼は何をする目的もなく室の中に立ち上がった。障子を明けて表へ出て、門前をぐるぐる駈け回つて歩きたくなくなった。夜はしんとしてゐた。寝ている人も起きてゐる人もどこにもおりそうには思えなかった。宗助は外へ出る勇気を失つた。じつと生きながら妄想に苦しめられるのはなお恐ろしかった。

彼は思い切つてまた新しい線香を立てた。そうしてまたほぼ前と同じ過程を繰り返した。最後に、もし考えるのが目的だとすれば、坐つて考えるのも寝て考えるのも同じだろうと分別した。彼は室の隅に畳んであつた薄汚ない蒲団を敷いて、その中に潜り込んだ。すると先刻からの疲れで、何を考へる暇もないうちに、深い眠りに落ちてしまった。

眼が覚めると枕元の障子がいつの間にか明るくなって、白い紙にやがて日の逼るべき色が動いた。昼も留守を置かずに済む山寺は、夜に入つても戸を閉てる音を聞かなかったのである。宗助は自分が坂井の崖下の暗い部屋に寝ていたのでない意識するや否や、すぐ起き上がった。縁へ出ると、軒端に高く大霸王樹の影が眼に映つた。宗助はまた本堂の仏壇の前を抜けて、囲炉裏の切つてある昨日の茶の間へ出た。そこには昨日の通り宜道の法衣が折釘にかけてあつた。そうして本人は勝手の竈の前に蹲踞まつて、火を焚いてゐた。宗助を見て、

「御早う」と慇懃に礼をした。「先刻御誘ひ申そうと思ひましたが、よく御寝のようでしたから、失礼して一人参りました」宗助はこの若い僧が、今朝夜明がたにすでに参禅を済まして、それから歸つて来て、飯を炊いでゐるのだという事を知つた。

見ると彼は左の手でしきりに薪を差し易えながら、右の手に黒い表紙の本を持つて、用の合間合間にそれを読んでゐる様子であつた。宗助は宜道に書物の名を尋ねた。それは碧巖集というむずかしい名前のものであつた。宗助は腹の中で、昨夕のように当途もない考に耽つて脳を疲らすより、いっそその道の書物でも借りて読む方が、要領を得る捷徑ではなからうかと思ひついた。宜道にそう云うと、宜道は一も二もなく宗助の考を排斥した。

「書物を読むのはごく悪うございます。有体に云うと、読書ほど修業の妨になるものは無いようです。私共でも、こうして碧巖などを読みますが、自分の程度以上のところになる

と、まるで見当が付きません。それを好加減に揣摩する癖がつくと、それが坐る時の妨になつて、自分以上の境界を予期して見たり、悟を待ち受けて見たり、充分突込んで行くべきところに頓挫が出来ます。大變毒になりますから、御止しになつた方がよいでしょう。もし強いて何か御読みになりたければ、禪関策進というような、人の勇気を鼓舞したり激励したりするものが宜しゅうございましょう。それだつて、ただ刺戟の方便として読むだけで、道その物とは無関係です」

宗助には宜道の意味がよく解らなかつた。彼はこの生若い青い頭をした坊さんの前に立つて、あたかも一個の低能児であるかのごとき心持を起した。彼の慢心は京都以来すでに銷磨し尽していた。彼は平凡を分として、今日まで生きて来た。聞達ほど彼の心に遠いものはなかつた。彼はただありのままの彼として、宜道の前に立つたのである。しかも平生の自分より遙かに無力無能な赤子であると、さらに自分を認めざるを得なくなつた。彼に取つては新らしい発見であつた。同時に自尊心を根絶するほどの発見であつた。

宜道が竈の火を消して飯をむらしている間に、宗助は台所から下りて庭の井戸端へ出て顔を洗つた。鼻の先にはすぐ雑木山が見えた。その裾の少し平な所を拓いて、菜園が拵えてあつた。宗助は濡れた頭を冷たい空氣に曝して、わざと菜園まで下りて行つた。そうして、そこに崖を横に掘つた大きな穴を見出した。宗助はしばらくその前に立つて、暗い奥の方を眺めていた。やがて、茶の間へ帰ると、囲炉裏には暖かい火が起つて、鉄瓶に湯の沸る音が聞えた。

「手がないものだから、つい遅くなりまして御氣の毒です。

すぐ御膳に致しましょう。しかしこんな所だから上げるものがなくって困ります。その代り明日あたりは御馳走に風呂でも立てましょう」と宜道が云つてくれた。宗助はありがたく囲炉裏の向に坐つた。

やがて食事を了えて、わが室へ歸つた宗助は、また父母未生以前と云う稀有な問題を眼の前に据えて、じつと眺めた。けれども、もともと筋の立たない、したがって発展のしようのない問題だから、いくら考えてもどこからも手を出す事はできなかった。そうして、すぐ考えるのが厭になつた。

宗助はふと御米にここへ着いた消息を書かなければならない事に気がついた。彼は俗用の生じたのを喜ぶごとくに、すぐ鞆の中から巻紙と封じ袋を取り出して、御米にやる手紙を書き始めた。まずこの閑静な事、海に近いせいか、東京よりはよほど暖かい事、空氣の清朗な事、紹介された坊さんの親切な事、食事の不味い事、夜具蒲団の綺麗に行かない事、などを書き連ねているうちに、はや三尺余りの長さになつたので、そこで筆を擱いたが、公案に苦しめられている事や、坐禅をして膝の関節を痛くしている事や、考えるためにますます神経衰弱が劇しくなりそうな事は、臆にも出さなかつた。彼はこの手紙に切手を貼つて、ポストに入れなければならぬ口実を求めて、早速山を下つた。そうして父母未生以前と、御米と、安井に、脅かされながら、村の中をうろついて歸つた。

午には、宜道から話のあつた居士に会つた。この居士は茶碗を出して、宜道に飯を盛つて貰うとき、憚り様とも何とも云わずに、ただ合掌して礼を述べたり、相図をしたりした。

このくらい静かに物事を為るのが法だとか云った。口を利かず、音を立てないのは、考えの邪魔になると云う精神からだそうであった。それほど真剣にやるべきものと、宗助は昨夜からの自分が、何となく恥ずかしく思われた。

食後三人は囲炉裏の傍でしばらく話した。その時居士は、自分が坐禅をしながら、いつか気がつかずにうとうと眠ってしまっていて、はっと正気に帰る間際に、おや悟ったなと喜ぶことがあるが、さていよいよ眼を開いて見ると、やっぱり元の通の自分なので失望するばかりだと云って、宗助を笑わした。こう云う気楽な考で、参禅している人もあると思うと、宗助も多少は寛ろいだ。けれども三人が分れ分れに自分の室に入る時、宜道が、

「今夜は御誘い申しますから、これから夕方までしつかり御坐りなさいまし」と真面目に勧めたとき、宗助はまた一種の責任を感じた。消化れない堅い団子が胃に滞おっているような不安な胸を抱いて、わが室へ帰って来た。そうしてまた線香を焚いて坐わり出した。その癖夕方までは坐り続けられなかった。どんな解答にしろ一つ拵らえておかなければならないと思ひながらも、しまいには根気が尽きて、早く宜道が夕食の報知に本堂を通り抜けて来てくれれば好いと、そればかり気にかかった。

日は懊悩と困憊の裡に傾むいた。障子に映る時の影がしだいに遠くへ立ち退くにつれて、寺の空気が床の下から冷え出した。風は朝から枝を吹かなかった。縁側に出て、高い底を仰ぐと、黒い瓦の小口だけが揃って、長く一列に見える外に、穏かな空が、蒼い光をわが底の方に沈めつつ、自分と薄くな

って行くところであった。

十九

「危険うございます」と云って宜道は一足先へ暗い石段を下りた。宗助はあとから続いた。町と違って夜になると足元が悪いので、宜道は提灯を点けてわずか一丁ばかりの路を照らした。石段を下り切ると、大きな樹の枝が左右から二人の頭に蔽い被さるように空を遮った。闇だけれども蒼い葉の色が二人の着物の織目に染み込むほどに宗助を寒がらせた。提灯の灯にもその色が多少映る感じがあった。その提灯は一方に大きな樹の幹を想像するせい、はなはだ小さく見えた。光の地面に届く尺数もわずかであった。照らされた部分は明るい灰色の断片となって暗い中にほっかり落ちた。そうして二人の影が動くに伴って動いた。

蓮池を行き過ぎて、左へ上る所は、夜はじめての宗助に取って、少し足元が滑かに行かなかった。土の中に根を食っている石に、一二度下駄の台を引っ掛けた。蓮池の手前から横に切れる裏路もあるが、この方は凸凹が多くて、慣れない宗助には近くても不便だろうと云うので、宜道はわざわざ広い方を案内したのである。

玄関を入ると、暗い土間に下駄がだいぶ並んでいた。宗助は曲んで、人の履物を踏まないようにそっと上へのぼった。室は八畳ほどの広さであった。その壁際に列を作って、六七人の男が一侧に並んでいた。中に頭を光らして、黒い法衣を着た僧も交っていた。他のものは大概袴を穿いていた。この六

七人の男は上り口と奥へ通ずる三尺の廊下口を残して、行儀よく鉤の手に並んでいた。そうして、一言も口を利かなかった。宗助はこれらの人の顔を一目見て、まずその峻刻なのに気を奪われた。彼らは皆固く口を結んでいた。事ありげな眉を強く寄せていた。傍にどんな人がいるか見向きもしなかった。いかなるものが外から入って来ても、全く注意しなかった。彼らは活きた彫刻のように己れを持して、火の氣のない室に肅然と坐っていた。宗助の感覚には、山寺の寒さ以上に、一種敵かな氣が加わった。

やがて寂寞の中に、人の足音が聞えた。初は微かに響いたが、しだいに強く床を踏んで、宗助の坐っている方へ近づいて来た。しまいに一人の僧が廊下口からぬつと現れた。そうして宗助の傍を通って、黙って外の暗がりへ抜けて行った。すると遠くの奥の方で鈴を振る音がした。

この時宗助と並んで厳肅に控えていた男のうちで、小倉の袴を着けた一人が、やはり無言のまま立ち上がって、室の隅の廊下口の真正面へ来て着座した。そこには高さ二尺幅一尺ほどの木の枠の中に、銅鑼のような形をした、銅鑼よりも、ずっと重くて厚そうなものがかかっていた。色は蒼黒く貧しい灯に照らされていた。袴を着けた男は、台の上にある撞木を取り上げて、銅鑼に似た鐘の真中を二つほど打ち鳴らした。そうして、ついと立って、廊下口を出て、奥の方へ進んで行った。今度は前と反対に、足音がだんだん遠くの方へ去るに従って、微かになった。そうして一番しまいにぴたりとどこかで留まった。宗助は坐ながら、はっとした。彼はこの袴を着けた男の身の上に、今何事が起りつつあるだろうかを想像

したのである。けれども奥はしんとして静まり返っていた。宗助と並んでいるものも、一人として顔の筋肉を動かすものはなかった。ただ宗助は心の中で、奥からの何物かを待ち受けた。すると忽然として鈴を振る響が彼の耳に応えた。同時に長い廊下を踏んで、こちらへ近づく足音がした。袴を着けた男はまた廊下口から現われて、無言のまま玄関を下りて、霜の裡に消え去った。入れ代ってまた新しい男が立って、最前の鐘を打った。そうして、また廊下を踏み鳴らして奥の方へ行った。宗助は沈黙の間に行われるこの順序を見ながら、膝に手を載せて、自分の番の来るのを待っていた。

自分より一人置いて前の男が立って行った時は、ややしばらくしてから、わつと云う大きな声が、奥の方で聞えた。その声は距離が遠いので、劇しく宗助の鼓膜を打つほど、強くは響かなかったけれども、たしかに精一杯威を振ったものであった。そうしてただ一人の咽喉から出た個人の特色を帯びていた。自分のすぐ前の人が立った時は、いよいよわが番が回って来たと云う意識に制せられて、一層落ちつきを失った。

宗助はこの間の公案に対して、自分だけの解答は準備していた。けれども、それははなはだ覺束ない薄手のものに過ぎなかった。室中に入る以上は、何か見解を呈しない訳に行かないので、やむを得ず納まらないところを、わざと納まったように取繕った、その場限りの挨拶であった。彼はこの心細い解答で、僥倖にも難関を通過して見たいなどとは、夢にも思い設けなかった。老師をごまかす氣は無論なかった。その時の宗助はもう少し真面目であったのである。単に頭から割り出した、あたかも画にかいた餅のような代物を持って、義

理にも室中に入らなければならぬ自分の空虚な事を恥じたのである。

宗助は人のするごとくに鐘を打った。しかも打ちながら、自分は人並にこの鐘を撞木で敲くべき権能がないのを知っていた。それを人並に鳴らして見る猿のごとき己れを深く嫌忌した。

彼は弱味のある自分に恐れを抱きつつ、入口を出て冷たい廊下へ足を踏み出した。廊下は長く続いた。右側にある室はことごとく暗かった。角を二つ折れ曲ると、向の外れの障子に灯影が差した。宗助はその敷居際へ来て留まった。

室中に入るものは老師に向つて三拝するのが礼であつた。拝しかたは普通の挨拶のように頭を畳に近く下げると同時に、両手の掌を上向に開いて、それを頭の左右に並べたまま、少し物を抱えた心持に耳の辺まで上げるのである。宗助は敷居際に跪ずいて形のごとく拝を行なつた。すると座敷の中で、「一拝で宜しい」と云う会釈があつた。宗助はあとを略して中へ入つた。

室の中はただ薄暗い灯に照らされていた。その弱い光は、いかに大字な書物をも披見せしめぬ程度のものであつた。宗助は今日までの経験に訴えて、これくらい微かな灯火に、夜を営なむ人間を憶い起す事ができなかった。その光は無論月よりも強かつた。かつ月のごとく蒼白い色ではなかつた。けれどももう少しで朦朧の境に沈むべき性質のものであつた。

この静かな判然しない灯火の力で、宗助は自分を去る四五尺の正面に、宜道のいわゆる老師なるものを認めた。彼の顔は例によつて鑄物のように動かなかつた。色は銅であつた。

彼は全身に渋に似た柿に似た茶に似た色の法衣を纏っていた。足も手も見えなかつた。ただ頸から上が見えた。その頸から上が、嚴肅と緊張の極度に安んじて、いつまで経つても変る恐を有せざるごとくに人を魅した。そうして頭には一本の毛もなかつた。

この面前に氣力なく坐つた宗助の、口にした言葉はただ一句で尽きた。

「もっと、ぎろりとしたところを持つて来なければ駄目だ」とたちまち云われた。「そのくらいな事は少し学問をしたものなら誰でも云える」

宗助は喪家の犬のごとく室中を退いた。後に鈴を振る音が烈しく響いた。

二十

障子の外で野中さん、野中さんと呼ぶ声が二度ほど聞えた。宗助は半睡の裡にはいと応えたつもりであつたが、返事を仕切らない先に、早く知覚を失つて、また正体なく寝入ってしまった。

二度目に眼が覚めた時、彼は驚ろいて飛び起きた。縁側へ出ると、宜道が鼠木綿の着物に襷を掛けて、甲斐甲斐しくそこいらを拭いていた。赤く凍んだ手で、濡雑巾を絞りながら、例のごとく柔和しいにこやかな顔をして、

「御早う」と挨拶した。彼は今朝もまたとくに参禅を済ました後、こうして庵に帰つて働いていたのである。宗助はわざわざ呼び起されても起き得なかつた自分の怠慢を省みて、全

くきまりの悪い思をした。

「今朝もつい寝忘れて失礼しました」

彼はこそそ勝手口から井戸端の方へ出た。そうして冷たい水を汲んでできるだけ早く顔を洗った。延びかかった髯が、頬の辺で手を刺すようにざらざらしたが、今の宗助にはそれを苦にするほどの余裕はなかった。彼はしきりに宜道と自己とを対照して考えた。

紹介状を貰うときに東京で聞いたところによると、この宜道という坊さんは、大変性質のいい男で、今では修業もだいでき上がっていると云う話だったが、会って見ると、まるで一丁字もない小廝のように丁寧であつた。こうして襷掛で働いているところを見ると、どうしても一個の独立した庵の主人らしくはなかった。納所とも小坊主とも云えた。

この矮小な若僧は、まだ出家をしない前、ただの俗人としてここへ修業に来た時、七日の間結跏したぎり少しも動かなかったのである。しまいには足が痛んで腰が立たなくなつて、廁へ上る折などは、やつとの事壁伝いに身体を運んだのである。その時分の彼は彫刻家であつた。見性した日に、嬉しさの余り、裏の山へ馳け上つて、草木国土悉皆成仏と大きな声を出して叫んだ。そうしてついに頭を剃ってしまった。

この庵を預かるようになってから、もう二年になるが、まだ本式に床を延べて、楽に足を延ばして寝た事はないと云つた。冬でも着物のまま壁に倚れて坐睡するだけだと云つた。侍者をしていた頃などは、老師の憤鼻禪まで洗わせられたと云つた。その上少しの暇を偷んで坐りでもすると、後から来て意地の悪い邪魔をされる、毒吐かれる、頭の剃り立てには

何の因果で坊主になったかと悔む事が多かったと云つた。

「ようやくこの頃になって少し楽になりました。しかしまだ先がございます。修業は実際苦しいものです。そう容易にできるものなら、いくら私共が馬鹿だって、こうして十年も二十年も苦しまつてございません」

宗助はただ惘然とした。自己の根氣と精力の足りない事はがゆく思う上に、それほど歳月を掛けなければ成就できないものなら、自分は何しにこの山の中までやって来たか、それからが第一の矛盾であつた。

「けつして損になる氣遣はございません。十分坐れば、十分の功があり、二十分坐れば二十分の徳があるのは無論です。その上最初を一つ奇麗にぶち抜いておけば、あとはこう云う風に始終ここにおいでにならないでも済みますから」

宗助は義理にもまた自分の室へ歸つて坐らなければならなかつた。

こんな時に宜道が来て、
「野中さん提唱です」と誘つてくれると、宗助は心から嬉しい氣がした。彼は禿頭を捕まえるような手の着けどころのな難題に悩まされて、坐ながらじつと煩悶するのを、いかにも切なく思った。どんなに精力を消耗する仕事でもいいから、もう少し積極的に身体を働かしたく思った。

提唱のある場所は、やはり一窓庵から一町も隔っていた。蓮池の前を通り越して、それを左へ曲らずに真直に突き当たると、屋根瓦を厳めしく重ねた高い軒が、松の間に仰がれた。宜道は懷に黒い表紙の本を入れていた。宗助は無論手ぶらであつた。提唱と云うのが、学校でいう講義の意味である事

さえ、ここへ来て始めて知った。

室は高い天井に比例して広くかつ寒かった。色の変った畳の色が古い柱と映り合って、昔を物語るように寂び果てていた。そこに坐っている人々も皆地味に見えた。席次不同に思いい思いの座を占めてはいるが、高声に語るもの、笑うものは一人もなかった。僧は皆紺麻の法衣を着て、正面の曲衆の左右に列を作って向い合せに並んだ。その曲衆は朱で塗ってあった。

やがて老師が現われた。畳を見つめていた宗助には、彼がどこを通過して、どこからここへ出たかさっぱり分らなかった。ただ彼の落ちつき払って曲衆に倚る重々しい姿を見た。一人の若い僧が立ちながら、紫の袈紗を解いて、中から取り出した書物を、恭しく卓上に置くところを見た。またその礼拝して退ぞく態を見た。

この時堂上の僧は一斉に合掌して、夢窓国師の遺誠を誦し始めた。思ひ思ひに席を取った宗助の前後にいる居士も皆同音に調子を合せた。聞いていると、経文のような、普通の言葉のような、一種の節を帯びた文字であった。

「我に三等の弟子あり。いわゆる猛烈にして諸縁を放下し、專一に己事を究明するこれを上等と名づく。修業純ならず駁雑学を好む、これを中等と云う」と云々という、余り長くはないうものであった。宗助は始め夢窓国師の何人なるかを知らなかった。宜道からこの夢窓国師と大燈国師とは、禅門中興の祖であると言ふ事を教わったのである。平生跛で充分に足を組む事ができないのを憤って、死ぬ間際に、今日こそおれの意のごとくに見せると云いながら、悪い方の足を無理

に折っぺしよって、結跏したため、血が流れて法衣を煮染ましたという大燈国師の話もその折宜道から聞いた。

やがて提唱が始まった。宜道は懷から例の書物を出して、頁を半ば擦らして宗助の前へ置いた。それは宗門無尽燈論と云う書物であった。始めて聞きに出た時、宜道は、

「ありがたい結構な本です」と宗助に教えてくれた。白隠和尚の弟子の東嶺和尚とかいう人の編輯したもので、重に禅を修行するものが、浅い所から深い所へ進んで行く径路やら、それに伴なう心境の変化やらを秩序立てて書いたものらしかった。

中途から顔を出した宗助には、よくも解せなかったけれども、講者は能弁の方で、黙って聞いているうちに、大変面白いところがあった。その上参禅の士を鼓舞するためか、古来からこの道に苦しんだ人の閱歷譚などを取り交ぜて、一段の精彩を着けるのが例であった。この日もその通りであったが、或所へ来ると、突然語調を改めて、

「この頃室中に来て、どうも妄想が起つていけないなどと訴えるものがあるが」と急に入室者の不熱心を戒しめ出したので、宗助は覚えすぎくりとした。室中に入つて、その訴をなしたものは実に彼自身であった。

一時間の後宜道と宗助は袖をつらねてまた一窓庵に帰った。その帰り路に宜道は、

「ああして提唱のある時に、よく参禅者の不心得を諷せられます」と云った。宗助は何も答えなかった。

そのうち、山の中の日は、一日一日と経^たつた。御米^{およめ}からはかなり長い手紙がもう二本来た。もっとも二本とも新たに宗助^{そうすけ}の心を乱すような心配事は書いてなかった。宗助は常の細君^{こぎみ}の心に似ずついに返事を出すのを怠^{おこ}つた。彼は山を出る前に、何とかこの間の問題に片をつけなければ、せつかく来た甲斐^{かい}がないような、また宜道^{ぎどう}に対してすまないような気がしていた。眼が覚^さめてゐる時は、これがために名状しがたい一種の圧迫を受けつづけに受けた。したがって日が暮れて夜が明けて、寺で見る太陽の数が重なるにつけて、あたかも後から追いかけられでもするごとく気を焦^いつた。けれども彼は最初の解決よりほかに、一步もこの問題にちかづく術^{すべ}を知らなかった。彼はまたいくら考えてもこの最初の解決は確なものであると信じていた。ただ理窟^{りくつ}から割り出したのだから、腹の足^{たし}にはいつこうならなかった。彼はこの確なものを放り出して、さらにまた確なものを求めようとした。けれどもそんなものは少しも出て来なかつた。

彼は自分の室^{へや}で独り考^ひえた。疲れると、台所から下りて、裏の菜園へ出た。そうして崖^{がけ}の下に掘った横穴の中へ這入^{はい}つて、じつと動かずにいた。宜道は気が散るようでは駄目だと云った。だんだん集注して凝^こり固まって、しまいに鉄の棒のようにならなくては駄目だと云った。そう云う事を聞けば聞くほど、実際にそうなるのが、困難になった。

「すでに頭の中に、そうしようと云う下心があるからいけな

いのです」と宜道がまた云つて聞かした。宗助はいよいよ窮した。忽然^{こつぜん}安井の事を考え出した。安井がもし坂井の家へ頻繁^{ひんぱん}に出入^{でいり}でもするようになって、当分満洲へ帰らないとすれば、今のうちあの借家^{しゃくや}を引き上げて、どこかへ転宅するのが上分^{じやうぶん}だらう。こんな所にぐずぐずしているより、早く東京へ歸つてその方の所置をつけた方がまだ實際的かも知れない。緩^{ゆる}くり構えて、御米にでも知れるとまた心配が殖^ふえるだけだと思つた。

「私のようなものにはとうてい悟^{さと}は開かれそうに有りません」と思いつめたように宜道を捕^とまえて云つた。それは歸る二三日前の事であつた。

「いえ信念さえあれば誰でも悟れます」と宜道は躊躇^{ちゆうちゆう}もなく答えた。「法華^{ほっけ}の凝^こり固まりが夢中に太鼓を叩^{たた}くようにやって御覧なさい。頭の巔^{てん}辺から足の爪先までがことごとく公案で充実したとき、俄然^{がぜん}として新天地が現前するのでございます」宗助は自分の境遇やら性質が、それほど盲目的に猛烈な働^{はたらき}をあえてするに適しない事を深く悲しんだ。いわんや自分のこの山で暮らすべき日はすでに限られていた。彼は直截^{ちやくせつ}に生活^{かつどう}の葛藤^{かつとう}を切り払うつもりで、かえって迂濶^{うかつ}に山の中へ迷い込んだ愚物^{ぐぶつ}であつた。

彼は腹の中でこう考えながら、宜道の面前で、それだけの事を言い切る力がなかった。彼は心からこの若い禅僧の勇氣と熱心と真面目^{まじめ}と親切とに敬意を表していたのである。

「道は近きであり、かえってこれを遠きに求むという言葉があるが實際です。つい鼻の先にあるのですけれども、どうしても気がつきません」と宜道はさも残念そうであつた。宗助

はまた自分の室に退いて線香を立てた。

こう云う状態は、不幸にして宗助の山を去らなければならぬ日まで、目に立つほどの新生面を開く機会なく続いた。いよいよ出立の朝になって宗助は潔よく未練を抛棄した。

「永々御世話になりました。残念ですが、どうも仕方がありません。もう当分御眼にかかる折もございますまいから、随分御機嫌よう」と宜道に挨拶をした。宜道は気の毒そうであった。

「御世話どころか、万事不行届でさぞ御窮屈でございましたろう。しかしこれほど御坐りになつてもだいぶ違います。わざわざおいでになつただけの事は充分ございます」と云つた。しかし宗助にはまるで時間を潰しに來たような自覺が明らかであつた。それをこう取り繕うて云つて貰うのも、自分の腑甲斐なさからであると、独り恥じ入つた。

「悟の遅速は全く人の性質で、それだけでは優劣にはなりません。入りやすくても後で塞えて動かない人もありますし、また初め長く掛かつて、いよいよと云う場合に非常に痛快にできるものもあります。けつして失望なさる事はございません。ただ熱心が大切です。亡くなられた洪川和尚などは、もと儒教をやられて、中年からの修業でございましたが、僧になつてから三年の間と云うものまるで一則も通らなかつたです。それで私は業が深くて悟れないのだと云つて、毎朝廁に向つて礼拝されたくらいでありましたが、後にはあのような知識になられました。これなどはもっとも好い例です」

宜道はこんな話をして、暗に宗助が東京へ歸つてからも、全くこの方を断念しないようにあらかじめ間接の注意を与え

るように見えた。宗助は謹んで、宜道のいう事に耳を借した。けれども腹の中では大事がもうすでに半分去つたごとくに感じた。自分は門を開けて貰いに來た。けれども門番は扉の向側にいて、敲いてもついに顔さえ出してくれなかつた。ただ、「敲いても駄目だ。独りで開けて入れ」と云う声が聞えただけであつた。彼はどうしたらこの門の門を開ける事ができるかを考えた。そうしてその手段と方法を明らかに頭の中で拵えた。けれどもそれを實地に開ける力は、少しも養成する事ができなかった。したがつて自分の立つてゐる場所は、この問題を考へない昔と毫も異なるところがなかつた。彼は依然として無能無力に鎖ざされた扉の前に取り残された。彼は平生自分の分別を便に生きて來た。その分別が今は彼に崇つたのを口惜く思つた。そうして始から取捨も商量も容れない愚なものの一徹一図を羨んだ。もしくは信念に篤い善男善女の、知慧も忘れ思議も浮ばぬ精進の程度を崇高と仰いだ。彼自身は長く門外に佇立むべき運命をもつて生れて來たものらしかつた。それは是非もなかつた。けれども、どうせ通れない門なら、わざわざそこまで辿りつくのが矛盾であつた。彼は後を顧みた。そうしてとうていまた元の路へ引き返す勇氣を有たなかつた。彼は前を眺めた。前には堅固な扉がいつまでも展望を遮ぎつていた。彼は門を通る人ではなかつた。また門を通らないで済む人でもなかつた。要するに、彼は門の下に立ち竦んで、日の暮れるのを待つべき不幸な人であつた。

宗助は立つ前に、宜道と連れだつて、老師の許へちよつと暇乞に行つた。老師は二人を蓮池の上の、縁に勾欄の着いた

座敷に通した。宜道は自ら次の間に立って、茶を入れて出た。「東京はまだ寒いでしょう」と老師が云った。「少しでも手がかりができてからだ」と、帰ったあとも楽だけれども。惜しい事で」

宗助は老師のこの挨拶に対して、丁寧（ていねい）に礼を述べて、また十日前に潜（くぐ）った山門を出た。藁（わら）を圧する杉の色が、冬を封じて黒く彼の後（うしろ）に聳（そび）えた。

二十二

家の敷居を跨（また）いだ宗助は、己（おの）れにさえ憫然（びんぜん）な姿を描（えが）いた。

彼は過去十日間毎朝頭を冷水で濡（ぬ）らしたなり、いまだかつて櫛（くし）の齒を通した事がなかった。髭（ひげ）は固（もと）より剃（そ）る暇（いとま）を有（も）たなかった。三度とも宜道（ぎどう）の好意で白米の炊（かし）いだのを食べたには食べたが、副食物と云っては、菜の煮たのか、大根の煮たのぐらいなものであった。彼の顔は自（おの）から蒼（あお）かった。出る前よりも多少面（おも）裏（うら）れていた。その上彼は一窓庵で考えつづけに考えた習慣がまだ全く抜け切らなかった。どこかに卵を抱（いだ）く牝（め）鶏（どり）のような心持が残って、頭が平生の通り自由に働（はたら）けなかった。

その癖（くせ）一方では坂井の事が氣にかかった。坂井と云うよりも、坂井のいわゆる冒（アドヴェンチュアラー）険（けん）者として宗助の耳に響いたその弟（おと）と、その弟の友達として彼の胸を騒（さわ）がした安井の消息が氣にかかった。けれども彼は自身に家主の宅へ出向いて、それを聞き糺（ただ）す勇氣を有（も）たなかった。間接にそれを御米（おやね）に問うことはなおできなかった。彼は山にいる間さえ、御米がこの事件について何事も耳にしてくれなければいいがと氣遣（きづ）かない日

はなかったくらいである。宗助は年来住み慣れた家の座敷に坐（ま）って、

「汽車に乗ると短かい道中でも氣のせいか疲れるね。留守中に別段変った事はなかったかい」と聞いた。實際彼は短かい汽車旅行にさえ堪（た）えかねる顔つきをしていた。

御米はいかな場合にも夫の前に忘れなかった笑顔さえ作り得（え）なかった。と云って、せっかく保養に行（い）った転地先から今歸（か）って来たばかりの夫に、行かない前よりかえって健康が悪（わる）くなったらしいとは、氣の毒で露骨に話し悪（わる）かった。わざと活澆（かつじょう）に、

「いくら保養でも、家（うち）へ歸ると、少しは氣疲（きづ）かれますものよ。けれどもあなたは余（あ）まり爺（じい）々汚（よ）いわ。後生（ごしょう）だから一休（ひとやすみ）したら御湯（ごとう）に行（い）って頭（かぶ）を刈（刈）って髭（ひげ）を剃（す）って来てちょうだい」と云いながら、わざわざ机の引出から小さな鏡を出して見せた。

宗助は御米の言葉を聞いて、始めて一窓庵の空氣を風で払（はら）ったような心持がした。一たび山を出て家へ歸ればやはり元の宗助であった。

「坂井さんからはその後何とも云って来ないかい」

「いいえ何とも」

「小六（ころう）の事も」

「いいえ」

その小六は図書館へ行（い）って留守だった。宗助は手拭（てぬぐい）と石鹼（シヤボン）を持って外へ出た。

明る日役所へ出ると、みんなから病氣はどうだと聞かれた。中には少し瘡（や）せたようですねと云うものもあった。宗助にはそれが無意識の冷評の意味に聞えた。菜根譚（さいこんたん）を読む男はただ

どうです旨く行きましたかと尋ねた。宗助はこの間にもだいぶ痛い思をした。

その晩はまた御米と小六から代る代る鎌倉の事を根掘り葉掘り問われた。

「気楽でしょうね。留守居も何もおかないで出られたら」と御米が云った。

「それで一日いくら出すと置いてくれるんです」と小六が聞いた。「鉄砲でも担いで行つて、猟でもしたら面白からう」とも云った。

「しかし退屈ね。そんなに淋しくつちや。朝から晩まで寝ていらつしやる訳にも行かないでしょう」と御米がまた云った。「もう少し滋養物が食える所でなくつちやあ、やつぱり身体によくないでしょう」と小六がまた云った。

宗助はその夜床の中へ入つて、明日こそ思い切つて、坂井へ行つて安井の消息をそれとなく聞き糺して、もし彼がまだ東京にいて、なおしばしば坂井と往復があるようなら、遠くの方へ引越してしまおうと考えた。

次の日は平凡に宗助の頭を照らして、事なき光を西に落した。夜に入つて彼は、

「ちよつと坂井さんまで行つて来る」と云い捨てて門を出た。月のない坂を上つて、瓦斯灯に照らされた砂利を鳴らしながら潜戸を開けた時、彼は今夜ここで安井に落ち合うような万一はまず起らないだろうと度胸を据えた。それでもわざと勝手口へ回つて、御客来ですかと聞くことは忘れなかった。

「よくおいでです。どうも相変らず寒いじゃありませんか」と云う常の通り元氣の好い主人を見ると、子供を大勢自分の

前へ並べて、その中の一人と掛声をかけながら、じゃん拳をやっていた。相手の女の子の年は、六つばかりに見えた。赤い幅のあるリボンで蝶々のように頭の上にくつつけて、主人に負けないほどの勢で、小さな手を握り固めてさつと前へ出した。その断然たる様子と、その握り拳の小ささと、これに反して主人の仰山らしく大きな拳骨が、対照になつて皆の笑を惹いた。火鉢の傍に見ていた細君は、

「そら今度こそ雪子の勝だ」と云つて愉快そうに綺麗な歯を露わした。子供の膝の傍には白だの赤だの藍だの硝子玉がたくさんあった。主人は、

「とうとう雪子に負けた」と席を外して、宗助の方を向いたが、「どうですまた洞窟へでも引き込みますかな」と云つて立ち上がった。

書斎の柱には、例のごとく錦の袋に入れた蒙古刀が振ら下がっていた。花活にはどこで咲いたか、もう黄色い菜の花が挿してあった。宗助は床柱の中途を華やかに彩どる袋に眼を着けて、

「相変らず掛かっておりますな」と云った。そうして主人の気色を頭の奥から窺った。主人は、

「ええちと物数奇過ぎますね、蒙古刀は」と答えた。「ところが弟の野郎そんな玩具を持って来ては、兄貴を籠絡するつもりだから困りものじゃありませんか」

「御舎弟はその後どうなさいました」と宗助は何気ない風を示した。

「ええようやく四五日前帰りました。ありや全く蒙古向ですね。御前のような夷狄は東京にや調和しないから早く帰れっ

たら、私もそう思うって帰って行きました。どうしても、ありや万里の長城の向側にいるべき人物ですよ。そうしてゴビの沙漠の中で金剛石でも捜していればいいんです」

「もう一人の御伴侶は」

「安井ですか、あれも無論いっしょです。ああなると落ちついちやいられないと見えますね。何でも元は京都大学にいたこともあるんだとか云う話ですが。どうして、ああ変化したものですかね」

宗助は腋の下から汗が出た。安井がどう変って、どう落ちつかないのか、全く聞く気にはならなかった。ただ自分が主人に安井と同じ大学にいた事を、まだ洩らさなかったのを天祐のようにありがたく思った。けれども主人はその弟と安井とを晩餐に呼ぶとき、自分をこの二人に紹介しようと申し出た男である。辞退をしてその席へ顔を出す不面目だけはやっと免かれたようなものの、その晩主人が何かの機会について自分の名を二人に洩らさないとは限らなかった。宗助は後、暗い人の、変名を用いて世を渡る便利を切に感じた。彼は主人に向って、「あなたはもしや私の名を安井の前で口にしませんか」と聞いて見たくて堪らなかった。けれども、それだけではどうしても聞けなかった。

下女が平たい大きな菓子皿に妙な菓子を盛って出た。一丁の豆腐ぐらいな大きな金玉糖の中に、金魚が二足透いて見えるのを、そのまま庖丁の刃を入れて、元の形を崩さずに、皿に移したものであった。宗助は一目見て、ただ珍らしいと感じた。けれども彼の頭はむしろ他の方面に気を奪われていた。すると主人が、

「どうです一つ」と例の通りまず自分から手を出した。

「これはね、昨日ある人の銀婚式に呼ばれて、貰って来たのだから、すこぶるおめでたいのです。あなたも一切ぐらい肖ってもいいでしょう」

主人は肖りたい名の下に、甘垂るい金玉糖を幾切か頼張った。これは酒も呑み、茶も呑み、飯も菓子も食えるようにできた、重宝で健康な男であった。

「何実を云うと、二十年も三十年も夫婦が皺だらけになって生きていたって、別におめでたくもありませんが、そこが物は比較的地方でね。私はいつか清水谷の公園の前を通って驚ろいた事がある」と変な方面へ話を持って行った。こういう風に、それからそれへと客を飽かせないように引張って行くのが、社交になれた主人の平生の調子であった。

彼の云うところによると、清水谷から弁慶橋へ通じる泥溝のような細い流の中に、春先になると無数の蛙が生れるのだそうである。その蛙が押し合い鳴き合って生長するうちに、幾百組か幾千組の恋が泥渠の中で成立する。そうしてそれらの愛に生きるものが重ならないばかりに隙間なく清水谷から弁慶橋へ続いて、互に睦まじく浮いていると、通り掛りの小僧だの閑人が、石を打ちつけて、無残にも蛙の夫婦を殺して行くものだから、その数がほとんど勘定し切れないほど多くなるのだそうである。

「死屍累々とはあの事です。それが皆夫婦なんだから實際気の毒ですよ。つまりあすこを二三丁通るうちに、我々は悲劇にいくつ出逢うか分らないんです。それを考えると御互は実に幸福でさあ。夫婦になつてるのが悪らしいって、石で頭

を破られる恐れは、まあ無いですからね。しかも双方ともに二十年も三十年も安全なら、全くおめでたいに違ありませんよ。だから一切ぐらい肖っておく必要もあるでしょう」と云って、主人はわざと箸で金玉糖を挟んで、宗助の前に出した。宗助は苦笑しながら、それを受けた。

こんな冗談交りの話を、主人はいくらでも続けるので、宗助はやむを得ず或る辺までは釣られて行った。けれども腹の中はけっして主人のように太平楽には行かなかった。辞して表へ出て、また月のない空を眺めた時は、その深く黒い色の下に、何とも知れない一種の悲哀と物凄さを感じた。

彼は坂井の家に、ただいやしくも免かれんとする料簡で行った。そうして、その目的を達するために、恥と不愉快を忍んで、好意と真率の氣に充ちた主人に対して、政略的に談話を駆った。しかも知ろうと思う事はことごとく知る事ができなかった。己れの弱点に付いては、一言も彼の前に自白するの勇氣も必要も認めなかった。

彼の頭を掠めんとした雨雲は、辛うじて、頭に触れずに過ぎたらしかった。けれども、これに似た不安はこれから先何度でも、いろいろな程度において、繰り返さなければすまないような虫の知らせがどこかにあった。それを繰り返させるのは天の事であった。それを逃げて回るのは宗助の事であった。

二十三

月が変ってから寒さがだいぶ緩んだ。官吏の増俸問題につ

れて必然起るべく、多数の噂に上った局員課員の淘汰も、月末までにほぼ片づいた。その間ぼつりぼつりと首を斬られる知人や未知人の名前を絶えず耳にした宗助は、時々家へ帰って御米に、

「今度はおれの番かも知れない」と云う事があった。御米はそれを冗談とも聞き、また本氣とも聞いた。まれには隠れた未来を故意に呼び出す不吉な言葉とも解釈した。それを口にする宗助の胸の中にも、御米と同じような雲が去来した。

月が改って、役所の動揺もこれで一段落だと沙汰せられた時、宗助は生き残った自分の運命を顧りみて、当然のようにも思った。また偶然のようにも思った。立ちながら、御米を見下して、

「まあ助かった」とむずかし氣に云った。その嬉しくも悲しくもない様子が、御米には天から落ちた滑稽に見えた。

また二三日して宗助の月給が五円昇った。

「原則通り二割五分増さないでも仕方があるまい。休められた人も、元給のままでいる人もたくさんあるんだから」と云った宗助は、この五円に自己以上の価値をもたらし帰ったごとく満足の色を見せた。御米は無論の事心のうちに不足を訴えるべき余地を見出さなかった。

翌日の晩宗助はわが膳の上に頭つきの魚の、尾を皿の外に躍らす態を眺めた。小豆の色に染まった飯の香を嗅いだ。御米はわざわざ清をやって、坂井の家に引き移った小六を招いた。小六は、

「やあ御馳走だなあ」と云って勝手から入って来た。

梅がちらはらと眼に入るようになった。早いのはすでに色

を失なつて散りかけた。雨は煙るように降り始めた。それが霽はれて、日に蒸むされるとき、地面からも、屋根からも、春の記憶を新にすべき湿気がむらむらと立ち上のぼつた。背戸せどに干した雨傘あまがさに、小犬がじゃれかかつて、蛇じやの目の色がきらきらする所に陽炎かげろうが燃えるごとく長閑のどかに思われる日もあつた。

「ようやく冬が過ぎたようね。あなた今こん度の土曜に佐伯さえきの叔母さんのところへ回つて、小六さんの事をきめていらつしやいよ。あんまりいつまでも放つておくと、また安やすさんが忘れてしまうから」と御米が催促した。宗助は、

「うん、思い切つて行つて来よう」と答えた。小六は坂井の好意で、その書生に住み込んだ。その上に宗助と安之助が、不足のところを分担する事ができたらと小六に云つて聞かしたのは、宗助自身であつた。小六は兄の運動を待たずに、すぐ安之助に直談判じきだんぱんをした。そうして、形式的に宗助の方から依頼すればすぐ安之助が引き受けるまでに自分で埒らちを明けたのである。

小康はかくして事を好まない夫婦の上に落ちた。ある日曜の午宗助は久しぶりに、四日目の垢あかを流すため横町の洗場に行つたら、五十ばかりの頭を剃そつた男と、三十代の商人あきんどらしい男が、ようやく春らしくなつたと云つて、時候の挨拶あいさつを取り換わしていた。若い方が、今朝始めて鶯うぐいすの鳴声を聞いたと話すと、坊さんの方が、私わたしは二三日前にも一度聞いた事があると答えていた。

「まだ鳴きはじめてだから下手だね」

「ええ、まだ充分に舌したが回りません」

宗助は家うちへ歸つて御米にこの鶯の問答を繰り返して聞かせ

た。御米は障子しょうじの硝子がらすに映る麗うつくかな日影をすかして見て、「本当にありがたいわね。ようやくの事春になつて」と云つて、晴れ晴れしい眉まゆを張つた。宗助は縁に出て長く延びた爪を剪きりながら、

「うん、しかしまたじき冬になるよ」と答えて、下を向いたまま鉈はさみを動かしていた。